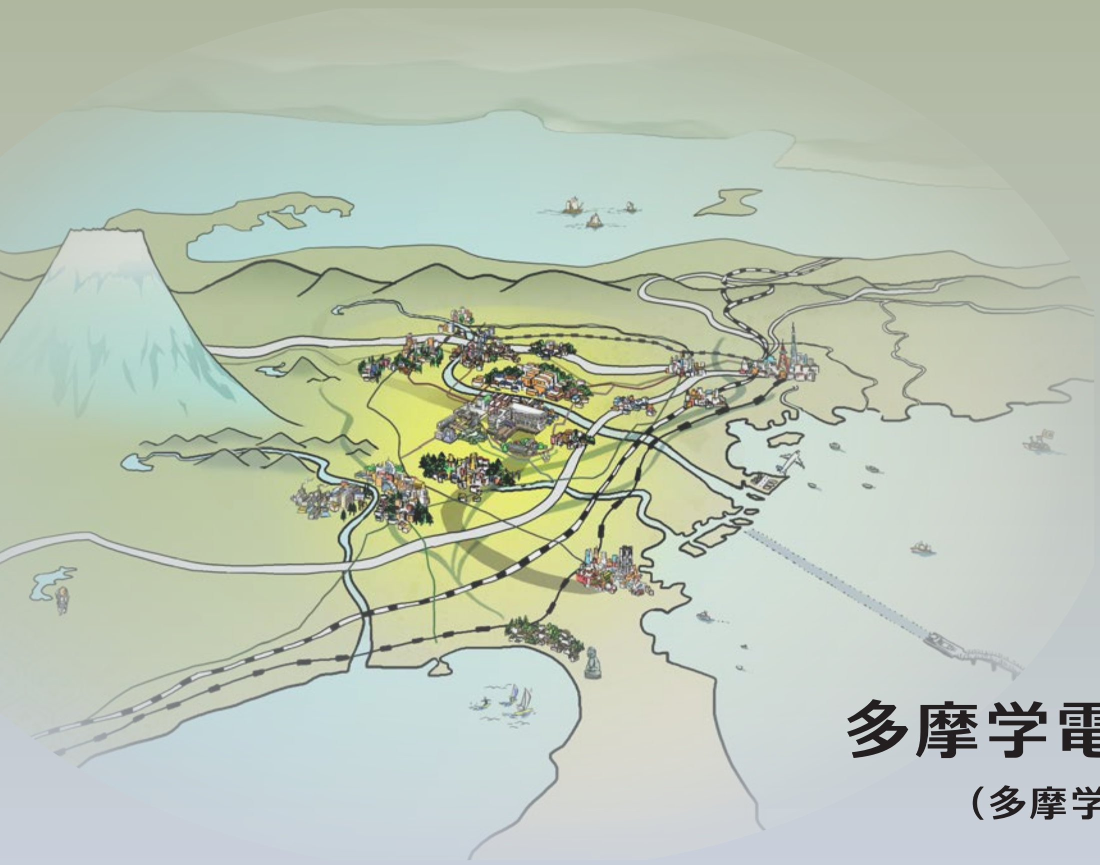
「多摩ニュータウンの再生」

2009年度インターゼミ（社会工学研究会）
多摩学グループ



多摩学電子新書 vol.7
（多摩学新書）

インターゼミ
社会工学研究会

多摩ニュータウンの活性化に関する研究

－ Community in Tama New Town －

チーム：わっしょい!!TAMA

鮎川　礼
岡　俊輔
菊永　泰正

指導教員：酒井先生
松本先生

2009 年 1 月 9 日

【論文目次】

第１章　はじめに **4**
第２章　ニュータウンの歴史 **5**
第1節　ニュータウンとは 5
第2節　団地との違い 5
第3節　ニュータウンが開発された背景 5
第4節　どのようなニュータウンが開発されたのか 5
第３章　多摩ニュータウンの現状と課題 **6**
第1節　多摩ニュータウンの概要 6
第2節　多摩ニュータウンの特徴 7
第3節　ニュータウンが抱えている問題 7
第4節　多摩ニュータウンの問題 8
第1項　多摩ニュータウンの少子高齢化 8
第2項　多摩ニュータウンの人口減少・住宅問題 13
第４章　多摩ニュータウンの活性化に向けた取り組み **17**
第1節　日本における地域活動とNPO について 17
第2節　多摩ニュータウンのNPO活動について 19
第3節　多摩市市民情報センターでのインタビュー調査 20
第1項　多摩市内の市民団体の活動、及びNPO団体の活動状況 21
第2項　多摩ニュータウンの地域団体が現状抱えている課題や問題点 21
第3項　行政・大学・企業との連携状況 21
第4項　地域活動情報センターから見える多摩ニュータウンのこれからの課題 22
第4節　インタビュー結果から得られた示唆と研究テーマの設定 22
第５章　住と地域活動に対する若者の意識調査 **23**
第1節　住と地域活動に関する若者へのグループインタビュー 23
第2節　住と地域活動に関する若者への量的アンケート調査 23
第3節　若者への量的アンケート調査分析結果 23
第1項　回答者の属性分析 23
第2項　住環境満足度・定住志向に関する分析結果 24
第3項　住環境の満足度を構成する要因に関する分析結果 24
第4項　定住志向を構成する要因に関する分析結果 24
第5項　若者の住まいに対する考えと性別・住居形態に関する分析結果 25
第6項　若者の地域活動に対する興味に関する分析結果 25
第7項　若者の地域活動参加へのきっかけと参加を妨げる要因の分析結果 26
第8項　若者の多摩ニュータウン地域別印象に関する分析結果 27
第9項　アンケート分析結果のまとめ 27
第4節　住と地域活動に関する若者の意識調査のまとめと考察 27
第６章　SNS を活用した地域活性化に関する検討 **28**
第1節　今注目される地域SNS 28
第2節　SNSの歴史、始まり 28
第1項　SNS の定義、特徴 28
第2項　海外における SNS 30
第3項　国内における SNS 30

第3節　地域SNS事例 ... 31

第1項　あみっぴー(西千葉) ... 31

第2項　ひびの(佐賀県) ... 31

第3項　ちょっぴー(東京都千代田区) ... 32

第4項　地域 SNS 事例から得られる所見 ... 33

第4節　地域SNSの課題、問題点 ... 34

第5節　Mixi の可能性 ... 35

第７章　わっしょい!!TAMA の提案する若者の地域活動への誘導策 ... 36

第1節　Mixi の中にコミュニティをつくってしまえばいい ... 36

第2節　グループインタビューの実施 ... 36

第3節　最終的な提案内容 ... 37

第８章　まとめ ... 38

第９章　Appendix. A ： まちと地域に関する意識調査 (学生アンケート) ... 39

【参考文献】 ... 97

【図表索引】 ... 98

第1章　はじめに

高度成長期時代に時代の要請により誕生した「ニュータウン」。しかし、時の経過と共に様々な問題が浮き彫りとなっており、今曲がり角を迎えている。わっしょい!!TAMA では、多摩大学の所在する、多摩ニュータウンの抱える問題や課題について調査を行い、活性化に向けた提言を行うことを目的として研究することとした。

全国各地に存在する「ニュータウン」は、画一的な計画都市ゆえの急速な高齢化、職住分離設計ゆえの昼夜人口のアンバランスと住民ニーズを満たすコミュニティー維持の困難さが見られており、課題解消の重要性が叫ばれている。

これらの課題の解決に向けて、行政や様々な NPO が取り組みを行っており、その実態から調査を行うことにより、問題の本質を確認することから調査を開始した。調査を進めれば進めるほど、様々な課題が幅広く見えてきたが、我々は学生視点から貢献できるエリアにフォーカスを絞って調査・提案の検討を行うこととした。

若者の視点から見たとき、摩ニュータウンの課題がどのように捉えられるのかについて、以下に議論してゆく。

第2章　ニュータウンの歴史

第1節　ニュータウンとは

そもそもニュータウンとはどのような地帯のことを指すのか。これと決まった定義は無い。だがいろいろな研究者がそれぞれに定義付けをしていて、例えば「中心市街地とは連続していない未利用地において計画的に開発され、比較的年代が近く、家族構成が類似している世帯が同時に、ある程度まとまって入居した住宅団地」だったり、「計画的新市街地」などと言われている。つまりは計画的に開発され、中心市街地と隣接していない一帯にある住宅の集まりをニュータウンというと言える。これから研究を進めるにあたり、我々もこれをニュータウンの定義としていく。

第2節　団地との違い

ニュータウンと団地は混同してしまいがちだが両者は全く異なるものである。ニュータウンは上記で述べたように計画的に作られた集合住宅一帯である。それに対して団地はただ公団住宅のみを指す。そこに計画性の有無は関係ない。団地が集まっているからといってその地帯をニュータウンと言うことはできない。ニュータウンの中には戸建や団地、アパートやマンションなどさまざまな形態の住居がある。団地は建物そのものを指し、ニュータウンはそれらが含まれる一帯を呼ぶ。このように、団地とニュータウンは全く別のものである。

第3節　ニュータウンが開発された背景

日本は第2次世界大戦後、戦災による住宅不足に陥っていた。政府は応急処置として住宅対策を実施。簡易住宅を 30 万戸建設するも、その後の高度経済成長による人口増加、国民の生活水準の向上で人々がより質の高い住宅の所有を求めるようになり、さらに住宅不足は深刻化した。そうした中、人々は働くため、地方圏から大都市圏へ移るようになり、大きな人口移動が起こった。それにより地価が高騰した都市部から、郊外に住宅を求め人口が移動し、都市部のスプロール化が懸念されるようになった。そして 1963 年に「新住宅市街地開発法」が施行されたことにより、大規模な宅地開発が可能となりニュータウンが開発されることになった。「資金がある人々には持ち家を。乏しい人には公営住宅を。中間層（サラリーマン）には公団住宅を提供する。そして郊外部・地方部にインフラを整備し、新たに都市として独立した機能を備える。」という目的のもと、「住宅金融公庫」「公営住宅」「住宅公団」という政府の 3 つの制度枠組みによるニュータウンの開発が始まったのである。

第4節　どのようなニュータウンが開発されたのか

ニュータウンには「大規模ニュータウン」と呼ばれる、総面積 300ha 以上のものがあり、全国に 39 か所点在している。代表的なものに「千里ニュータウン」や「北摂ニュータウン」、そして我々が研究する舞台である「多摩ニュータウン」などがあげられる。日本初めてのニュータウン開発は 1960 年、大阪府豊田市・吹田市の千里丘陵で始まった。総面積 1160ha のこの千里ニュータウンは完成から 45 年たった今も「かつての開発型都市モデル」と称されている。

第3章　多摩ニュータウンの現状と課題

第1節　多摩ニュータウンの概要

東京都の多摩丘陵に位置する多摩ニュータウンは、1965 年に着工を開始した、面積 2884ha、多摩市、八王子市、町田市、稲城市の 4 市にまたがる国内最大級の大規模ニュータウンである。計画人口は 30 万人。このニュータウンが建設された背景は他のニュータウンと同様に緊急的な住宅不足への対応としてであった。建設当初は 2DK や 3DK といった当時では標準的な中高層向けの住宅を中心として供給したが、1975 年ごろからは「一人一室。世帯に一共同室」が目標として掲げられ、貝取・豊ヶ丘地区で 3LDK・4LDK といった間取りの住宅も供給するようになった。
現在人口は約 28 万人、世帯数は約 8 万戸。それぞれの地域に合った環境作りに取り組んでいる。

図 3-1：多摩ニュータウンの位置

出展：*UR* 都市機構「*TAMA NEW TOWN SINCE 1965*

図 3-2：多摩ニュータウンの骨格構造

出展：*UR* 都市機構「*TAMA NEW TOWN SINCE 1965*

図 3-3: 多摩ニュータウンの歴史

出展：*UR* 都市機構「*TAMA NEW TOWN SINCE 1965*

第2節　多摩ニュータウンの特徴

まず多摩ニュータウンは他のニュータウンと違い、未利用地が多く残っているのが特徴である。約 300ha もの土地が未だに使用されずにあるという。そして「未完成」なものもいくつかある。例えば立川駅と多摩センター駅を結ぶ多摩モノレールは、本来町田駅までを繋ぐはずであったが今は多摩センター駅を終点としている。さらに大学が多いことも大きな特徴である。多摩ニュータウン内には中央大学・法政大学・多摩大学などたくさんの大学がある。若い人たちの流入機会も充分にあり、これからさらに開発・発展の望める地域である。

第3節　ニュータウンが抱えている問題

全国のニュータウンが抱えている問題が大きく分けて 3 つある。「少子高齢化問題」「人口減少問題」そして「住宅問題」である。高齢化の原因は、戦後の住宅難でニュータウンにやってきた人々が 40 年たち、今は高齢者となってニュータウンに住んでいるというケースがとても多いことにある。そして高齢化と共に、少子化が進んでいるため多くの学校が廃校や合併に瀕しており、ニュータウンはかつての活気を失ってしまっている。

「人口減少問題」は、労働人口の流出が引き起こしているものである。ニュータウン内には企業が少なく、都心に働きに出る人々が多いため昼間は閑散とした地域になってしまい、少子高齢化の問題と同様、活気がない街と

なってしまう。マスコミでは、ニュータウンはサラリーマンたちが寝るためだけに帰ってくる「ゴーストタウン」や「ベッドタウン」などと言われるようになってしまった。

そして「住宅問題」である。約 40 年前の住宅供給によって同時期に一気に建てられた住宅が年月と共に老朽化を進め、建て直しや取り壊しが必要となってきている。また、当時の技術で建てられた住宅にはバリアフリーの概念がなく、エレベーターのない団地やアパートが点在し、高齢者にとっての困難となっている。現在は住み替えや住民の多様化に向けた取り組みが各地で行われている。

第4節　多摩ニュータウンの問題

全国のニュータウンと同様に多摩ニュータウンでも少子高齢化・人口問題・住宅問題が深刻化している。

第1項　多摩ニュータウンの少子高齢化

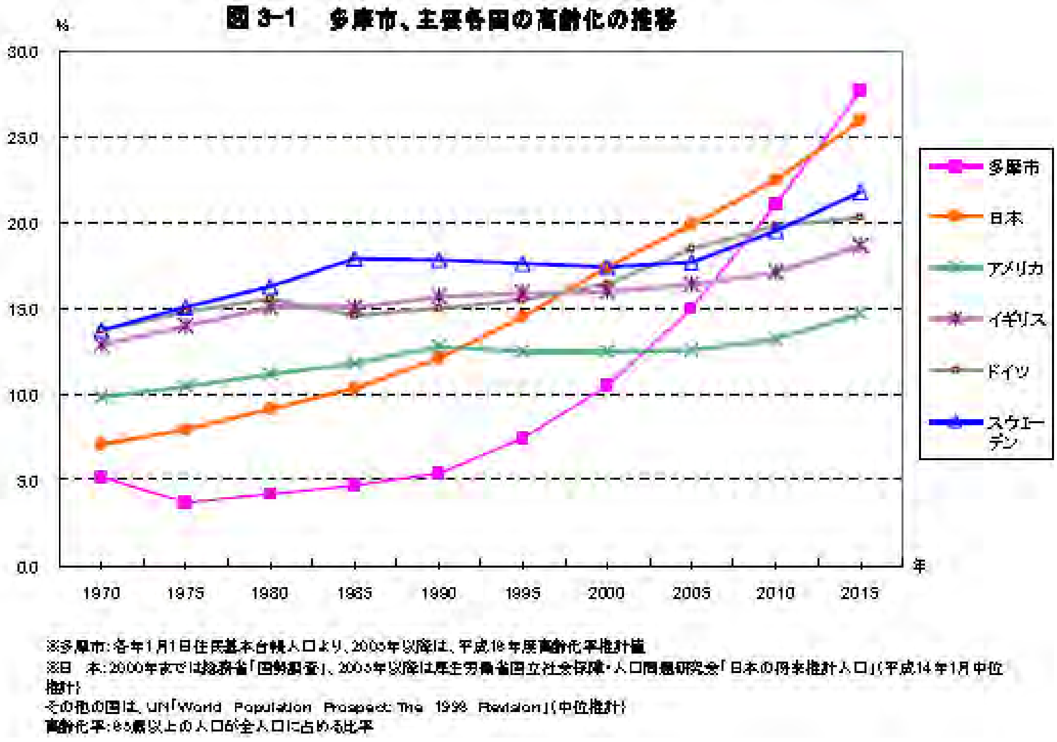
多摩ニュータウンは現在、世界で最も高齢化の進行が早い地域である。図 3-4は多摩市、主要各国の高齢化の推移である。これを見ると各国がゆるやかに上昇しているのに対し、多摩市は 1990 年から急激に上昇しているかがわかる。原因は多摩ニュータウン内に団塊の世代が集中していたためだと考えられる。

そして図 3-5は多摩市の将来人口推計である。2000 年には約 1 万 6 千人だった老年人口が 2025 年には約 4 万 6 千人になると予想されている。

図 3-6は多摩市の将来年齢構成の推計であり、これによれば 2025 年には全体人口の約 3 割が高齢者になると予想される。

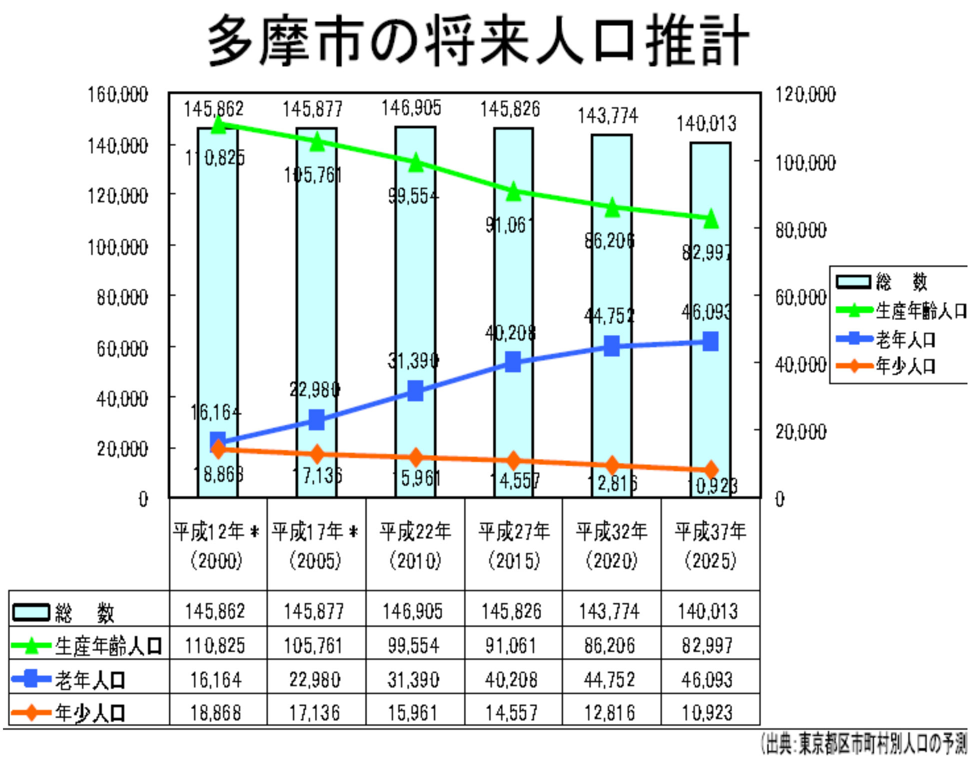
図 3-7で東京都の市部と比較してみると、多摩ニュータウンは 50～54 歳の人口比率が 1.9 ポイントも上回っていて、次いで 55～59 歳が 1.2 ポイント、45～49 歳が 1.1 ポイントであることから、やはり多摩ニュータウンは他の地域に比べて高齢化が進んでいることがわかる。

図 3-4: 多摩市の高齢人口比率の主要各国との比較



出展：多摩市、「第四次多摩市総合計画」、第三章　多摩市の現状分析

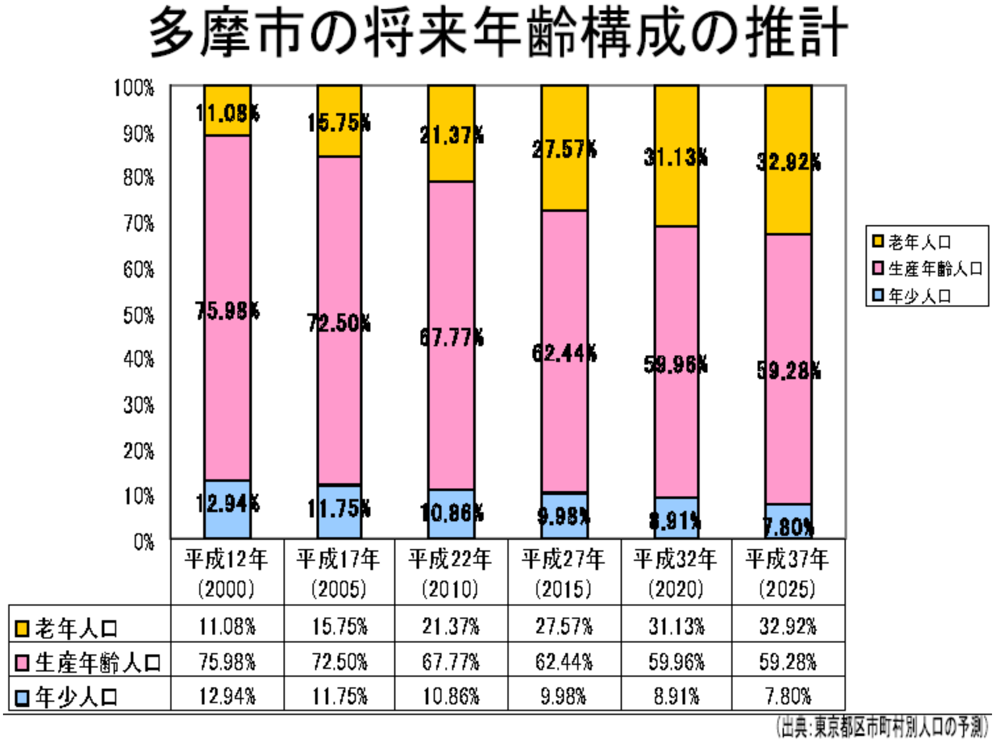
図 3-5: 多摩市の将来人口推計



	平成12年＊ (2000)	平成17年＊ (2005)	平成22年 (2010)	平成27年 (2015)	平成32年 (2020)	平成37年 (2025)
総　数	145,862	145,877	146,905	145,826	143,774	140,013
生産年齢人口	110,825	105,761	99,554	91,061	86,206	82,997
老年人口	16,164	22,980	31,390	40,208	44,752	46,093
年少人口	18,868	17,136	15,961	14,557	12,816	10,923

出展:多摩市、「第五次多摩市総合計画基本構想　市民ワークショップ資料」

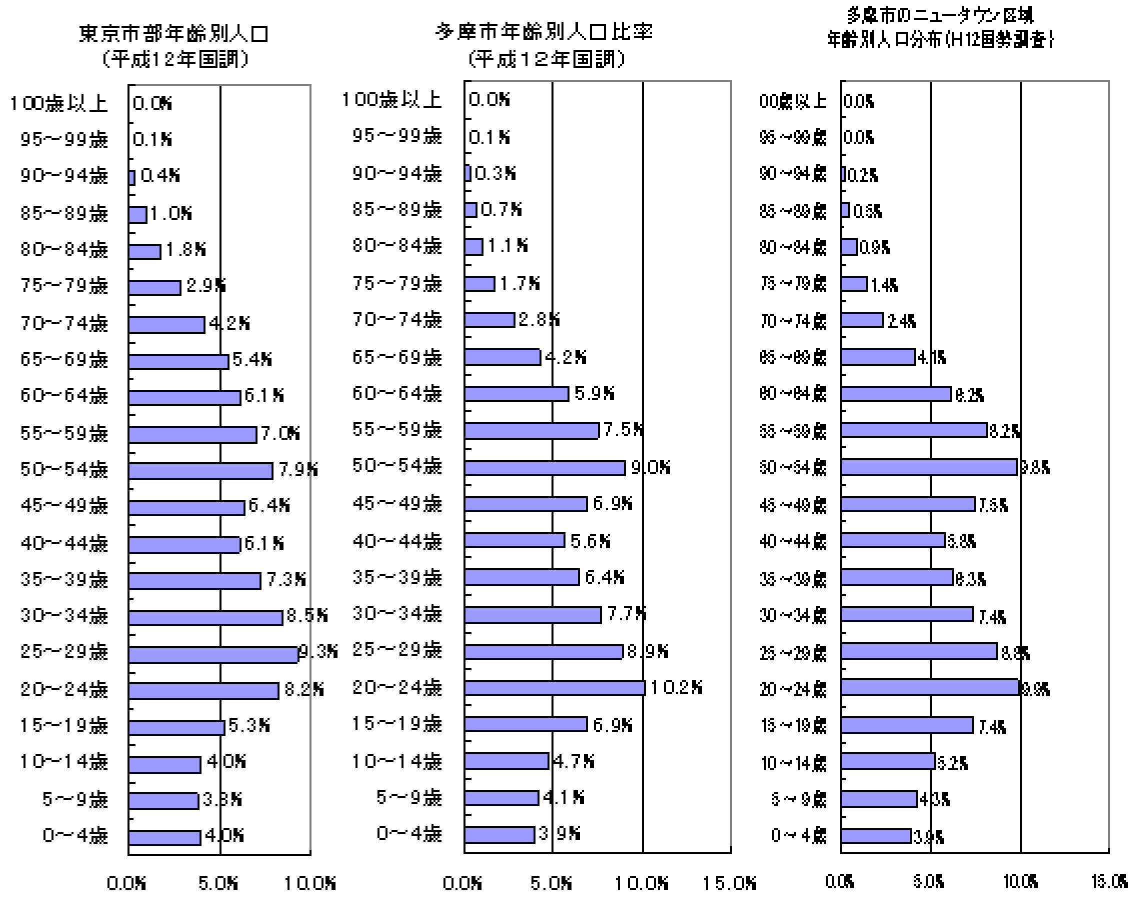
図 3-6: 多摩市の将来年齢構成の推計



	平成12年 (2000)	平成17年 (2005)	平成22年 (2010)	平成27年 (2015)	平成32年 (2020)	平成37年 (2025)
老年人口	11.08%	15.75%	21.37%	27.57%	31.13%	32.92%
生産年齢人口	75.98%	72.50%	67.77%	62.44%	59.96%	59.28%
年少人口	12.94%	11.75%	10.86%	9.98%	8.91%	7.80%

出展:多摩市、「第五次多摩市総合計画基本構想　市民ワークショップ資料」

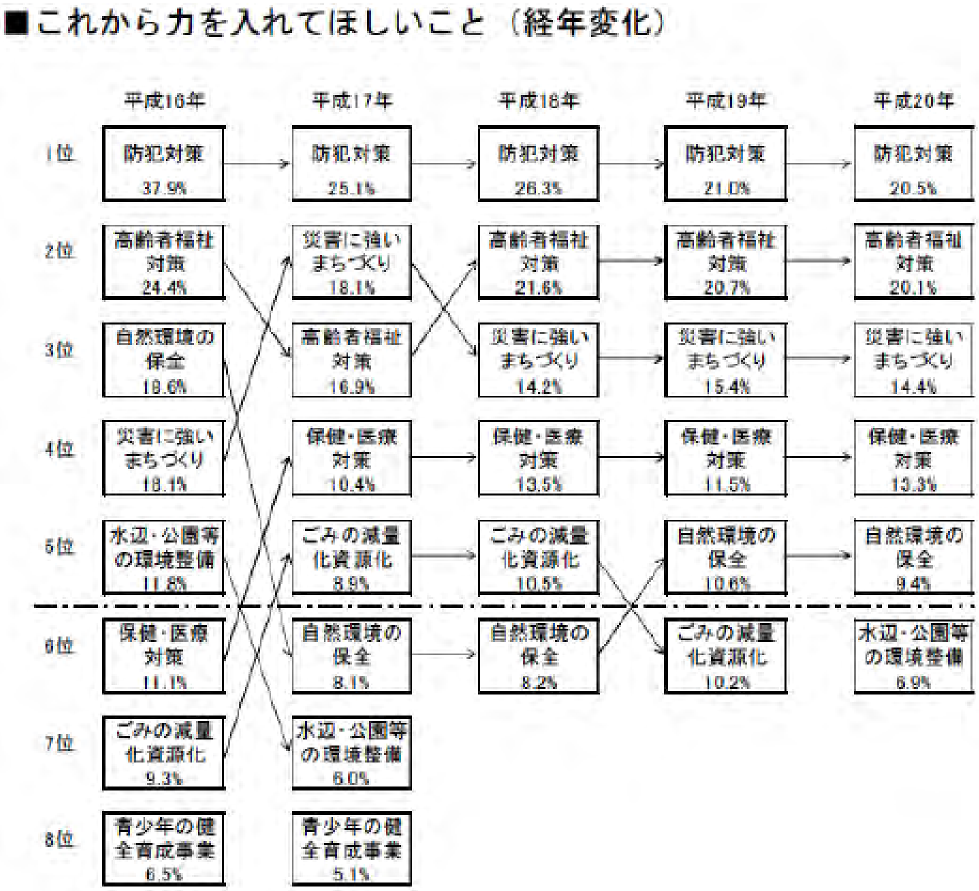
図 3-7: 東京都・多摩市・ニュータウン地区の年齢別人口分布



出展：多摩ニュータウンまちづくり専門家会議： http://www.machisen.net/nt_population/index.php

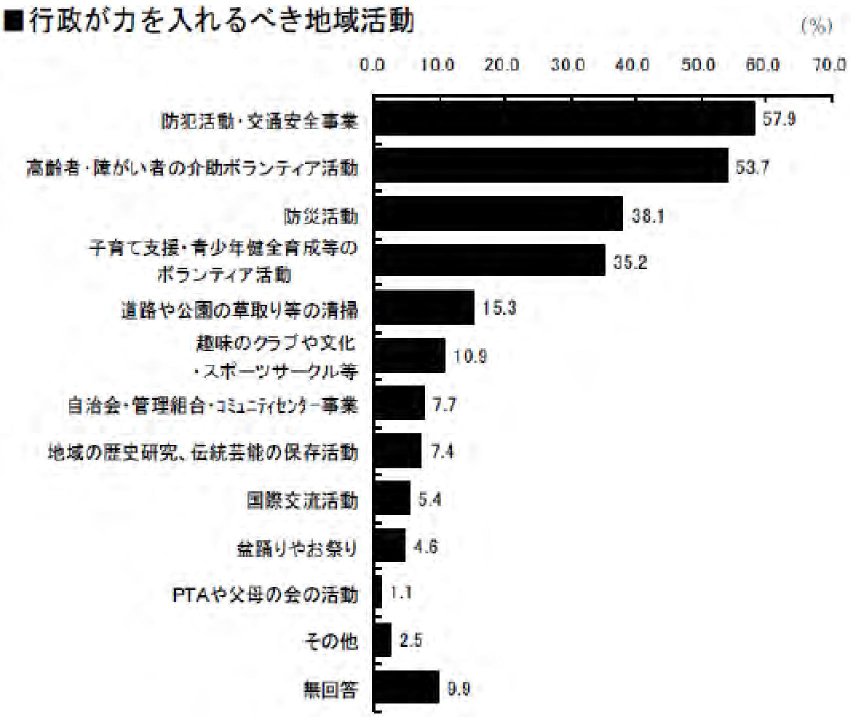
図 3-8の多摩市の住人のアンケートからも、行政に求めること・これから力を入れてほしいことの 2 位に「高齢者福祉対策」があがっている。こういったことからも高齢化が多摩市の中で注目されている問題だということがわかる。

図 3-8: 多摩市住民アンケートにおける重点注力要望項目(経年変化)



出展:多摩市: 平成 *20* 年度 第 *31* 回多摩市政世論調査 概要版、*p.11*

図 3-9: 多摩市住民アンケートにおける重点注力要望項目(H20 年度)



出展:多摩市: 平成 *20* 年度 第 *31* 回多摩市政世論調査 概要版、*p.7*

しかし上記図 3-5・出展:多摩市、「第五次多摩市総合計画基本構想 市民ワークショップ資料」

図 3-6は多摩市だけの人口予測である。前述したように多摩ニュータウンは 4 市にまたがる広大な地域から成り立っているため、それぞれの地域で抱えている問題が違うのではないかと我々は考えた。そして各地区の特徴や問題を細かく探ることが必要と考え、多摩ニュータウン内全地区別の人口統計データを収集し、まとめた。その結果が表 3-1: 多摩ニュータウン地区の人口構成詳細表 3-1である。これを見ると地区ごとの特徴がとても良くわかる。

まず平均年齢を見てみると、八王子・町田・稲城市はほとんど 30 代前半〜40 代前半であるのに対し多摩市は 40 代後半が多く見られる。特に豊ヶ丘地区で 50.4 歳(5 丁目)、愛宕地区では 47. 6 歳(3 丁目)が見られ、他の地区に比べて高いことがわかる。さらに詳しく調べると、豊ヶ丘地区の 65 歳以上の割合は 29.51%(5 丁目)、愛宕地区は 29.07%(3 丁目)と約 3 人に 1 人が高齢者という結果になった。

さらにその中でも、「高齢者の一人暮らし」という問題から、高齢者の単身世帯割合を出してみた。すると、愛宕3丁目が 18.63%で、多摩ニュータウン内で一番高齢者の一人暮らしが多い地区だと言える。この地区はおよそ 5 軒に 1 軒が高齢者の一人暮らしということになり、他の地域よりも深刻な高齢化である。こういった地区から、高齢化の対する対策をしていかなければならない。

また、通学者の統計からわかることもいくつかある。この統計データの「通学者」とは、「15 歳以上の学生」のことを指し、高校生・大学生・専門学生の若者ということである。この若者の割合が比較的高い地区は八王子の堀之内(32.52%)と稲城市の向陽台(16.87%)である。両者とも近年で大型マンションが増え、開発が進んでいる地区であることから、住宅の増加による若者の流入があったと推測することが出来る。堀之内は約 3 人に 1 人が若者だということになる。

このように多摩ニュータウンには地区ごとにそれぞれ人口の特徴がある。3 人に 1 人が高齢者の地区もあれば、3 人に 1 人が若者の地区もある。多摩ニュータウンを研究するにあたり、我々の考えること、提案等がニュータウン全体に共通して当てはまるわけではないことに注意して研究を進めなければならない。

表 3-1: 多摩ニュータウン地区の人口構成詳細

市	町名	人口総数	世帯総数	平均年齢	高齢者割合	通学総数	通学者割合	高齢単身世帯	高齢者単身世帯割合
八王子市	堀之内2丁目	1 719	1 199	28.3	3.55%	559	32.52%	10	0.83%
八王子市	堀之内3丁目	3 189	1 906	33.8	8.62%	437	13.70%	31	1.63%
多摩市	豊ケ丘1丁目	3 035	1 386	36.5	8.47%	247	8.14%	36	2.60%
多摩市	豊ケ丘2丁目	3 003	1 081	43.9	15.65%	189	6.29%	37	3.42%
多摩市	豊ケ丘3丁目	1 960	651	42.5	12.96%	226	11.53%	25	3.84%
多摩市	豊ケ丘4丁目	694	349	48.8	28.67%	17	2.45%	62	17.77%
多摩市	豊ケ丘5丁目	1 491	598	50.4	29.51%	93	6.24%	56	9.36%
多摩市	豊ケ丘6丁目	1 026	419	46.2	22.81%	39	3.80%	42	10.02%
多摩市	和田3丁目	1 335	610	46.7	25.54%	36	2.70%	85	13.93%
多摩市	愛宕1丁目	714	325	47.6	25.21%	24	3.36%	27	8.31%
多摩市	愛宕2丁目	1 089	450	47.3	20.84%	67	6.15%	38	8.44%
多摩市	愛宕3丁目	1 056	483	47.6	29.07%	33	3.13%	90	18.63%
多摩市	愛宕4丁目	3 058	1 323	41.5	14.42%	275	8.99%	74	5.59%
稲城市	向陽台1丁目	403	130	40.9	9.43%	68	16.87%	7	5.38%
稲城市	向陽台2丁目	249	80	43.1	12.85%	29	11.65%	3	3.75%
稲城市	向陽台3丁目	613	201	44.1	14.19%	86	14.03%	9	4.48%
稲城市	向陽台4丁目	2 612	880	39.8	9.49%	293	11.22%	24	2.73%
稲城市	向陽台5丁目	1 724	583	39.1	10.56%	165	9.57%	23	3.95%
稲城市	向陽台6丁目	1 931	590	37.0	8.44%	190	9.84%	15	2.54%

出展:国勢調査 東京都区市町村町丁別報告 平成 *17* 年 (第九表 多摩市編)

図 3-10：多摩ニュータウンにおける年少人口割合の地域捌特性(2005 年度)

出展：*NPO* フュージョン ： 国勢調査にみる多摩ニュータウンエリアの人口等の現状と動向

図 3-11：多摩ニュータウンにおける老年人口割合の地域捌特性(2005 年度)

出展：*NPO* フュージョン ： 国勢調査にみる多摩ニュータウンエリアの人口等の現状と動向

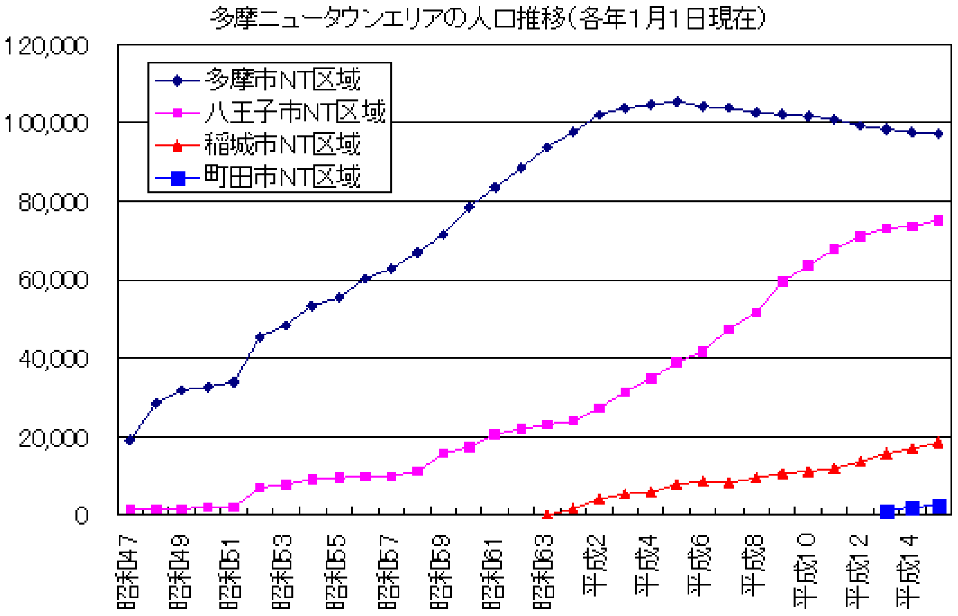
図 3-12：多摩ニュータウンにおける世帯数増減率の地域捌特性(2005 年度)

出展：*NPO* フュージョン ： 国勢調査にみる多摩ニュータウンエリアの人口等の現状と動向

第2項　　多摩ニュータウンの人口減少・住宅問題

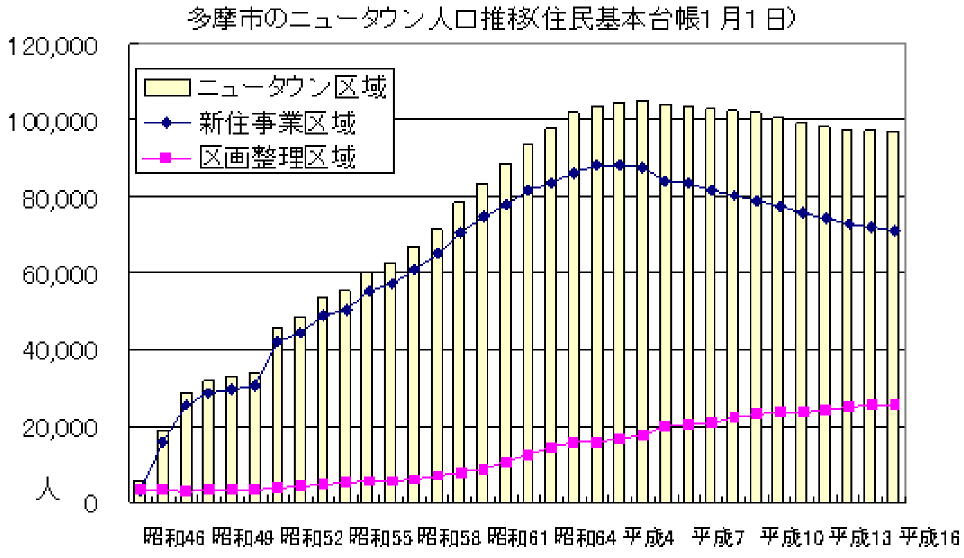
上記図 3-5の人口推計では今後、多摩ニュータウンの人口はゆるやかに減少してゆくと予測されている。下記図 3-13・図 3-14は多摩ニュータウンの人口推移である。開発が進んでいる八王子・稲城地区の人口は、住宅開発と共に増加しているが、開発の終わった多摩市は少しずつ減少しているのがわかる。

図 3-13: 多摩ニュータウンエリアの地域別人口推移



出展：多摩ニュータウンまちづくり専門家会議： http://www.machisen.net/nt_population/index.php

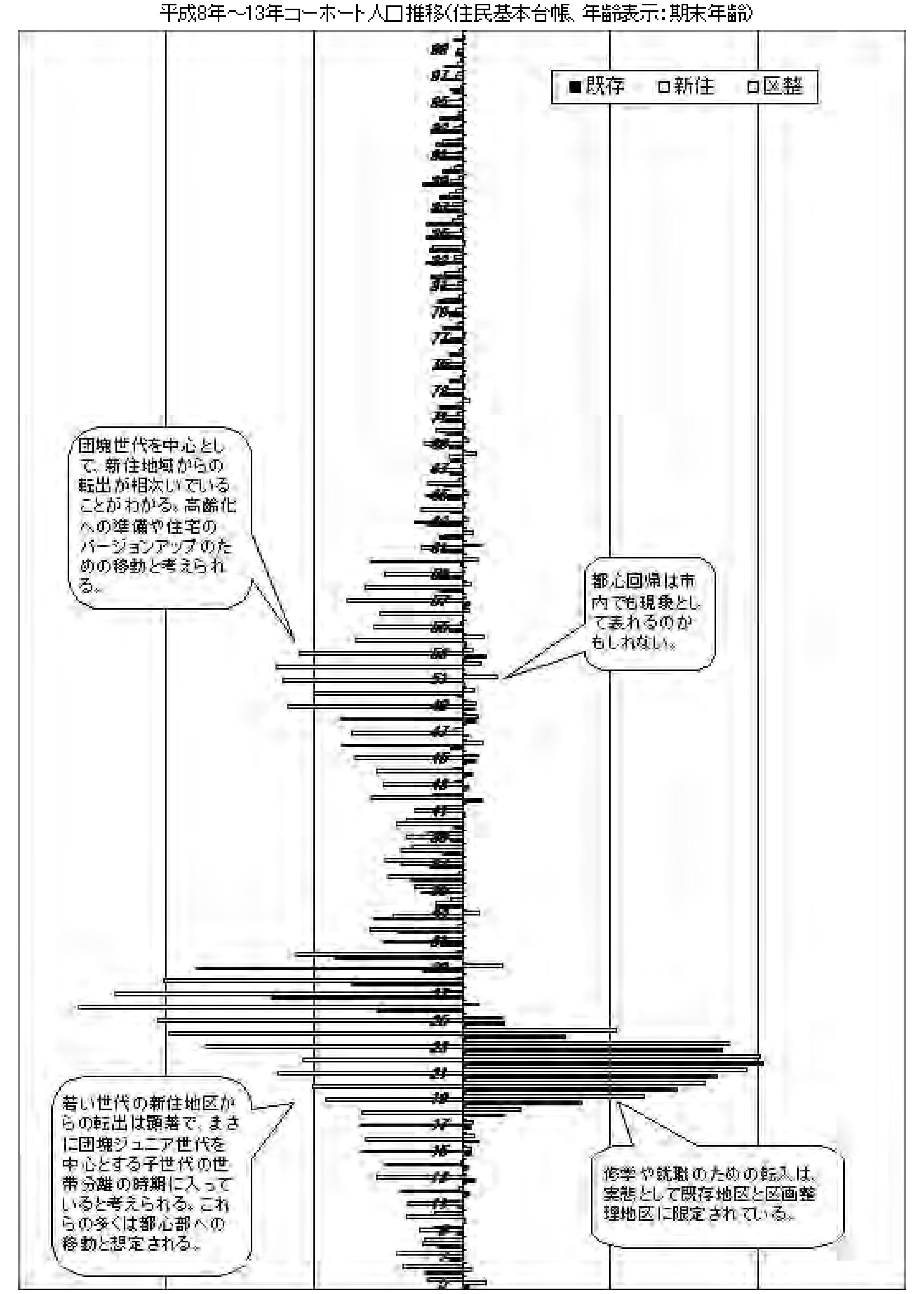
図 3-14: 多摩ニュータウンエリアの区域別人口推移



出展：多摩ニュータウンまちづくり専門家会議： http://www.machisen.net/nt_population/index.php

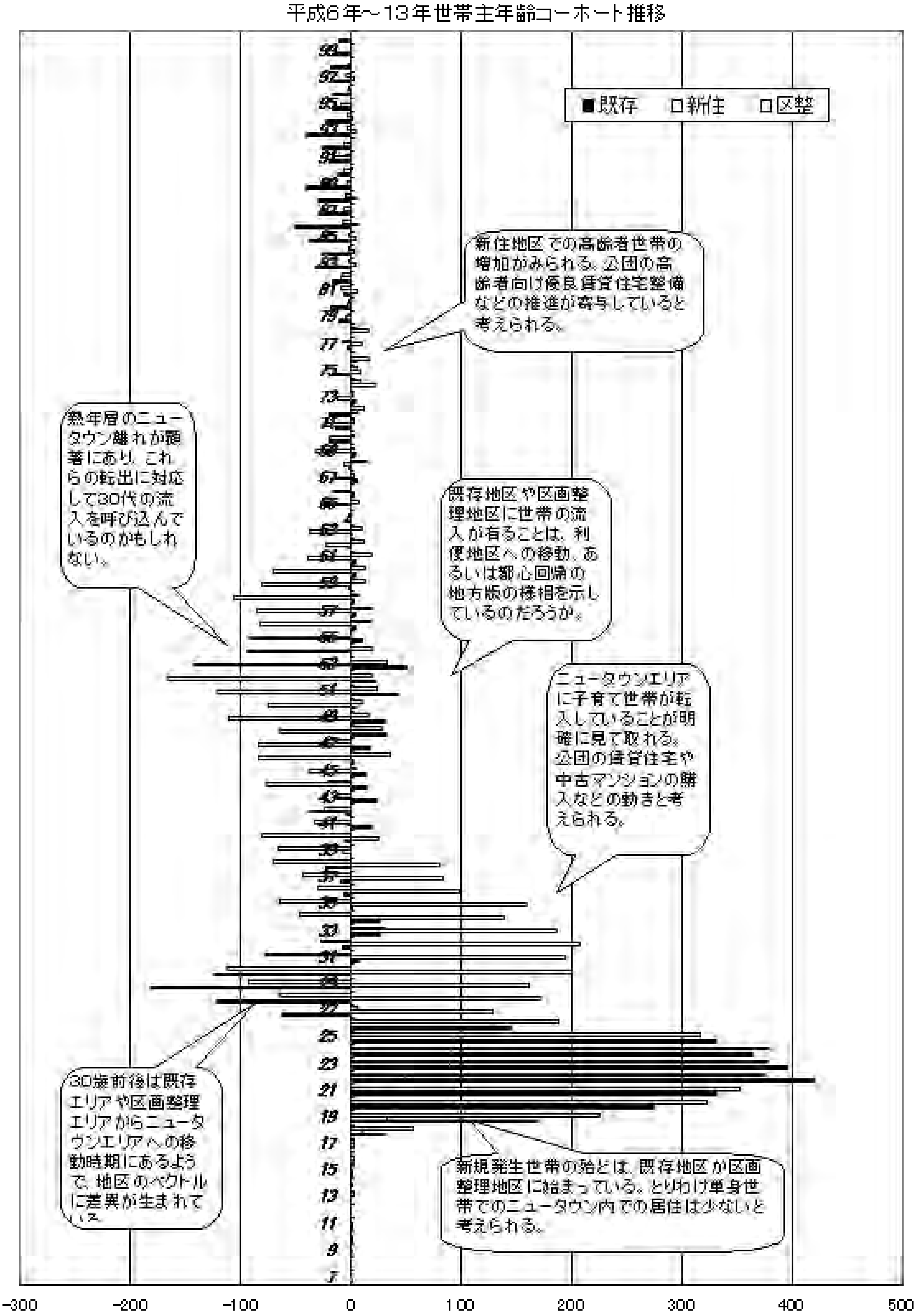
これは、住人が自分の年齢やライフスタイルに合った住宅に移り住んでいるからである。住み替えの原因としては、多摩市内の住宅の 80％がバリアフリー仕様ではないことや子育てが終わっての都心回帰や周辺のバリアフリーマンションなどへの移転が考えられる。とりわけ、ここ5年間の多摩ニュータウン内での民間分譲住宅を中心としたマンション供給は盛んで、稲城市域、八王子市域、町田市域への転出も多くあったと想定される。これについては、30 歳代の 40 歳代の転出傾向でも確認される事である。住んでいる人の年齢やライフスタイルに合った地域作りや環境作りが必要になってくる。

図 3-15： 多摩市における年齢別コーホート人口推移(H8-13)



出展：多摩ニュータウンまちづくり専門家会議： http://www.machisen.net/nt_population/index.php

図 3-16：多摩市における世帯主年齢別コーホート推移(H8-13)



出展：多摩ニュータウンまちづくり専門家会議：http://www.machisen.net/nt_population/index.php

第4章　　多摩ニュータウンの活性化に向けた取り組み

文献やデータを見てわかるように、多摩ニュータウンには現状、人口減少・少子高齢化・住宅と重大な問題が 3 つある。このまま進むと、高齢者が増え子供が減り、ニュータウ ン全体の人口も減るだろう。そして街全体の平均年齢が上がり、機能が低下してくる。そして活気のない街になってしまう。このような問題を解決するためには、やはり何らかの活性化対策をする必要がある。では、どんな形で活性化をしたら効果的なのだろうか。

活性化の仕組みを提案するには、まず現状を知ることが必要だと我々は考えた。そして、地域住民が集って活動している団体など、多摩ニュータウン内の市民活動を取りまとめている市民活動情報センターに行き、ヒアリングを行うことにした。

第1節　日本における地域活動とNPOについて

NPO は Non-Profitable Organization の略であり、収益を目的としない組織の総称となっている。類似の組織に Non-Governmental Organization (NGO)が存在するが、NGO は通常政府が果たす役割を代替する民間組織を意味するが、NGO を含めて NPO で総称するケースもある。

NPO の「Non-Profitable」の部分が強調されるあまり、参加者は無償ボランティア、運営費は持ち出しで当然と見られる向きもあり、社会起業を志向する人の中には NPO を「Normal-Profitable Organization」と再定義してもよいのではないかとの意見もある。

NPO は大別して下記の 4 種類に類別される。

- **NPO の類型**

1. **「サービス提供型」:社会で恵まれない人々を対象に直接サービスを行うタイプ**
2. **「ネットワーク促進型」:知識や情報を共有し、資産として利用できる情報を提供する組織。**
3. **「キャパシティー・ビルディング型」:地域の NPO が能力を伸ばす為の中間支援組織**
4. **「アドボカシー(政策提言)型」:環境保全・教育向上等特定の課題に対する提言を行う団体**

日本においては、専ら「サービス提供型」の NPO が中心であるが、欧米においては NPO 組織の幅も広く「キャパシティー・ビルディング型」や「アドボカシー型」の NPO も多く活動している。

日本の NPO における弱点は「理論能力の欠如」「計画能力の欠如」「情報能力の欠如」「提案能力の欠如」と指摘されており、情熱に基づき NPO を立ち上げるものの、運営費用確保のファンドレイジングを行ううちに、自らを失ってしまう NPO が多く見受けられる。特に、日本においては「寄付文化」が育成されておらず、多くの NPO は行政関係の認可事業や委託事業に頼らざるを得ない構造となっている(図 4-1、図 4-2)。また、NPO 活動を促進するために様々な環境整備が必要である事が RIETI の NPO 法人活動実態調査から明らかになっている(図 4-3)。

又、外に硬く内に柔らかい集団文化を持つ日本の特徴として、NPO においても設立当初は開かれた組織形態をもつ者の、時間とともに専門職化による閉塞感が加速し、地域社会との繋がりの喪失や断絶が発生するケースも見られる。

40 年以上の歴史を持つ「大阪ボランティア協会」資料においても、渚のように交わりや癒し、学びと巣立ちのあるオープンな参加システムが必要であり、若者たちがワクワク・ドキドキしながら、世代を超えて一緒に活動できる参加システムのあり方を考える必要があるとしている。

総務省の調査によるボランティア活動への参加意向調査においても、10-20 才の若年層と 40 才以上のボランティア活動への参加意向が高いものの、20-30 才の若者層のボランティア参加意識が相対的に低くなっており、これらの世代の活動参加へのモチベーションをどのように上げてゆくかが課題となっている(図 4-4)。

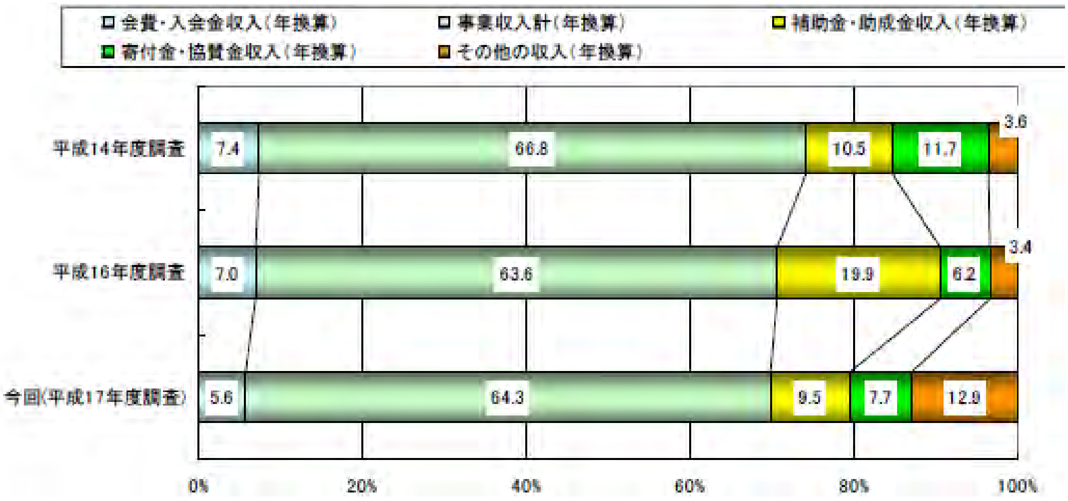
ボランティアのモチベーション構造において、参加の動機となる因子には、下記の 7 つがある。
(出典：桜井政成、「ボランティア・マネジメント」、P.31-48」)

- **ボランティア参加動機因子**

1. **「自分探し」動機**
2. **「利他心」動機**
3. **「理念の実現」動機**
4. **「自己成長と技術習得・発揮」動機**
5. **「レクリエーション」動機**
6. **「社会適応(誘われた)」動機**
7. **「テーマや対象への共感」動機**

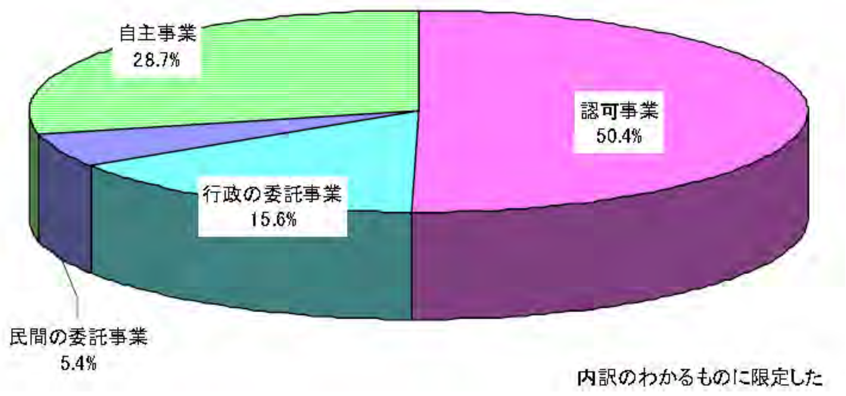
これらの参加動機因子にどのように働きかけて、参加メンバーの活動に対するインセンティブを保つかが、NPO 活動にとって大きな鍵になると考えられる。

図 4-1：NPO の収入内訳



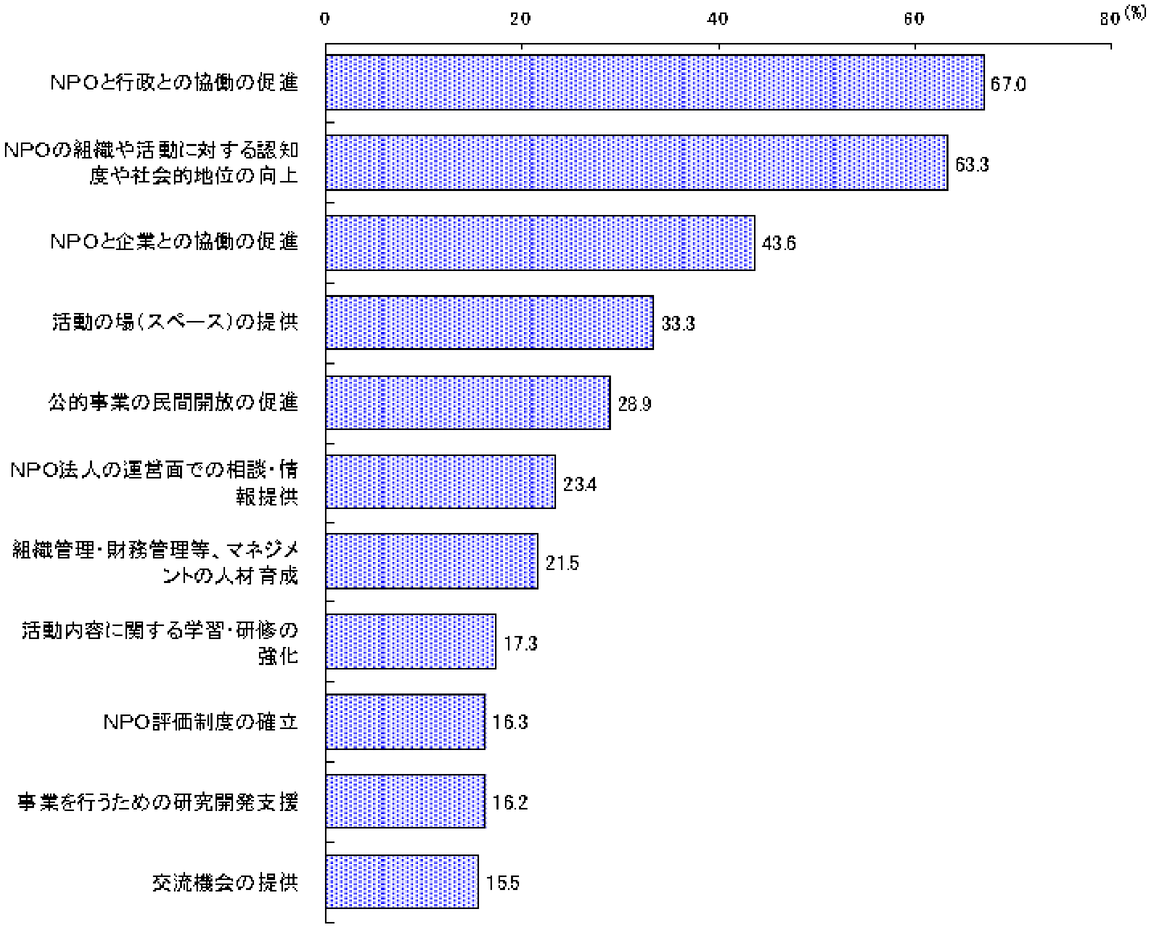
出展：*RIETI H18 NPO 法人活動実態調査、p.27*

図 4-2：事業収入の内訳



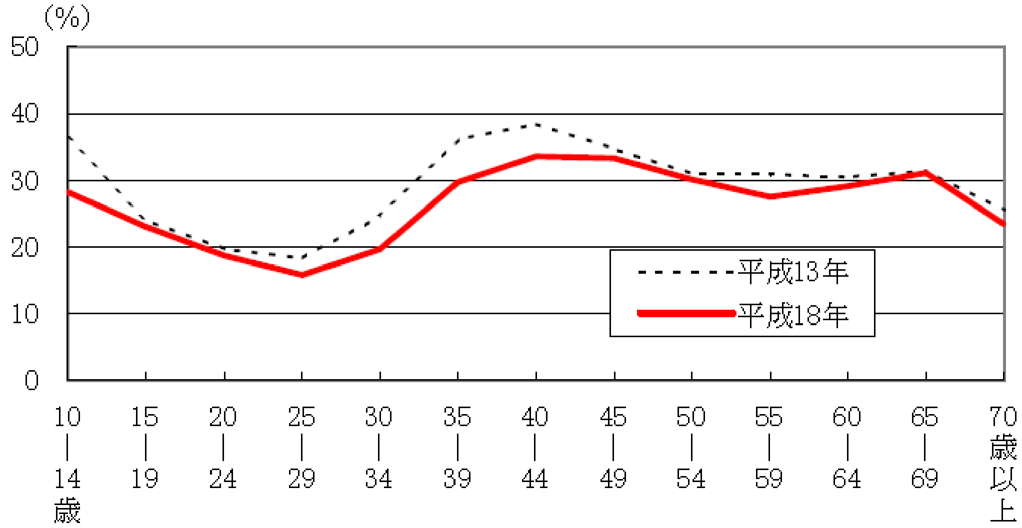
出展：*RIETI H18 NPO 法人活動実態調査、p.27*

図 4-3: 資金面以外で NPO 法人の活動を支えるために必要なこと



出展:*RIETI H18 NPO* 法人活動実態調査、*p.47*

図 4-4: ボランティア活動への参加意向調査結果(H18 年)



出展:総務省 *H18* 社会生活調査

第2節　多摩ニュータウンのNPO活動について

多摩ニュータウンは地域活動やNPO活動がとても盛んであり、特に多摩市では地域問題解消の為に NPO

や様々な市民団体による活動を支援している。現在多摩市にあるNPO団体は全部で 78 つ。悩みを抱えている団体も多い。

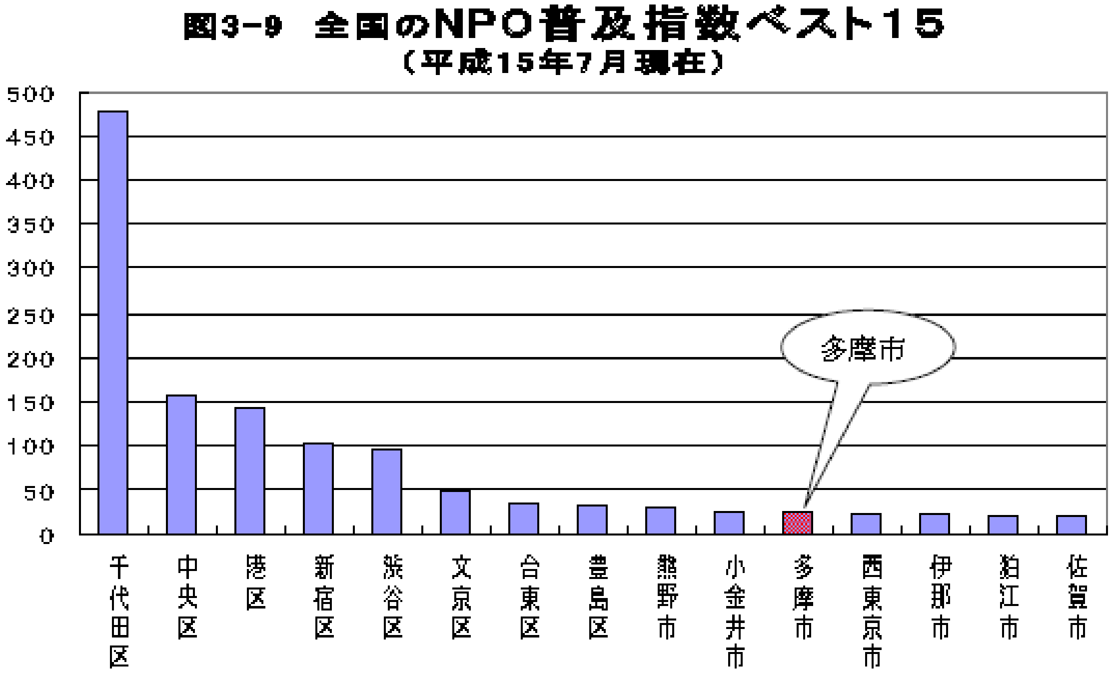
図 4-5:「多摩ニュータウンが地域活性化のために行っている取組み」

特定非営利活動法人(NPO法人) **※ 多摩市内に主たる事務所または従たる事務所を置く法人**				**78**
活動分野・重複あり	**福祉・保険・医療**	**51**	**社会教育**	**39**
	まちづくり	**32**	**学術・文化・芸術・ｽﾎﾟｰﾂ**	**22**
	環境保全	**18**	**災害救援**	**5**
	地域安全	**6**	**人権擁護、平和**	**11**
	国際協力	**19**	**男女平等参画**	**11**
	子どもの健全育成	**34**	**情報化社会の発展**	**24**
	科学技術	**3**	**経済活性化**	**8**
	職能開発・雇用拡充	**15**	**消費者保護**	**3**
	NPO支援	**38**		
ボランティア団体			**多摩ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｾﾝﾀｰ　登録**	**30**
			未登録	**11**
自治会				**96**

(H21.5.21現在)

出展: 多摩市市民情報センター

図 4-6: 全国の NPO 普及指数



出展:多摩市、「第四次多摩市総合計画」、第三章 多摩市の現状分析

第3節　多摩市市民情報センターでのインタビュー調査

今回我々がヒアリングに行ったのは「多摩市市民活動情報センター」という施設で、ここは多摩市内の多様な市民活動の情報を発信している。また、市民活動団体が自らの活動情報を発信できる「市民活動情報検索サイ

ト」の運営及び登録の受付を行っている。
　我々はヒアリングにあたって以下のことを中心に質問をした。

① 多摩市内の市民団体の活動、及びNPO団体の活動状況
② 多摩ニュータウンの地域団体が現状抱えている課題や問題点
③ 行政・大学・企業との連携状況
④ 地域活動情報センターが考える多摩ニュータウンのこれからの課題

そして結果が以下のまとめである。

第1項　多摩市内の市民団体の活動、及びNPO団体の活動状況

　多摩市内の市民活動やNPO活動は非常に盛んである。特に女性の活動が活発である。そして高齢化に伴い、介護関係の活動をしている団体が増えてきていて、とても安定した活動をしている。現在多摩ニュータウンには 7 館のコミュニティーセンターがある。

第2項　多摩ニュータウンの地域団体が現状抱えている課題や問題点

　現状の課題・問題点は活動団体の継続性である。センター長によると、団体が継続するためには資金・人・方向性の 3 つのキーワードが重要であり、それを満たしているところが長く活動出来るのだ。

[資金]

　団体の活動には非常にお金がかかる。このお金をどう工面するかが団体の存続に関わるのである。現在NPO団体は会費・寄付、補助金、事業収入の三本柱によって資金を確保している。しかし市などからの補助金は使いづらいし会費を上げると参加者の負担が増えて減員の可能性も出てくる。「出どころが明確で、安定した資金のある団体は長続きする。」とセンター長は述べていた。資金集めをどうするかという問題は全ての団体が直面する最重要課題である。

[人]

　団体を設立しても、当初のメンバーがいつまでも参加出来るとは限らない。そのため、意志を継ぐ人材を育成する必要がある。次の世代に繋げないことには存続出来ないのである。しかし育成したくても新しく参加してくれる人が確保出来ないのが現状だ。団塊世代の参加へ期待するも動きが鈍いのが難点である。センター長のご意見によると特に若い人の参加が少なく、これからの参加を期待しているところでもある。若い人の参加は団体の存続に必要だし、それと同時に団体の活性にもなるからだ。

　また目的意識の共有も難しい点で、思いを同じにして人々が集結するにはとても時間がかかるのも問題である。常に目的を同じにして、それを次の世代へときちんと繋げていかなければならないのである。

[方向性]

　時代の流れと共に団体も方向性や方針を変えていく必要がある。しかし振り返る暇もないほどの忙しさから、話し合いや方向性についての確認をする余裕もなく社会に適応出来ずに続けることが出来なくなる団体もあるのだ。社会の変化に柔軟に適応出来、常に中でのことを皆でシェア出来るような仕組みを取り入れている団体が成功する傾向にある。

第3項　行政・大学・企業との連携状況

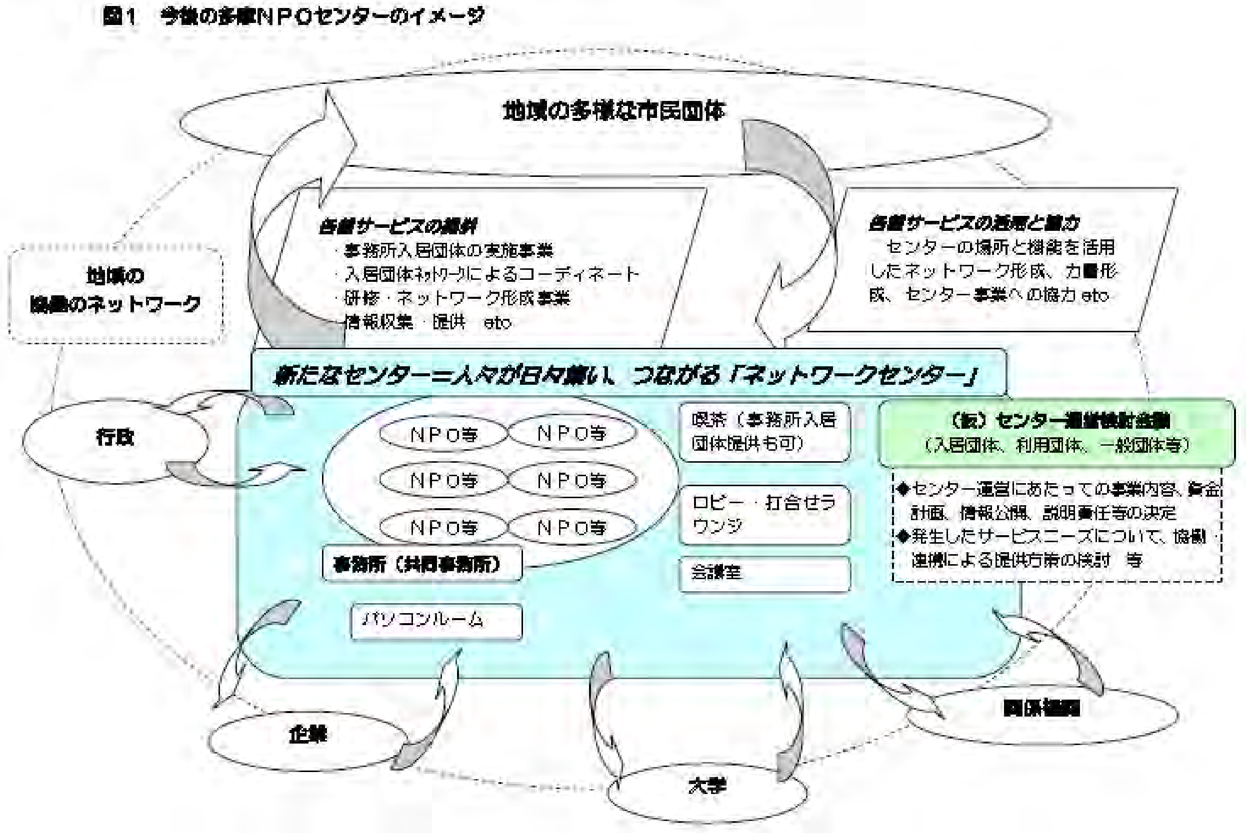
　大学や企業との連携はすでに行っている。企業ではベネッセなどである。しかし企業との連携だと、業務委託のような形になってしまいがちだったり、企業は営利団体なため方向性が合わなかったりすることが問題点である。多摩ニュータウンにはたくさん大学があるため、盛んに行われている。企業よりも地域に根付いた活動が出来るメリットがあるため、今後いかに大学と連携していくかが課題である。また大学と連携することで大学生を取り込み、市民と協力して地域活動を行ってくれるのではないかという期待がある。

第4項　　地域活動情報センターから見える多摩ニュータウンのこれからの課題

多摩ニュータウンの市民活動自体は現状、かなり盛んで女性を中心として企業や大学とも連携をし、活動している。しかしそれとは反対に、その他の市民の活動に対する意識が低いことが問題である。「街をみんなで一緒に作っていく」という思いが共有されていないのが現状。また、情報を受信するだけの市民が多く、自ら働きかけ発信者になっているような市民はごく一部である。受身な市民が発信出来るようにしていく必要がある。

そして現存の団体に関して言えば、継続出来る強い組織であるためには新しい人の流れ、参加者が必要であり特に若者と団塊世代の男性の参加が期待されている。

図 4-7: 多摩市における NPO の目指す協働イメージ



出展：多摩 *NPO* センター運営検討市民会議検討まとめ、*p.6*、*(2007/8)*

第4節　インタビュー結果から得られた示唆と研究テーマの設定

全ての問題を解決するカギは「街に愛着を持つ」ことだと我々は考えた。みんなが多摩ニュータウンを好きになることが出来れば、人口の流出も防げるかもしれない。住みかえを考えていた高齢者も住み続けるかもしれない。そして、かつて多摩ニュータウンに住んでいた人々が戻ってくる、流入もありうる。そしてみんなが自分の住んでいる街に興味を持つことで街の活性化に繋がると考え付いた。

さらに言えば、「若者の参加」は団体を元気にする。多摩ニュータウン内にはたくさんの大学があるため大勢の若者が集まっている。それを上手く利用することが活性化に効果的なのではないかとこのヒアリングから我々は考えた。そして「若者のパワーで地域を活性化する」をこの研究のテーマに決めた。

第5章　　住と地域活動に対する若者の意識調査

テーマ:「若者のパワーを利用して多摩ニュータウンを活性化させよう！」

【調査方法】

テーマが決まり、ターゲットを若者に絞り込んだ我々は、次に若者の生の声と地域活動に対する意識を調査する必要があると考え、グループインタビューとアンケートを行った。グループインタビューでは、多摩在住やその他地域に在住する大学生 4 人に対して、「どんな街に住みたいか」や「地域活動の経験」などの質問を投げかけ、それについて話し合う中で重要な意見がいくつか上がった。アンケートでは多摩大学生 180 人の多摩ニュータウンに対するイメージや地域活動に対する意識を量ることが出来た。

第1節　住と地域活動に関する若者へのグループインタビュー

【調査結果　グループインタビュー】

若者の住みたい街は

・安全で犯罪が少なく、防犯対策がしっかりしている街

・買い物に便利な街

である。自然豊かな多摩市で育った若者にとって、緑の多さは住みたい街選びの重要なポイントではないようだった。また、近所との関わりも特に重要視して無く、挨拶する程度のコミュニケーションが取れれば十分という意見があった。

「地域活動について」

・地域活動に興味があるけれど、実際に行動に移すには障壁がある

・親が積極的に参加していたなどのきっかけが無いと活動に入りにくい

・そもそも情報を目にする機会がない

・自分の地域にはあまり関心が無い

・子供の頃から地域活動に参加する環境ならば、壁も無く参加出来るのではないか

・

第2節　住と地域活動に関する若者への量的アンケート調査

更に、住と地域活動に関する若者の考え方を調査するため、多摩大学生に対して量的アンケートを実施した。住と地域活動に関する若者へのアンケート調査は、7 月末に実施し、酒井先生・松本先生の講座受講生を中心に協力頂き、180 名の学生の協力を得ることができた。実施したアンケート内容は、第9章に添付した。

質問内容は大別すると下記の通り。

(1) 現在の住まいに関する住環境への要素別万毒度と総合満足度、及び、定住志向性

(2) 住まいに対する考え方の特性

(3) 地域活動への興味と参加への志向

(4) 多摩ニュータウンの各地域へのイメージ

第3節　若者への量的アンケート調査分析結果

回答頂いたアンケート結果は、チームで分担し EXEL のフォーマットへ入力し、集計を行った。ビボットテーブルを活用した Cross 分析による集計を行い、属性と回答内容、また、質問間の相関関係を分析した。

第1項　　回答者の属性分析

アンケートの回答総数は 180 名で、内、男性は約 8 割で 146 名、女性は約 2 割で 33 名 (無回答 1 名)。学年構成は、2 年生が最も多く約 7 割で 121 名、3 年生が約 2 割で 31 名、4 年生が約 1.5 割で 26 名、1 年生が

2 名となっている(図 9-1: アンケート回答者属性図 9-1)。

居住形態の分類では、親との同居が約 9 割の 156 名で、一人暮しは 1 割の 18 名のみとなっている(無回答 6 名)。多摩大学の学生の一人暮し比率は低めとなっている事がわかる(図 9-2)。特に、女性の一人暮し比率は 6%と更に低い比率となっている。

現住所に関しては、川崎市在住が 21 名と最も多く、2 位が多摩市で 19 名、3 位が横浜市で 15 名、4 位が八王子市で 13 名となっている。多摩市・八王子市等の近隣も多いが、川崎・横浜といった遠方から通ってくる学生も多い事が見て取れる(図 9-3)。

多摩市に関しては、19 名の内 11 名が一人暮しの学生であり、多摩市に親と同居している学生の割合は低くなっている。一人暮しの学生の内、約 4 割の 7 名は多摩市外に居住しており、必ずしも通学上の利便性を考えて住居選択を行っていない状況とも考えられる(図 9-4)。

第2項　住環境満足度・定住志向に関する分析結果

まず、現住所に関する満足度と定住志向に関する分析を行った。

男女別による現住所への満足度の差異は見られず、共に平均 1.2 と「やや満足」を示す結果が得られている(図 9-5)。定住志向に関しては、男性の平均が 0.45、女性の平均が 0.69 と、いずれも「当面は住み続ける」意向を示しているが、女性の方が 0.24 ポイント定住志向は強くなっている(図 9-6)。

住居形態による現住所への満足度は、同居の平均が 1.28、一人暮しの平均が 0.71 と「やや満足」を示しているが、同居の方が 0.56 ポイント満足度は高くなっている(図 9-7)。又、定住志向に関しては、同居の平均は 0.64 と「当面は住み続ける」意向を示しているが、一人暮しの平均は-0.29 と「移りたい」意向を示す反対の結果となっている(図 9-8)。

また、現住所への満足度と定住志向の相関に関しては、現住所に満足している人ほど定住志向が強く、住み難いと回答した人は転居志向が高いという相関がみられる(図 9-9)。但し、転居志向が強い人の中には、現住所に満足している人も多くみられ、就職その他でのライフスタイルの変化を想定している等、現住所への満足度以外の要因も影響していると考えられる(図 9-10)。

若者の地域への定着を促進するには、やはり住環境への満足度を上げるのが必要である事がわかる。特に、定住志向の高く見られる女性へのアプローチが必要ではないかと考えられる。

第3項　住環境の満足度を構成する要因に関する分析結果

次に、どんな要因が若者の住環境の満足度に影響するかについて、アンケート結果から分析を行った。住環境に関する各要素の満足度と総合満足度の相関係数分布の結果を図 9-11に示す。

現住所に関しては、日当り、緑の豊かさ、交通の便、買い物の便での満足度が高く、地域活動、騒音・振動、空気のきれいさで低くなっている。しかし、総合満足度との相関に関しては、騒音・振動、火災や災害危険性で相関が高く、集会施設、医療施設で相関が低くなっている(図 9-11)。

若者においても、安全性や騒音・振動の総合満足度へ与える影響が大きい。しかし、健康状態が良好で学校等で友人との交流場所に事欠かない若者にとって、医療施設や集会施設は総合満足度へあまり影響しないと考えられる。

図 9-12から図 9-25に、住環境に関する各要素と現住所満足度(住み良さ)の相関分析結果を示す。

第4項　定住志向を構成する要因に関する分析結果

更に、どんな要因が若者の定住志向に影響するかについて、アンケート結果から分析を行った。定住志向に関する各要素の満足度と定住志向の相関係数分布の結果を図 9-26に示す。

現住所に関する満足度を構成する要素に関しては、第三節の結果と同じであるが、定住志向との相関に関しては、異なる傾向を示している。総合満足度においては、騒音・振動、火災や災害危険性が高い相関を示したが、定住志向においては、買い物の便、交通の便、ごみ処理といった日常生活の利便性に関する項目の相関

が高くなっている。又、総合満足度においては、集会施設、医療機関の相関が低かったが、定住志向では、医療機関の相関関係は相対的に高くなっており、集会施設、緑の豊かさの相関が低くなっている(図 9-26)。

若者の定住志向に関しては、日常生活の利便性に関する充足度の影響が大きく、行政等で力の入れがちな集会施設に関しては、定住志向への相関性がほとんど見られなかった。

図 9-27から図 9-40に、住環境に関する各要素と定住志向(住み続けたさ)の相関分析結果を示す。

第5項　若者の住まいに対する考えと性別・住居形態に関する分析結果

若者の住まいに対する考えでは、「通勤通学の便」、「生活環境の豊かさ」、「買い物の便」に関して優先的に考える傾向が見受けられる。相対的に優先度が低いのは、「親との同居」、「親の近くに住む」、「どこでもいい」の項目となっている(図 9-41)。若者にとっては、誰と住むかよりどういった生活環境で暮らすかの方が重要であると考えている事がわかる。

また、住まいに対する考えと性別の相関について分析したところ、「親の近くに住む」の項目に関しては、女性の方が 0.92 ポイント高く、最も男女差の大きい回答となった。次いで、「行政サービスの充実」(0.48pt 差)、「親との同居」(0.36pt 差)、「生活環境の充実」(0.34pt 差)と、女性の方が住まいに対する考え方のポイントが高くなっており、住まいに関して女性の方がこだわりのある結果となった。逆に、男性の方がポイントが高かったのは、「色々な土地に住む」(0.68pt 差)、「どこでもいい」(0.38pt 差)であり、様々な場所で色々な経験をしたい男性の傾向を示している(図 9-41)。

中でも注目されるのは、「住民と仲良くしたい」と「一人で気ままに暮らしたい」が共に平均 3.55 と拮抗しており、男女差についてもほとんど見られなかった。周囲とは仲良くしたいが干渉されたくないという若者の意向を示しているのか、住民と仲良くしたいグループと一人で気ままに暮らしたいグループが存在するのかに関しては、より詳細な調査が必要と考えられる。

図 9-42から図 9-56に、住まいに対する考え方と性別差の相関分析結果を示す。

更に、住まいに対する考えと住居形態の相関について分析したところ、「どこでもいい」の項目が一人暮しにおいて 0.68pt 低く、住居形態差の最も大きい回答となった。一人暮しでは、「親の近くに住む」(0.33pt)、「親との同居」(0.33pt)が低くなっており、一人暮しの若者は、親から離れて住みたがる傾向を持ち、住む場所に関するこだわりが高い結果を示している。逆に、同居の学生においては、「自然豊かな土地で暮らす」(0.26pt 差)、「都会で暮らす」(0.21pt 差)が高くなっており、どんな土地に住むかを重視する傾向が見て取れる(図 9-57)。

図 9-58から図 9-72に、住まいに対する考え方と住居形態差の相関分析結果を示す。

第6項　若者の地域活動に対する興味に関する分析結果

地域活動に「興味なし」の回答が 71 名と最も多く、「参加中」は 3 名と少ない結果となっている。しかし、「参加経験あり」と「参加したい」の回答を合わせると 65 名と、興味のある若者と興味のない若者がほぼ半々である結果となっている(図 9-73)。

どのような地域活動に興味を持っているかの分析結果では、「盆踊り・お祭り」が 3.14pt とやや興味を持っており、次に「フリーマーケット」(2.73pt)「趣味・スポーツサークル」(2.71pt)となっており、楽しみながら参加できる地域活動のポイントが比較的高くなっている。逆に、「市政モニター・座談会」、「自治会・コミュニティ事業」、「道路・公園清掃」等の義務感の強い地域活動に関する興味が低くなっている(図 9-74)。

若者の地域活動への興味を上げるには、楽しみながら参加でき、義務感の負担を感じさせないような仕組みを考えることが必要ではないかと考えられる。

また、性別による特性については、全般的に女性の方が地域活動への興味が高く、最も男女差が大きかったのは「盆踊り・お祭り」の 0.46pt で、次いで「国際交流活動」の 0.29pt となっている(図 9-74)。図 9-75から図 9-86に、地域活動への興味と性別差の相関分析結果を示す。

更に、地域活動への参加意向による特性については、全般的に地域活動に参加中・参加経験のある人が高

い興味を示す傾向にあり、最も差の大きかったのは「盆踊り・お祭り」の 0.96pt であり、次いで、「国際交流活動」、「防災活動」の 0.85pt であった。逆に、最も差の小さかったのは「フリーマーケット」であり、地域活動への参加の意向にかかわらず興味を引く活動であると考えられる(図 9-87)。図 9-88から図 9-99に、地域活動への興味と参加意向差の相関分析結果を示す。

以上より、地域活動の内容によって若者への効果的アプローチの仕方が異なることが伺われる。「盆踊り・お祭り」や「国際交流活動」は、女性の興味が高く、参加意向により興味の有無が異なるため、興味を持つ女性をターゲットとしたアプローチを行い、口コミ等による若者内での波及効果を狙う事が効果的と考えられる。また、「フリーマーケット」は、男女差や参加意向による興味の差異が小さく、幅広い若者へのアピールを試みる際には有効な活動と考えられる。「市政モニター・座談会」、「自治会・コミュニティ事業」、「道路・公園清掃」等への興味の低さに関しては、さらに詳細な調査が必要だが、義務感の高さが敬遠される要因の一つではないかと推測される。

第7項　若者の地域活動参加へのきっかけと参加を妨げる要因の分析結果

若者の地域活動参加のきっかけに関しては問 7-1 の自由回答から、地域活動への参加を妨げる要因に関しては問 7-2 の自由回答から分析を行った。

自由回答欄の主要な回答を表 5-1に示す。内容から、地域活動への参加のきっかけは、友人や親に誘われ/薦められが多い。学業の一環として参加したとの回答もあり、参加のきっかけの一つになっていると考えられる。自主的な参加もあるが、割合は少なくなっている。

また、不参加の理由については、情報が少なく、何をやっているかわからないとの回答が多くみられる。更に身内だけの集まりのイメージが強く、一人で参加するのが躊躇われる。といった参加へのハードルの高さが伺われる。

表 5-1：地域活動参加の理由と不参加の理由(自由記述欄より)

地域活動参加の理由
友達に誘われたから
興味があってやってみたいと思ったから
学校のイベントや友人の勧め
学業の一環として
友人や親に誘われて
親に誘われて
学校のゼミ/学業の一環として
高校の時部活動で
地域の人々と触れ合いたいと思った
ボーイスカウトに所属していたから
留学生と仲良かったので
一度やってみたかったから
小さい頃からの習慣なのできっかけも何も分からない。
興味！！入ったら楽しかった。
友人が団体に所属していて誘われた

地域活動不参加の理由
参加する機会がなかった (日時がわからない・予定が合わないなど)
情報が少ない
参加するにもきっかけが必要な事もあり一人で行くのは少し恥ずかしい面があるから
活動の存在についてあまり知らない
入りにくいイメージがある(身内だけの集まりに感じる)
時間がない・何をしているのかわからない
具体的に何をしているのか知らない 周りに一緒にやろうという人がいない
どのような行事やボランティアがあるか知らない
一緒に参加する身近で親しい人がいなかった
参加の仕方がわからない
参加しやすいうまいキッカケがない
どんな事をしているのかよくわからないから
何があるかわからないから
一人で参加する勇気がなかったから

第8項　若者の多摩ニュータウン地域別印象に関する分析結果

アンケートの問 8、問 9 から、多摩ニュータウンの各地域の若者の持つ印象を調査した。14 項目の評価において、落合、南大沢の平均が高く、永山、向陽台の平均が低い結果となった(図 9-100)。

落合に関しては、「明るい」、「快適」、「清潔」、「人工的」、「楽しい」、「暖か」、「活気ある」、「安全」、「近代的」、「新しい」、「雰囲気良い」、「開放的」の各項目で Top3 に入っており、平均点が高かった。

南大沢に関しては、「美しい」、「明るい」、「快適」、「清潔」、「人工的」、「活気ある」、「近代的」、「開放的」の各項目で Top3 に入っており、平均点が高かった。

永山に関しては、Top3 入りはなく、「不快な」、「自然な」、「つまらない」、「寒々しい」、「不活性な」、「伝統的な」、「古い」の各項目で Top3 となっており、平均点が低かった。

向陽台に関しては、「醜い」、「不快な」、「不潔な」、「騒々しい」、「危険な」の各項目で Top3 となっており、平均点が低かった。

回答サンプル数が十分でない地域もあるが、ニュータウン内においても地域により若者の持つ印象が大きく異なっており、これらの特性を踏まえた上で、施策の検討を進めていく必要があると考えられる。

地域の印象に関する項目別分析結果を、図 9-101から図 9-114に示す。

第9項　アンケート分析結果のまとめ

若者の住と地域活動に関する意識調査から、男女差や同居・一人暮しの住環境の違いにより、特徴的な傾向がみられることがわかった。特に、地域活動に関する興味は、約半数の若者が興味を持っている事が判明し、参加に対するハードルが下がれば、若者の力を地域活動に発揮してもらう可能性があることがわかった。

活動内容としては、楽しんで参加できるものが好まれ、義務感の強い活動は敬遠される傾向が見受けられた。いかに活動を楽しむことができるか、また義務感を軽減し主体的に参加してもらうにはどうしたらよいかを工夫する必要があると考えられる。

また、地域活動への参加に対しては、情報不足や身内同士の閉鎖性から参加をためらう様子が見受けられ、参加へのきっかけとしては、友人や親の誘いといった知人関係の繋がりがきっかけとなることがわかった。

第4節　住と地域活動に関する若者の意識調査のまとめと考察

グループインタビューと量的アンケート調査の結果から、若者にとって地域活動とは「壁があり、ハードルが高く、一人で参加しにくい・・」存在に映っていることがわかった

情報不足から生じている「壁」を取り除き、若者に地域活動を理解してもらうには、これまでの情報発信の方法では十分でないことが考えられる。では、どうしたら若者に情報を届け、地域活動とその活動に取り組む人々を知って貰えるのだろうか？

その為には、若者がよく利用する情報源に発信を行うことが望ましいのではないかと仮説を立てた。現代の若者が情報交換に頻繁に利用している、SNS に着目し、SNS を活用した地域情報の発信により、地域活動へ若者を誘うことができないかについて、更に調査を進めた。

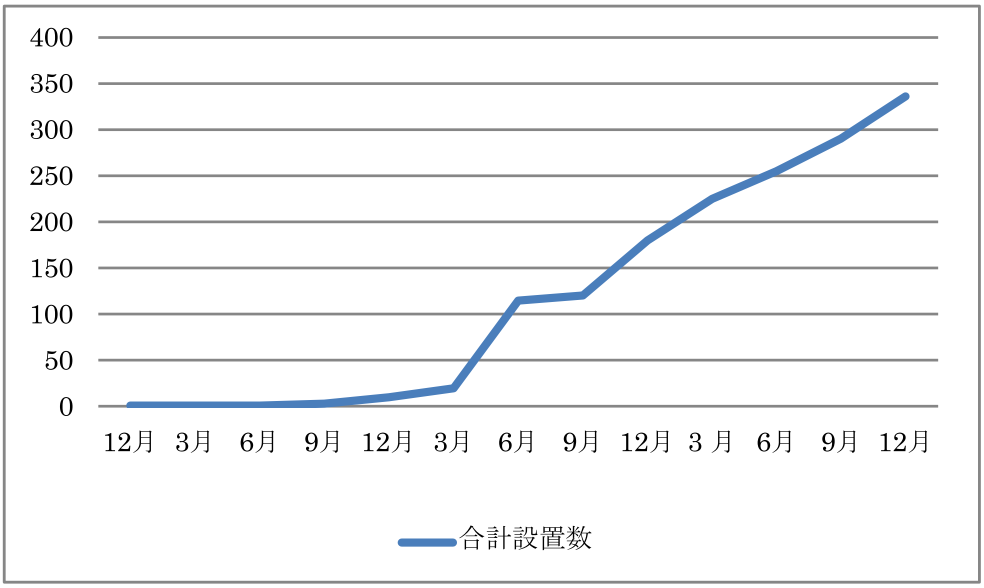
第6章　　SNSを活用した地域活性化に関する検討

第1節　今注目される地域SNS

地域、地方の活性化の為に今地域SNSが注目され、平成17(2005)年の熊本県八代市の、地域SNS「ごろっとやっちろ」を皮切りに、平成20(2008)年には336カ所が確認されのべ44万4,411人が参加している。地域SNSは単なるネット上のコミュニティの場にとどまらず、それをきっかけに現実社会においての地域へのボランティア活動や商店街の活性化、地域通貨までにと発展しているところも存在する。行政にも注目されており、平成17(2005)年には総務省が新潟県長岡市と東京千代田区で実証実験にも取り組んでいる。

地域SNSはその地域よって多種多様であり、生活環境まで変えうる新時代のメディアになりうる可能性を秘めている。さまざまな社会のゆがみが露呈してきているにもかかわらず、だれも具体的な解決策が提示できていない。今日、その解を持っているのは、コミュニティに潜在する地域力であり、地域SNSは、眠れる可能性を引き出す新しいメディアとして、今ここに出現し成長すると期待されているのである。

図 6-1：地域SNSの合計設置数(2004年12月～2008年2月)



出典:庄司昌彦 『地域SNSサイトの実態把握、地域活性化の可能性』p15

第2節　SNSの歴史、始まり

「Friendster」という平成14(2002)年にアメリカで生まれたものが、一般的に最初のSNSと呼ばれている。これは、プロファイルマッチング(日本で言う「出会い系サービス」に近い)と言われていたサービスに、ユーザーの友達リストをユーザーの友達リストを顔写真入りで載せた初めてのサービスであった。この方法は現在のほとんどのSNSが取り入れている。その後、ビジネス用途の為や、大学の同窓生の向けなどの様々形を持ったSNSが生まれてきた。

日本での始まりは2004年頃からであり、この時期に「mixi」や「GREE」などがサービスを始めている。その後、これらのSNSは短期間で急速にユーザーを獲得していった。中でもmixiはユーザー数が2009年9月30日現在、約1,792万人。また平成18(2006)年時点での平均利用時間は3時間29分で日本ドメインでは2位となっている。

第1項　SNSの定義、特徴

現在SNSのサービス内容は多様化しており、特定のトピック(音楽、映画など)に特化したものや、動画配信

などほかのサービスとSNS的な要素がミックスしたサービスなどが登場してきている。例えば、1000 万人程のユーザー数を持つ「モバゲータウン」は携帯向けポータルサイトとして、ゲームや仮想通貨と共にSNSを取り入れている。

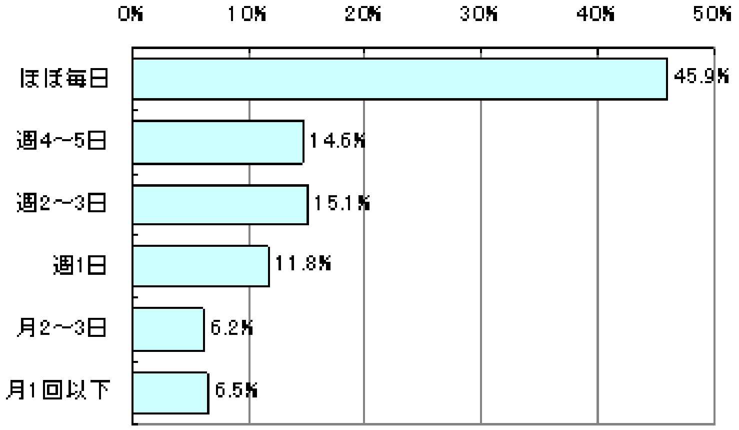
このような状況を踏まえ、国際大学 GLOCOM 研究員の庄司昌彦氏は、これからは特別SNSという名称が使われなくなる可能性があると示唆したうえで、SNSの定義を「ユーザーの日常の人間関係をインターネット上のサービス内で可視化・共有し、それを利用してユーザー間の情報共有やコミュニケーションを促進するサービス」としている。

SNSの特徴といえるのは、以下の8つである。

1. 友達コレクション
2. 知人関係をもとにした信頼
3. 招待制によるプレミア感と口コミ
4. 招待制とサイトのビジョン共有
5. 「足あと」と中毒性
6. 友達の友達の発見。共通の友達の発見
7. 級友からの久々のコンタクト。近すぎず、遠すぎない関係の維持
8. ユーザーの多面性による新たな一面の発見。新しい情報の取得

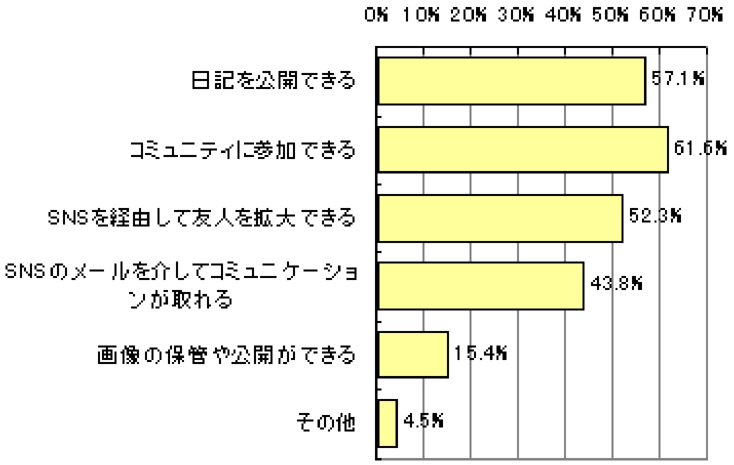
これらの特徴をもとに、登録ユーザーからの招待がなければサービスに参加出来ない「招待制」かユーザーが自由に登録できる「登録制」であるか、パソコンからのアクセスがメインなもの、携帯電話からがメインなもの、さらに対象とするトピックやユーザーの種類を限定するか、否かといった観点からSNSを分類分け出来る。

図 6-2: ユーザーの SNS の利用頻度



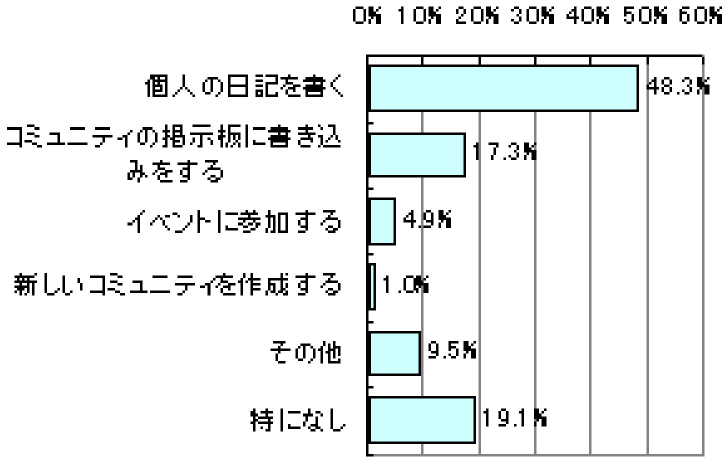
出典：goo リサーチ　(2007/04) http://research.goo.ne.jp/database/data/000461/

図 6-3: SNSサイトに満足している機能



出典：goo リサーチ (2007/04) http://research.goo.ne.jp/database/data/000461/

図 6-4: SNSコミュニティを利用する目的



出典：goo リサーチ (2007/04) http://research.goo.ne.jp/database/data/000461/

第2項　海外におけるSNS

今日のSNSの先陣を切っていた「Friender」であるが、現在は「MySpace」という別のSNSに首位の座を奪われている。MySpace は、2008 年 5 月 2 億 300 万を超えるユーザー数を獲得している。

特定のコンテンツに特化したものでは、写真共有の「Flickr」や動画共有の「YouTube」などが挙げられる。また、ユーザー特化型SNSとしては「Facebook」も人気が高い。

特殊なものとしては、インターネット上に仮想世界をつくる「Second Life」や最近急速に認知度をあげている、つぶやきによりゆるいコミュニティをつくる「twitter」も挙げられる。

第3項　国内におけるSNS

平成 17(2005)年以降、SNSの知名度は上昇し多くのユーザーが利用を開始している。PCベースのSNSは、mixi の独壇場であり一人当たりの月間訪問頻度は 19.8 回で、これは Yahoo!(28.1 回)に次ぐ二位である。国内の他には、10代に特に人気のモバゲータウンが mixi を追う形である。Mixi を運営する株式会社ミクシィ、モバゲータウンの株式会社ディー・エヌ・エーはともに東証マザーズへの上場を果たしている。

また、学生、女性、シニア、経営者、などの特定ユーザーを対象としたSNSや、音楽、子育て、ペット、スポーツ、ファッションといったトピック限定のSNSが数多く登場している。

第3節　地域SNS事例

第1項　あみっぴー(西千葉)

西千葉の地域SNS「あみっぴい」は、平成18(2006)年2月からSNSサービスの提供を開始したNPO法人TRYWARPが運営するサイトである。

JR総武線の西千葉駅を中心とする地域を対象とする地域SNSである。
ここの「ゆりの木通り商店街」はあみっぴいにより商店街や地域住民、学生などさまざまな人々の間に、お互いに顔が見える人間関係がしっかりと築かれている。もちろん、SNS上でも活発なコミュニケーションが行われている。

10年ほど前まではこの地域では学生と地域住民の間ではそれほど活発ではなかったという。それが、地域SNS「あみっぴい」によりいままでつながり得なかった人たちがつながり、コミュニティの活性化に大いに役立ったのである。ユーザー数約1200人というのは、SNSとしては決して多くない。しかしながら、招待がなければ会員になれなかったり、プロフィールに顔写真を義務付けられたりするのが、SNSに対する信頼を増しそれが地域コミュニティの活性化につながっているのに違いない。

このあみっぴいのように、大学が地域SNSに関わり、地域において重要な役割を担っている先進事例はいくつもある。大学には技術や知識があり、サークルやNPO活動、ベンチャービジネスなどに取り組む多様な学生や教員がいて、地域活性化の取り組みに結び付けることが可能なのである。また、4年で学生が入れ替わるなど人材の流動性が高く、地域の側には他の土地から人を受け入れる寛容さもあると考えられる。

図 6-5: 地域SNSサイト、あみっぴい(http://amippy.jp/)

第2項　ひびの(佐賀県)

佐賀県を対象とする地域SNS「ひびの」は平成18(2006)年11月からSNSサービス提供を開始した佐賀新聞社のサイトである。全国の地方紙に先駆けてSNSを開設したという意味では先駆的な事例である。SNSのユーザーは8000人を超え、全国の地域SNSの中で最も多い(2008年3月)。

ひびのは、SNSのスタート時に、県の子育て支援事業と連携し、情報公開のコミュニティを設けた。そのため、子育てをしている30代女性が初期からコアユーザーになっている。そのために、食育など子育てに関するテーマのコミュニティや、友人同士で日記にコメントを付け合うかたちでの盛り上がりが多い。

オフラインのイベントは、2007 年 11 月にAMラジオ局と共催で「ひびのフェスタ」を開催し、1500 人の参加者を集めた。

収入源としては、スーパーマーケット2社、地元のラジオ局がスポンサードコミュニティを運営している。

担当の牛島氏は、「メディアとしての地域SNSは、瓦版のようなものである」と例えている。現在の新聞紙は情報を発信するだけである。だが瓦版は誰かが情報を収集、編集して人々に伝える、そしてそこから集まってきた人々に口コミが生まれて、情報がさらに伝わっていくといった情報の循環がある。牛島氏は「地域SNSによって瓦版のような環境を生みだしていきたい、人々の意見が切磋琢磨していく場を担っていきたい」と述べている。

図 6-6: 地域SNSサイト、ひびの(http://www.saga-s.co.jp/)

第3項　　ちょっぴー(東京都千代田区)

千代田の地域SNS「ちょっぴー」は総務省の実証実験として平成 17(2005)年 12 月 16 日～平成 18(2006)年 2 月 15 日の62日間にわたって行われた。「ちょっぴー」では、実験期間の終了時までに 903 人がユーザー登録し、125 個のコミュニティが設置された。ユーザーは男性が多く、平均年齢は 38.0 歳。10 代や 70 代、80 代というユーザーもいた。

「ちょっぴー」内では、誰でも自由にコミュニティを開設することができる。

「まちみらい千代田」が設置した「交通機関の運行状況速報」というコミュニティは興味深い。このコミュニティでは、ユーザーからの自発的な情報提供によって、遅延や運休についての情報が共有されている。ネットコミュニティでの情報共有がほかのメディアに対して優位性を発揮できる使い方だといえるだろう。

また、「地域サイト「千代田 day's」編集会議」というコミュニティでは「そこに住み、働き、学ぶ人々が、自分たちのために作る」をモットーに地域情報を発信している。おもに桜の開花情報や観光スポットの情報、飲食店の情報、生活情報などが掲載されている。運営は、財団法人まちみらい千代田と千代田区(政策経営学部　企画総務課・広報広聴課)が運営委員会を作って行っている。また、一般ユーザーも参加できるようにSNS上で編集の相談を行っている。一般に公的な情報サイトの運営は一方的になりがちであるが、このように読者に開かれたコミュニティをSNS上で運営することで双方性を高めている。

「千代田区こども110番」という区民が設けてコミュニティもある。このコミュニティはこども子供をもつ父母らのグループが、子供の通学路などの安全を守る為に情報交換等を行うコミュニティである。平成 18(2006)年 1 月 27 日に、区内で刃物を持った男が突然病院で人を殺傷するという事件があった際には、速報の提供、情報共有の場として機能した。さらに、この後、このコミュニティでの議論をきっかけとして区担当者や公立小学校PTA代表者らによるオフラインの会議が実施された。

上記が示す通り、この地域SNSは行政中心の運営に関わらず、地域住民からの自発的なコミュニティの立ち上げや情報提供に成功している。

図 6-7: 地域SNSサイト、ちょっぴー(http://www.sns.mm-chiyoda.jp/)

第4項　　地域 SNS 事例から得られる所見

これらの地域SNSを含む事例を概観していくと、友人とのコミュニケーションやコミュニティでの情報交換の他に、オフライン活動の活性化、既存の人的ネットワーク間の橋渡し、地域メディア化という三つの共通する傾向がみられる。

・オフライン活動の活性化

地域SNSでは、ユーザーが実際に顔を合わせられる距離に住んでいることを活かし、オフ活動が活発に行われている。例えば、SNSでの交流をきっかけとして、ユーザーがスポーツをしたり音楽イベントを開催したり、ボランティア活動をしたりしている。先述した「あみっぴぃ」では、オフラインのNPO活動を補完するための道具としてSNSを活用している。

・既存の人的ネットワーク間の橋渡し

既存の組織や活動の枠を超えて、新たな人と人のつながりを作り出す「橋渡し」も意識的に行われている。つまりは、友人に友人を紹介するといったことがSNS内で行われている。まちづくり活動やサークル活動には、必ずといっていいほど積極的に働き、人と人、人とリソースなどの「コネクター(ハブ)」となる人物がいる。このようなキーパーソンを意識的に招待し、つながっていなかった人同士を結びつけていくという取り組みは、地域SNS

内のコミュニケーションの濃度を上げ、また現実社会における継続的で強い結束型の人間関係の形成に役立つのではないかと考えられる。
・地域メディアの活用
　地域SNSは、ユーザーの手によって地域情報を日々生成し、保存し、伝達する、新たな「地域メディア」になろうとしている。だが、地域SNSは会員制のサイトであり、しかも利用者は自分の友人に関する情報だけを見るような仕組みになっているため、すべての会員の間で話題を伝えたりすることができない。そこで、地域SNSの運営者が話題を集め、編集を加えて他の利用者外部に向けて発信している事例が見られる。例えば、地方紙等のメディアが直接SNSの運営に乗り出し、番組や紙面とSNSの連動企画に取り組んでいるのもある。媒体の種類やフリーペーパーやラジオ、新聞、テレビ、動画、ストリーミング中継などへと広がっている。

第4節　地域SNSの課題、問題点

　しかしながら、現在の地域SNSには大きく2つの問題が存在する。まずは管理運営の問題である。地域SNSの管理者は個人単位から始まり、商店街の主、NPO団体、企業、行政、大学等様々である。ただ、その中でSNSとして成功を収めているのは運営管理の基盤が最低限しっかりしている必要がある。一つの情報メディアとしての発信力や継続的にサイトを続けていくためには技術力や資金力も欠かせず、ユーザー数の増加に伴ってそれらに要求されるレベルも高まっていく。したがって、趣味程度で始まった地域SNSはなかなか続かない。
　また、「近すぎる管理者の問題」もある。今日のSNSのシステムのほとんどは、ユーザーの個人情報に限らず、「足あと」といったユーザーの行動履歴までも管理者は知りうることが出来る。つまり、地域SNSでは自分の行動履歴などは不正にのぞき見されていないと頭では思っていても、日常の人間関係において非常に近い人（たとえば、自分の住んでいる地区の町内会長さん）が管理者および管理団体にみられている可能性があるのである。したがって、地域SNSを運営する際には、ユーザーからの管理側に対する信頼性を十分に配慮する必要があるのである。

　もう一つの問題は集客力、特に若者である。地域SNS研究会の平成 19(2007)年 2 月の情報によると、SNSサイトの「作っただけで放ったからし」にしているものを除くと平均ユーザー数は 100~300 人程である。ユーザー数の多い地域でも。福岡県の「VARRY」約 4500 人、佐賀県の「ひびの」約 3500 人（2007 年 2 月）である。これは、mixi のユーザー数約 1, 792 万人（2009 年 9 月）と比べると圧倒的に数が違う。ほとんどの地域SNSは「0penPNE」というSNSプログラムを使用し、自分たちで一から創っていっている。特に大学や企業が絡んでない地元住民発のSNSは技術力、資金力に乏しくユーザーの獲得に苦労している。もちろん多ければ地域SNSとして優れているというわけではなく、あえて小規模にすることでSNS内の親近感や信頼性を高めるという効果もある。しかしながら、基本的にユーザー数とSNSの活性度は比例する。そしてもちろんSNSの活性化は地域の活性化につながる。ユーザー数が多ければコミュニティの増加、議論の活性化につながる。そしてそれは、地域でのイベント、新しい人間関係の形成へとつながっていくのである。
　また、既存の地域SNSは若者からのアクセスに弱いというデータがある。mixi の場合、35 歳未満の人々がパソコンで 8 割、携帯電話からは 9 割以上を占めているが、地域SNSでは平均年齢が 40 歳前後というものが少なくない。例えば、東京都葛飾区の「かちねっと」では 47 歳（2008 年 3 月）、横浜の「ハマっち！」では 39 歳（2008 年 3 月）と高齢である。これは、地域SNSが掲げている地域メディアやまちづくりなどのテーマは 40 代の以上の人々は関心が高いが、20 代の若者にとってはやや取っつきにくいのだろう。
　このように、年々全国のSNSの設置数は伸びているものの、管理の問題、集客の問題というのは付きまとってくる。これからは、それらを加味した上で新しい形のSNSが必要になってくる。

第5節　Mixiの可能性

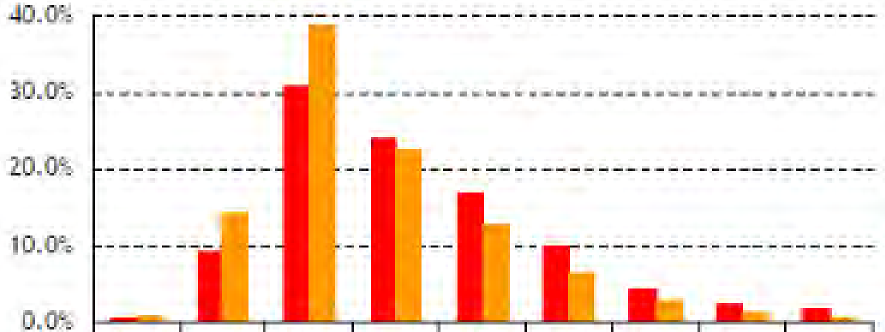
既存の地域SNSの問題点、管理運営と集客力。事例をみると今までのSNSは、独自性を求めるために、ゼロから立ち上げSNSをつくり上げていった。その為に、ユーザーを獲得すること、質を保ちながら継続的にSNSを運営していくことが難点であった。そこで我々は、独自に作り上げていくのではなく、すでに管理運営に信頼性があり、若者を中心としたユーザーを多く確保している既存のコンテンツに地域SNSを組み込めばいいのではないかと考えた。

そこで、mixi に情報を並べてみる。前述の通り mixi はユーザー数 1600 万人を超えておりその割合は 20 代全体で約 57%、20 代前半で約 66%とユーザーの割合が若者中心である。日本最大のSNSであり、SNSのサービス会社としては初の東証マザーズへの上場を果たしている。管理運営に対する信頼性、ユーザーの獲得力ともに申し分ない。

Mixi の特徴を見てみる。まず完全招待制を採用している。これは既に入会している登録ユーザーから招待を受けないと利用登録ができないというものである。この方式により、ユーザーそれぞれの素性が明らかになり、コミュニティを健全で安心感がある居心地の良いものにするという効果がある。サイト内の機能としては、マイミクシィ、日記、コミュニティ、フォト、レビュー、ニュース, mixi アプリ、ボイス、足あと等が存在する。いくつか説明するとマイミクシィとは、通称「マイミク」と呼ばれるもので、mixi 上の自分以外のユーザーを専用のリストに最大 1000 件まで登録することが出来る。どちらかが相手側にマイミクシィの申請をし、相手が承認した際に成立し、リストに追加される。ちなみに、このリストが 0 の状態で一定期間が経過するとアカウントが削除される。また、コミュニティとはそこのグループに所属することにより、自分と同じ考え・興味を持つ人、同じ環境にいる人と集まることができる。コミュニティ数は 360 万人を超えており、その中で最も多いメンバーを抱えているコミュティのメンバー数は 45 万人である(2009 年 11 月現在)、最後にボイス機能。これは最大全国 150 文字でひとことコメントをつぶやくことができる。SNSに参加したいが、日記などを丹念に書くのは面倒、リアルタイムの状況をアップしたいとのニーズにこたえている。

このように、mixi は管理、集客の面において確かな実績と信頼をもっている。多くのユーザーを抱えるだけでなく、その多くが 20 代を中心とする若者である(図 6-8)。

図 6-8: 年齢別データ



	15-17	18-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-
全ユーザー	0.6%	9.3%	30.8%	23.8%	16.7%	9.8%	4.6%	2.3%	2.0%
mixiモバイル	0.8%	14.4%	38.7%	22.4%	12.6%	6.4%	2.8%	1.2%	0.7%

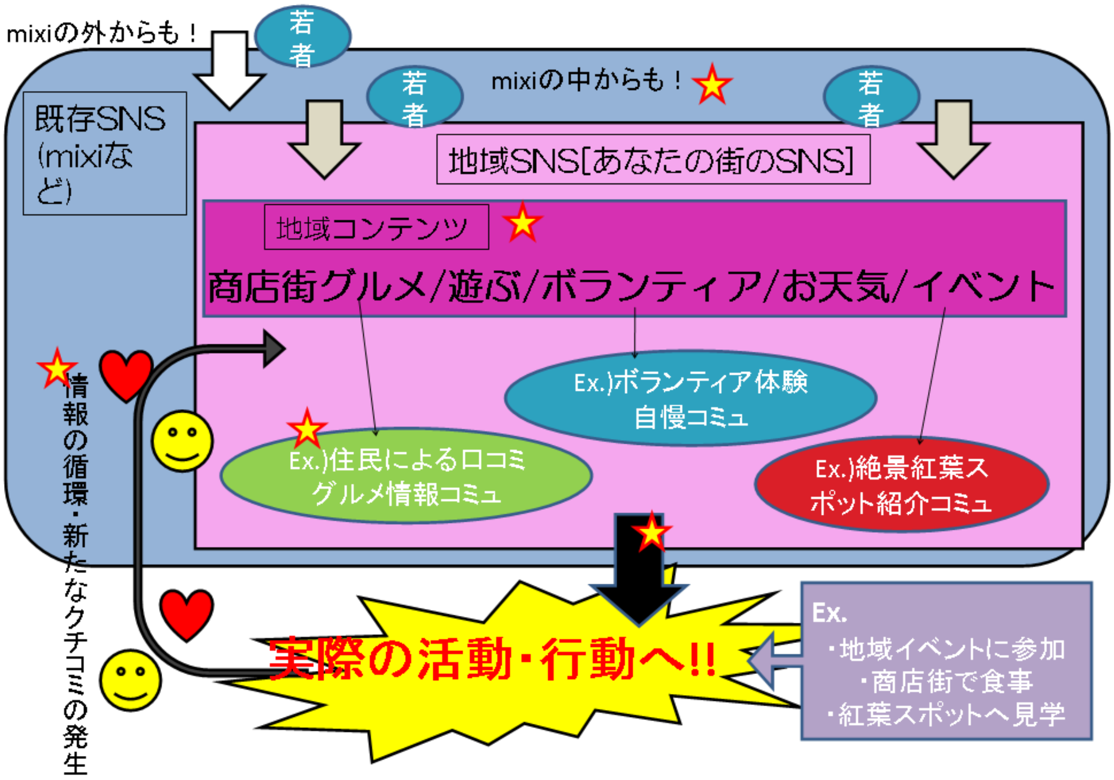
出典：株式会社ミクシィ 2008 年度第 4 四半期及び通期決算説明資料

第７章　　わっしょい!!TAMA の提案する若者の地域活動への誘導策

第１節　Mixi の中にコミュニティをつくってしまえばいい

我々は、地域SNSの問題点、集客力、管理力の懸念。そして、mixi の若者を中心とするユーザーを獲得する集客力、信頼のある管理運営力を踏まえ以下の図のような仮説プランを立てた。つまりは、地域SNSをゼロから立ち上げ、ユーザーを獲得していくとのではなく、既に多くのユーザーを確保している信頼のある既存の媒体に地域SNSを組み込めばいいのではないのかという考えである。要するに、mixi のなかに多摩市のコンテンツ、コミュニティを組み込み、mixi 内に多摩市SNSをつくるというものである。

図 7-1：わっしょい！！TAMAの考える地域SNS



第２節　グループインタビューの実施

我々は、上記の仮説を検証するべく大学生計 10 人程に対してグループインタビューを実施した。
質問内容としては、mixi に関するものから始まり、地域に対する興味関心、どうしたら各コンテンツの特定コミュニティに入ってきてくれるか？どうしたら実際の活動・行動に移してもらえるか？どうしたらSNSサイトを継続的に使い続けてくれるか？といったものを中心にインタビューを行っていった。
まず、mixi についてであるが、インタビューをした大学生のほぼ全員が mixi を利用していた。また、利用者はほとんど毎日利用しており、多い人では 3 時間に 1 回という人もいた。多くの大学生の大学生にとって、mixi はもはや生活の一部であり欠かせないものになっているという状況であった。
本題の地域SNSに関する質問、地域に関するどんなことに興味があるのか？という問いに対しては、大学生らしい様々な回答が得られた。女性からは、グルメ情報、お祭り情報、激安ショップ情報、フリマ情報、おもしろい看板情報、おしゃれな人情報、かっこいい人情報などがあった。一方、男性からは隠れた名店情報、癒しスポット情報、夜景情報、イベント情報、書籍、CD、DVD情報、天気や交通などの緊急性のある情報。などであった。
男女共通にあてはまったのは、グルメ情報や近隣の他大学情報、イベント情報などであった。残念ながらボランティア等の地域活動に対しての興味はとても低かった。また、地域にある施設、団体等の情報に対してというより、

地域にはどんな人がいるか施設や団体を利用しているのはどんな人かという、人に対する興味を感じ取れた。どうしたら各コンテンツの特定コミュニティに入ってきてくれるか？に対しては盛り上がり具合や興味があるか否か、特に多かったのは友達が入っているかどうかだった。友達に誘われたりとハードルを低くさせられるシステムが必要のようだ。 どうしたら実際の活動・行動に移してもらえるか？に対しては、そこに興味深い情報があり、携帯電話等を通じてアクセスしやすい環境であれば行動に移せる。ボランティア等の地域活動には興味があるので、情報が提示されていれば行動に移せる。友達や他大学との交流が出来るのなら活動をしたい。とのこと。

まとめると、学生は地域に対して地域活動を含め様々な興味を抱いている。特に興味の対象は人であるということ。そして現状としてそのような情報はなかなか存在せず、もしあれば一人では厳しいが友達となら参加したいとのことである。

第3節　最終的な提案内容

Mixi の中に地域SNSを置いてもらうことで、地域SNSのネックとなる集客力、運営力の問題を解決してもらう。地域という社会性、また新たなユーザーを獲得しうるという点おいてこれは mixi 側にとっても有益である。

具体的な内容としては、まず地域情報のコンテンツを充実させることに重きを置く。グループインタビュー等の調査において、地域情報へのアクセスが一番の問題点だったので、これが最重要課題となる。コンテンツの内容としてはグルインで出た、グルメ、ファッション、イベント、書店、隠れスポット、おっしゃれな人、かっこいい人情報、書店、他大学情報、掲示板、ボランティア情報である。

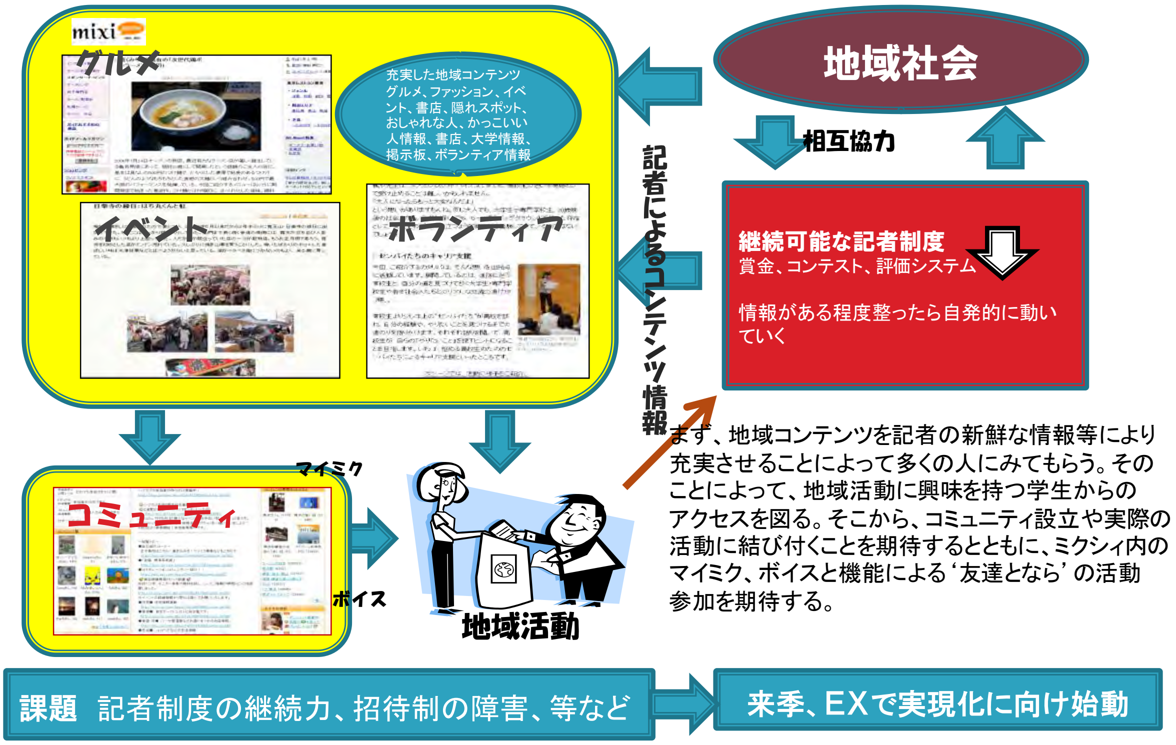
そして、充実したコンテンツを継続的に発信する為に記者制を提案したい。学生を中心とした有志を募り、地域へ出向いて取材しSNS上に発信してもらうのだ。学生に記者をやってもらう理由としては、第三者に記事をアップしてもらうことにより記事に対する信頼性を高める。また、学生をターゲットにしていえる為、学生の目線で記事を書いてもらう為、必然的に興味が生まれる。といってもボランティアでやってもらうには厳しいものがある。そこで、それに対してはアルバイトという形で動いてもらったり、SNS上で評価されるような仕組みを作りモチベーションを保ち続けてもらうシステムを構築する。正直、ここの継続力をもったシステムに関してはまだ研究の段階であり、来季への課題とする。そして、ある程度コンテンツが充実すれば、サイトに対する信頼性も増しアクセスが増えるに従ってコンテンツの記事は自発的に書かれていくと考える。

地域情報コンテンツを充実させることで、ある種地域情報のプラットホームのようなサイトにする。地域という共通項の下に多くの人がそこに自然と集まれば、間違いなくそこには人間関係が出来上がる。友達ができ、コミュニティが発生する。地域活動に興味がある学生は少数ながら確実にいるので、その少数が牽引役になりがら、友達やコミュニティといった行動へのハードルを下げうる要因を持ちながら、実際の地域活動に赴いてもらうといった流れである。そして、地域活動をした者は記者としてコンテンツに対して情報を提供してもらう。このように、鮮度のある情報の円を再び還元してもらうことで情報を循環させ続ける。また重要な点としては、縛り付けることのないゆるい人間関係である。訪れやすく発言のしやすい環境を作ることが、ユーザー数を増やし友達、コミュニティの形成、実際の行動へとつながると考える。その点で、日記より負担が少なくリアルタイムで思った事をつぶやくボイス機能等は有効だろう。

地域SNSは地域社会にとっておおいに有益である。NPO団体はボランティアによる働き手を常に求めている。SNSにより、活動内容が多くの人に認知されるだけでなく、学生を中心とした働き手を確保出来れば、NPOの活性化、そして地域の活性化につながっている。他にもアクセス数の多いサイトに自分のお店が掲載されれば、それは利益に直結しうることであり過疎化の進む商店街等にとってはおおいに喜ばしいことである。実際、地域SNSによって商店が活性化され、頼んでもないのに運営費として地域SNSにたいしてお金が支払われた事例もある。このように、地域SNSは地域社会にとって大いに得のある話であり、SNSと地域が相互に協力しあえる関係になれる。地域社会はSNSに対して情報を提供し、SNSは学生のマンパワーを生かし、行動し記事にしていくといった関係である。

あくまでも、地域SNSはツールでしかないが、このツールを通して多摩市の若者が立ち上がり、地域の活動に積極的に参加し、それによって地域が活気づいてくる。これが我々の理想の姿である。

図 7-2: 最終提案図



第8章　　まとめ

わっしょい!!TAMA では、「ニュータウン」の歴史的背景から、現在の課題まで多摩ニュータウンを軸に調査を行った。多摩市の市民情報センターへのインタビューや文献調査の中から浮き彫りとなった「地域活動への人的貢献確保の困難さ」に着目し、学生の観点からどのような活性化策が検討できるかの検討を行った。

学生へのグループインタビューや学生の住環境や地域活動に対する量的アンケート調査を行った結果、地域活動に対する参加の障害として、情報や人的繋がりの不足がある事が判明した。これまでの地域活動の情報発信は、自らの発信しやすいやり方で行う「Product Out」型の発信が多く、対象者とのコンタクトがある所で発信する「Market In」型の発想に乏しい所が見受けられた。

そこで、多くの若者が利用している SNS である mixi に着目し、地域情報発信のコミュニティーを設置する事により、若者の地域活動への関心を高める事ができないかを検討し、その可能性を学生へのグループインタビューにより検証を行った。

結果として、地域情報発信の代理店機能としての有効性が確認できた為、学生記者によるタウン誌的な地域情報発信の SNS コミュニティーの提案を行った。来期は具体的なプロジェクトゼミとして、具現化に向けた検討を継続する予定である。

また、今後の課題としては、コミュニティーとしての地域活性化の視点以外に、インフラ整備の状況や、土地の活用状況等を含めた包括的な調査を行い、多摩ニュータウン地域の実態をさらに知るとともに、土地・インフラ・人を結びつける形での提言を継続することが求められると考える。

第9章　　*Appendix. A* ： まちと地域に関する意識調査 *(学生アンケート)*

表 9-1： 実施アンケート内容(1/4)

まちと地域に関する意識調査

私たちはインターゼミの活動で「**多摩ニュータウンの再生**」というテーマに取り組んでいます。その中で、若い世代の人たちの住まいや地域に関する意識を明らかにするため、アンケートを実施することになりました。ぜひ皆様の声をお聞かせください。
なお、このアンケートは統計的に処理し個人を特定することはありません。また研究目的以外では一切使用いたしません。お手数ではございますが、ご協力をお願いいたします。

多摩大学インターゼミ　「わっしょい!!TAMA」班 一同

あなた自身についてお答ください。

- **性別**：［ 男性 ・ 女性 ］
- **学年**：［ １年生 ・ ２年生 ・ ３年生 ・ ４年生 ］
- **現在のお住まい**：（　　　　）［ 都・県 ］（　　　　）［ 市・区・町・村 ］
- **出身地 ※現在のお住まいと異なる場合のみ**
  ：（　　　　）［ 都・道・府・県 ］（　　　　）［ 市・区・町・村 ］
- **現在の居住形態**：［ 家族等と同居 ・ 一人暮らし ］

問１　現在住んでいるまちの環境について、どのような感想をお持ちですか？「悪い」「どちらかと言えば悪い」「どちらかと言えば良い」「良い」「分からない」のうち１つに○を付けてください。

	1 悪い	2 どちらかと言えば悪い	3 どちらかと言えば良い	4 良い	0 わからない
交通の便	1	2	3	4	0
買い物の便	1	2	3	4	0
緑の豊かさ	1	2	3	4	0
日当たり・風通し	1	2	3	4	0
空気のきれいさ	1	2	3	4	0
公園・遊び場	1	2	3	4	0
騒音・振動	1	2	3	4	0
ごみ処理	1	2	3	4	0
防犯・風紀の点	1	2	3	4	0
火災や災害の危険性	1	2	3	4	0
交通安全対策	1	2	3	4	0
医療施設	1	2	3	4	0
集会施設	1	2	3	4	0
自治体・サークルなどの地域活動	1	2	3	4	0

問２　総合的にみて、現在住んでいるまちは住みよいまちだと思いますか。（１つに○）

［ 住みよい ・ どちらかと言えば住みよい ・ どちらかと言えば住みにくい ・ 住みにくい ・ 分からない ］

問３　あなたはこれからも、現在住んでいるまちに住み続けたいと思いますか。（１つに○）

［ ずっと住み続けたい ・ 当分は住み続けたい ・ できれば他のまちに移りたい ・ いずれ転居するつもり ・ わからない ］

表 9-2：実施アンケート内容(2/4)

問４　あなたの住まいに対する考え方として、以下の項目はどの程度当てはまりますか？（１つに○）

	1 まったく あてはまらない	2 あまり あてはまらない	3 どちら とも言えない	4 まあ あてはまる	5 非常に あてはまる
買い物やレジャーに便利なところに住みたい	1	2	3	4	5
通勤・通学に便利なところに住みたい	1	2	3	4	5
行政サービスが充実したまちに住みたい	1	2	3	4	5
生活環境が整っているまちに住みたい	1	2	3	4	5
都会に暮らしたい	1	2	3	4	5
自然の豊かな土地で暮らしたい	1	2	3	4	5
親と同居したい	1	2	3	4	5
親の近くに住みたい	1	2	3	4	5
生まれ育った地に住み続けたい	1	2	3	4	5
いろいろな土地で暮らしてみたい	1	2	3	4	5
住むまちにあまりこだわりはない	1	2	3	4	5
住んでいるまちの人々と仲良くしたい	1	2	3	4	5
住んでいるまちをより良くしたい	1	2	3	4	5
ひとりで気ままに暮らしたい	1	2	3	4	5
家族と一緒に暮らしたい	1	2	3	4	5
その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　）					

問５　あなたは以下のような地域活動や行事、ボランティア活動にどの程度関心がありますか？（１つに○）

	1 まったく 関心がない	2 あまり 関心がない	3 どちら とも言えない	4 まあ 関心がある	5 非常に 関心がある
地域の年中行事（盆踊り、お祭り、餅つき大会など）	1	2	3	4	5
地域のバザーやフリーマーケット	1	2	3	4	5
趣味のクラブや文化・スポーツサークル等	1	2	3	4	5
道路や公園の草取り等の清掃	1	2	3	4	5
高齢者・障がい者の介助ボランティア活動	1	2	3	4	5
子育て支援や青少年健全育成等のボランティア活動	1	2	3	4	5
地域の歴史研究、伝統芸能の保存活動	1	2	3	4	5
国際交流活動	1	2	3	4	5
防災活動	1	2	3	4	5
防犯活動・交通安全事業	1	2	3	4	5
自治会・管理組合・コミュニティセンター事業	1	2	3	4	5
市政モニター、住民意見収集のための座談会など	1	2	3	4	5
その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　）					

⇒ 裏面に続きます

表 9-3：実施アンケート内容(3/4)

問６　あなたは現在、問５のような地域活動や行事、ボランティア活動に参加していますか？（１つに○）

① 現在参加している
② 現在参加していないが、これまでに参加したことがある
→ **①②の方は問７－１へ**

③ 参加したことはないが、今後参加してみたい → **③の方は問７－２へ**

④ 参加したいと思わない → **④の方は問８へ**

問６で①、②と回答した方にお聞きします

問７－１　その活動に参加したきっかけをお書きください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問６で③と回答した方にお聞きします

問７－２　これまで参加しなかった（参加しにくかった）理由をお書きください。

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

問８　多摩ニュータウンには以下のようなまちがあります。
この中で、あなたがもっともよく知るまちはどれですか？１つだけに○を付けてください。

多摩市域：聖ヶ丘 ・ 馬引沢 ・ 諏訪 ・ 永山（永山駅付近） ・ 乞田 ・ 貝取 ・ 豊ヶ丘 ・
落合（多摩センター地区） ・ 鶴牧（多摩センター地区西部） ・ 唐木田（唐木田駅付近）・
愛宕 ・ 山王下 ・ 中沢 ・ 南野

八王子市域：堀之内（堀之内駅北側） ・ 別所（堀之内駅南側） ・ 松が谷（松が谷駅周辺） ・
鹿島 ・ 松木（堀之内駅西側） ・ 越野 ・ 南大沢（南大沢駅周辺） ・
下柚木 ・ 上柚木（南大沢駅北側） ・ 鑓水 ・ 中山

稲城市域：向陽台（稲城駅北西） ・ 長峰（向陽台と若葉台の間） ・ 若葉台（若葉台駅北）

町田市域：小山ヶ丘（多摩境駅付近）

そ の 他：（　　　　　　　　　　）

表 9-4: 実施アンケート内容(4/4)

問９　問８でお答えいただいた多摩ニュータウンのまちについて、どのような印象をお持ちですか？
２つの形容詞に例えたときどちらに近いか、それぞれあてはまる箇所に１つだけチェックしてください。

	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	
美しい	□	□	□	□	□	醜い
明るい	□	□	□	□	□	暗い
快適な	□	□	□	□	□	不快な
清潔な	□	□	□	□	□	不潔な
人工的な	□	□	□	□	□	自然な
楽しい	□	□	□	□	□	つまらない
暖かな	□	□	□	□	□	寒々しい
閑静な	□	□	□	□	□	騒々しい
活気のある	□	□	□	□	□	活気のない
安全な	□	□	□	□	□	危険な
近代的な	□	□	□	□	□	伝統的な
新しい	□	□	□	□	□	古い
雰囲気のよい	□	□	□	□	□	殺伐とした
開放的な	□	□	□	□	□	閉鎖的な

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました！

図 9-1: アンケート回答者属性

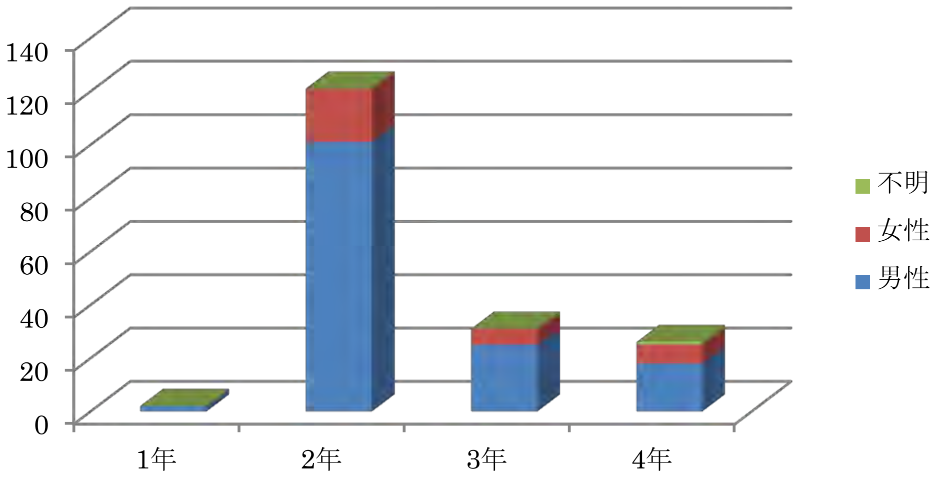


図 9-2: 回答者の住居形態

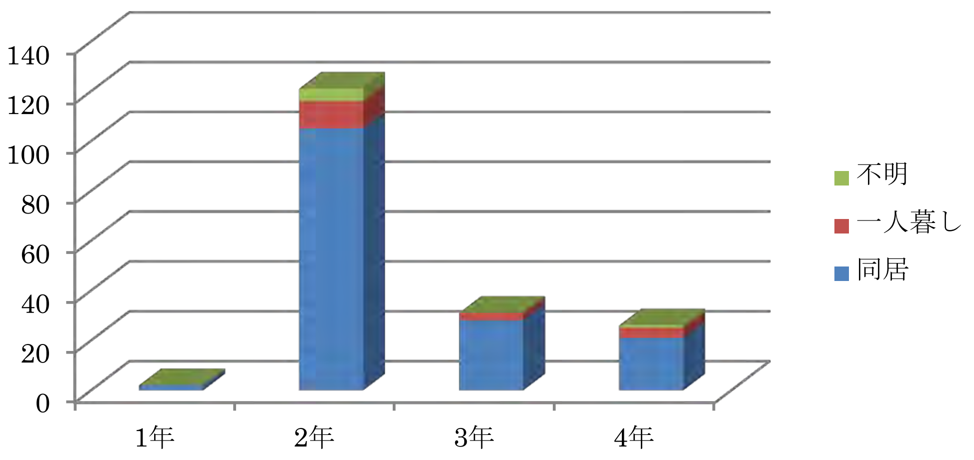


図 9-3: 回答者の居住地分布

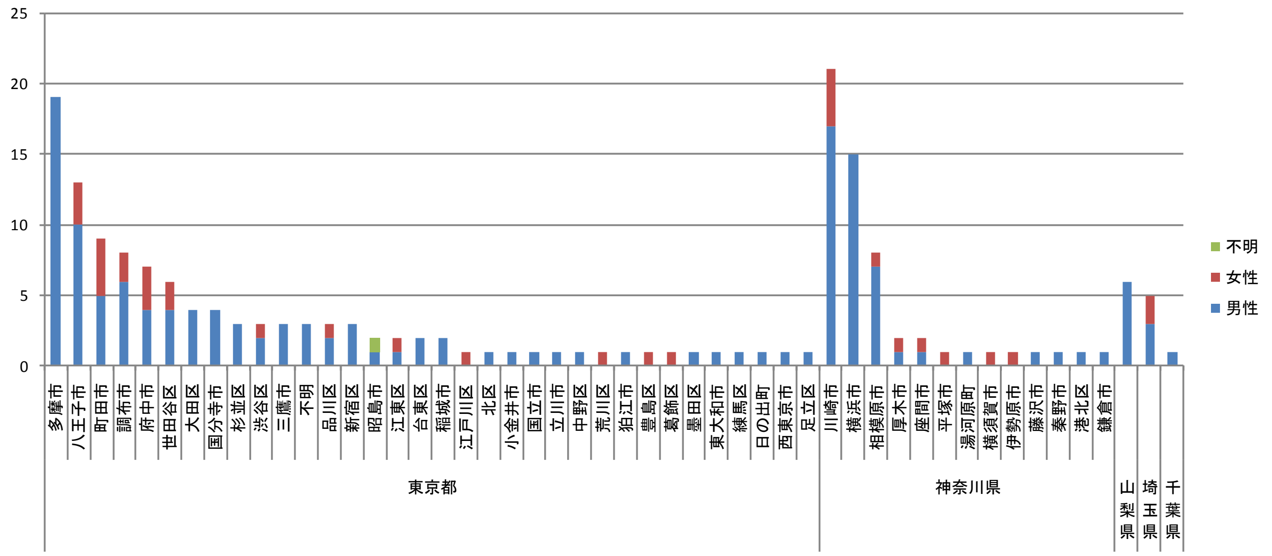


図 9-4: 住居形態による分布

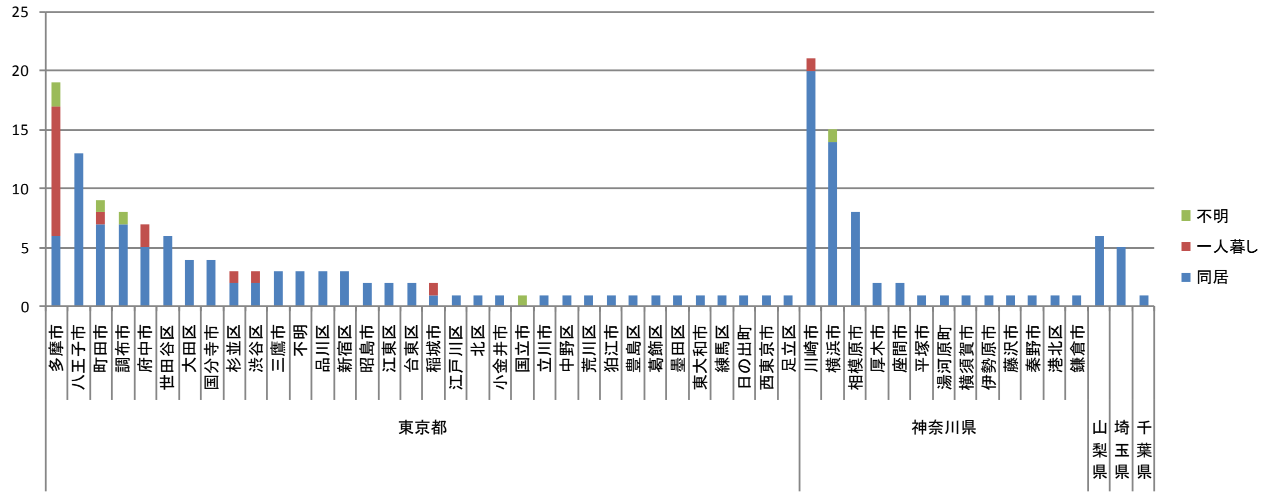


図 9-5: 性別と住み良さ回答の相関関係

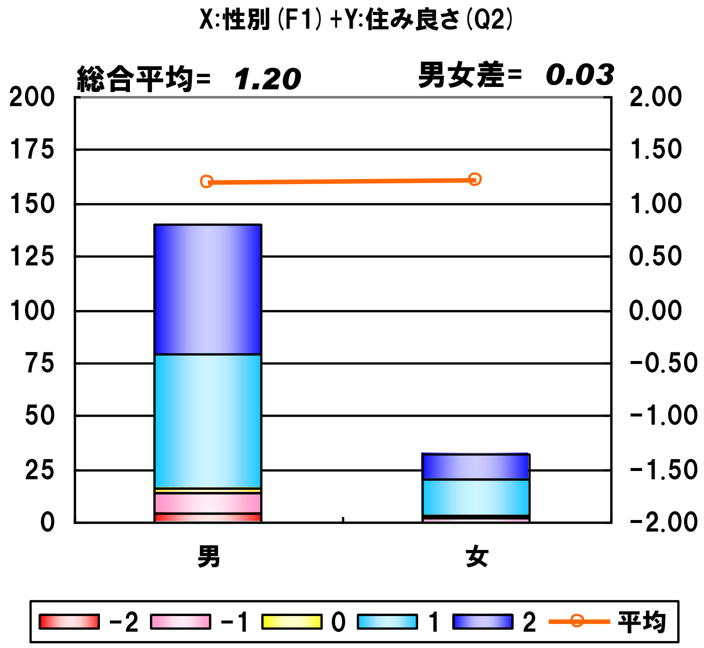


図 9-6: 性別と住み続けたさ回答の相関関係

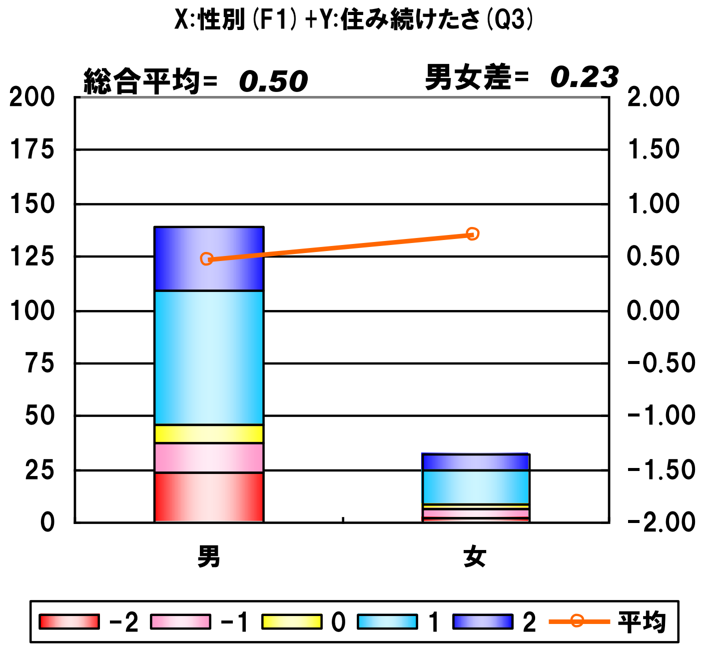


図 9-7: 住居形態と住み良さ回答の相関関係

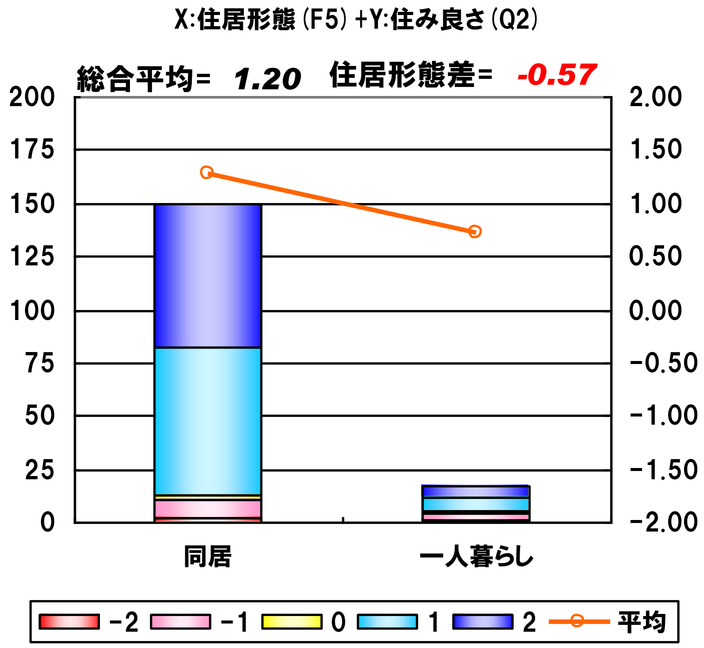


図 9-8: 住居形態と住み続けたさ回答の相関関係

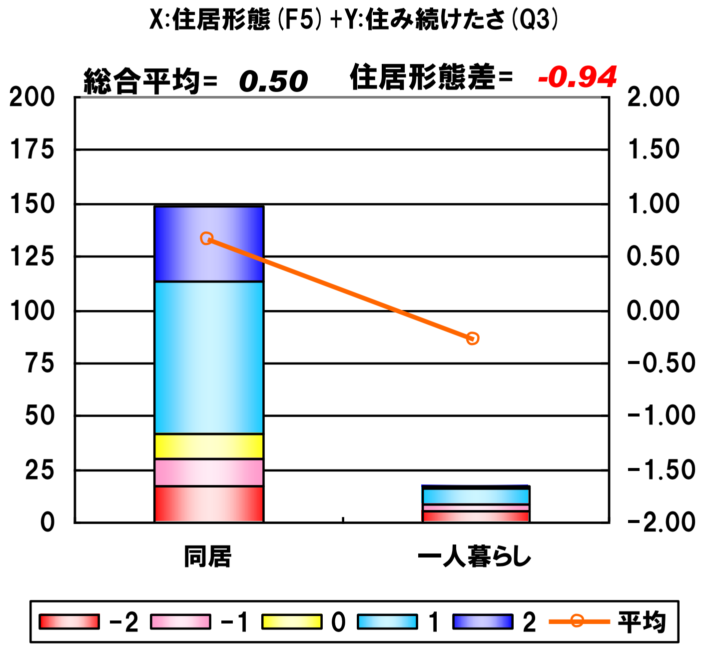


図 9-9: 住み良さと住み続けたさ回答の相関関係

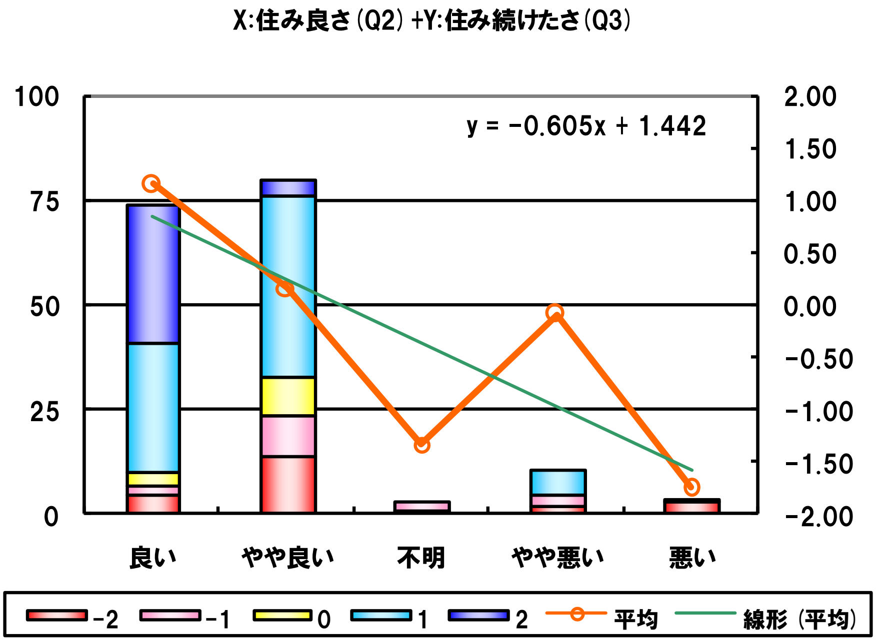


図 9-10: 住み続けたさと住み良さ回答の相関関係

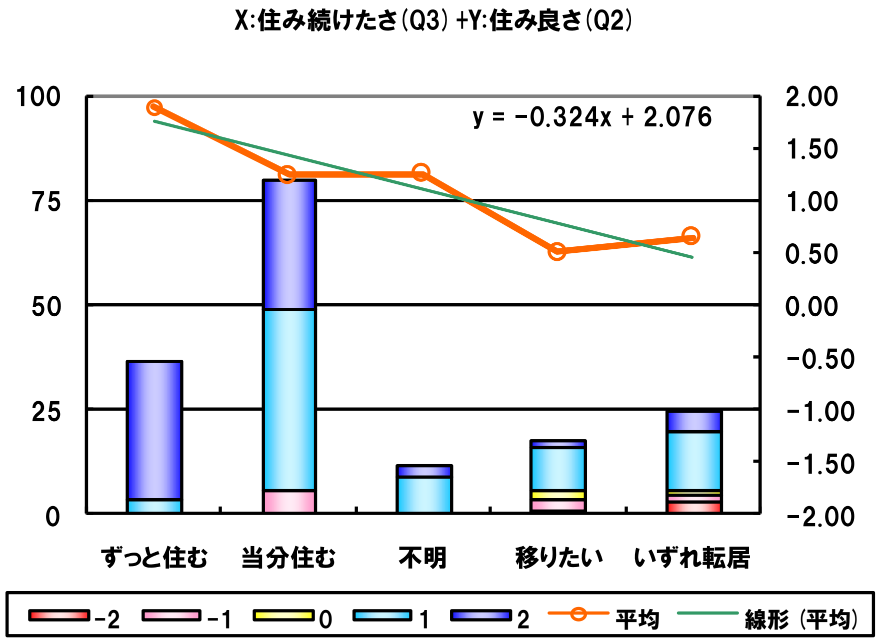


図 9-11：住み良さと生活環境満足度との相関関係

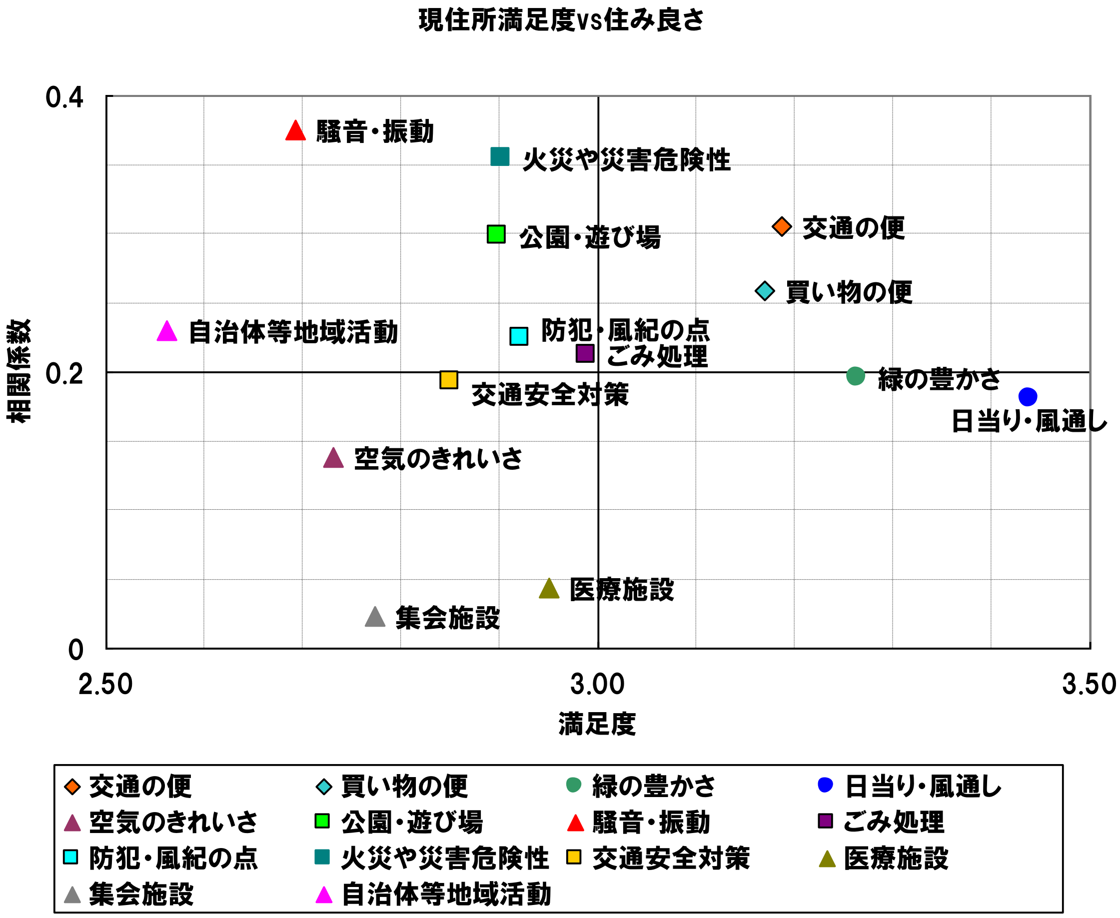


図 9-12：住み良さと交通の便満足度との相関関係

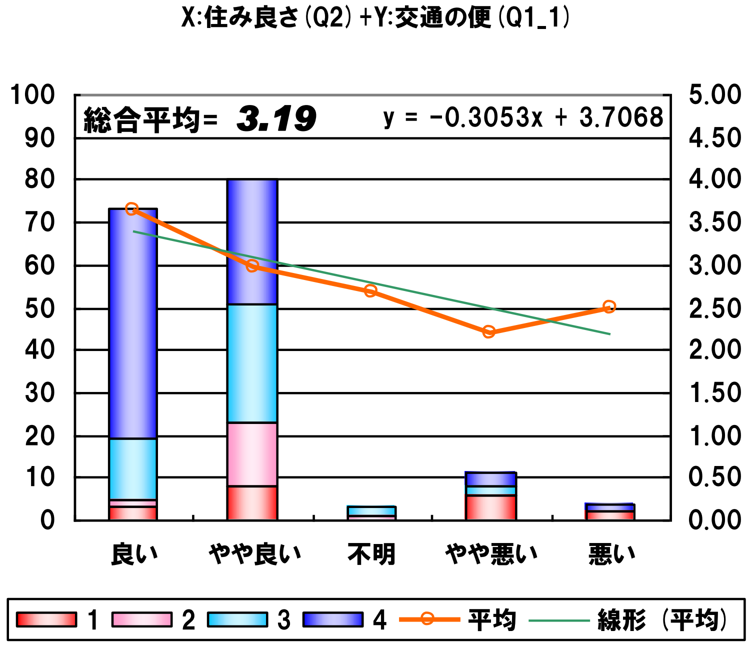


図 9-13: 住み良さと買い物の便満足度との相関関係

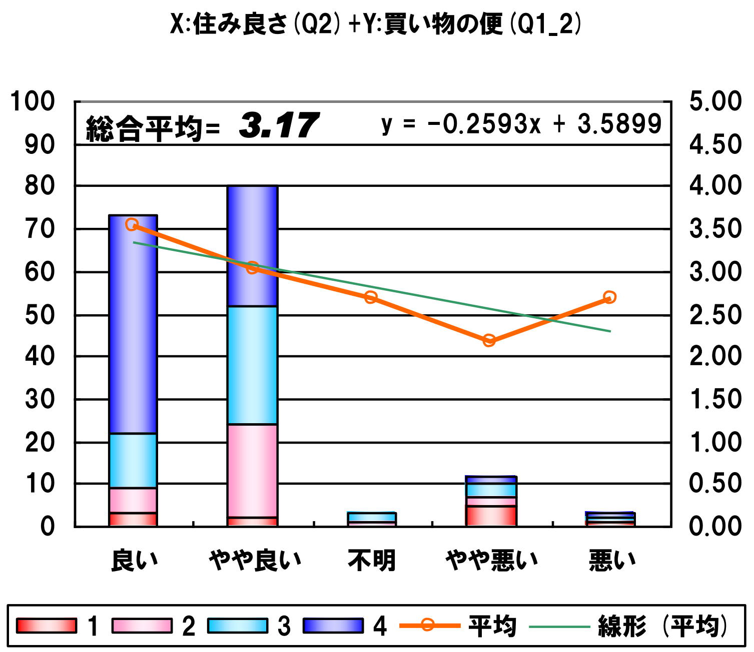


図 9-14: 住み良さと緑の豊かさ満足度との相関関係

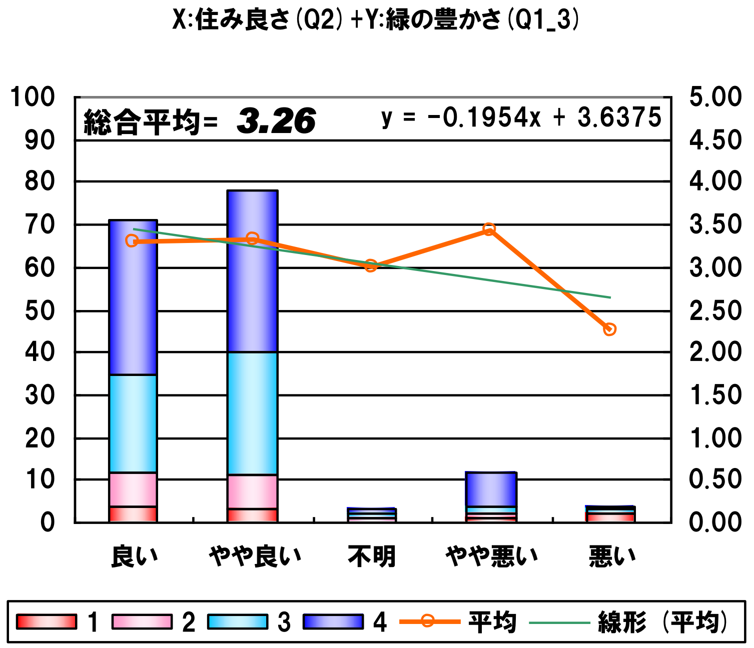


図 9-15: 住み良さと日当り・風通し満足度との相関関係

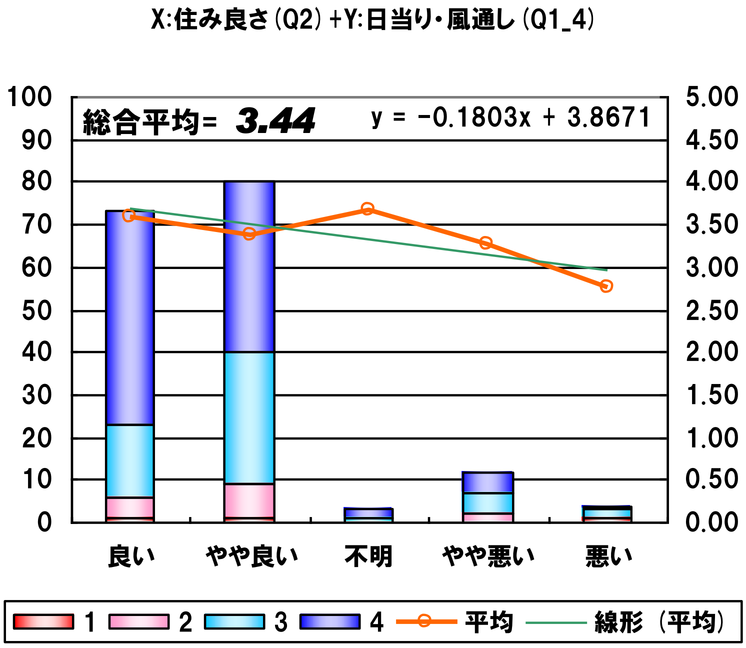


図 9-16住み良さと空気のきれいさ満足度との相関関係

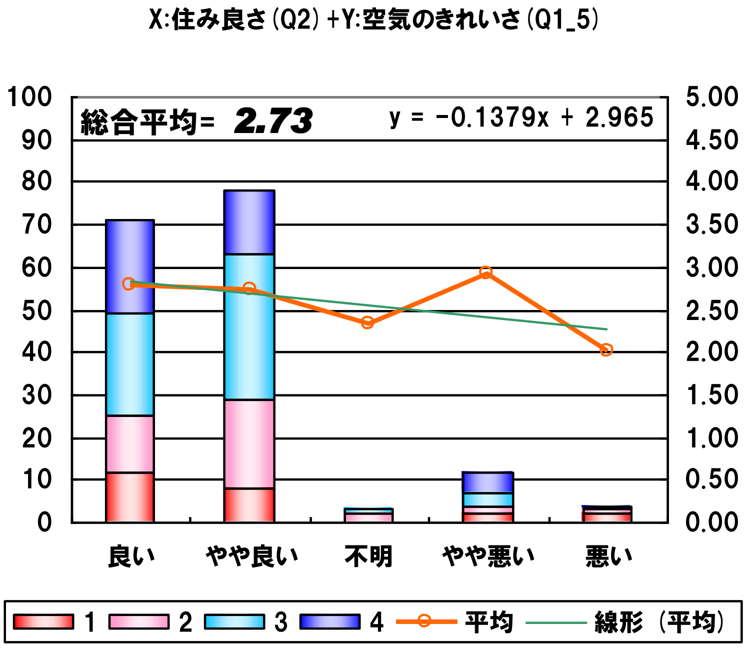


図 9-17: 住み良さと公園・遊び場満足度との相関関係

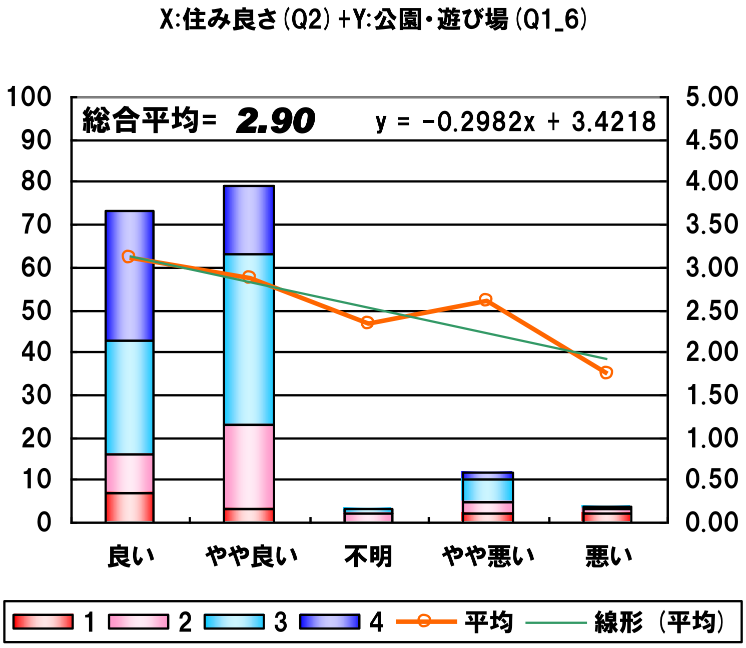


図 9-18: 住み良さと騒音・振動満足度との相関関係

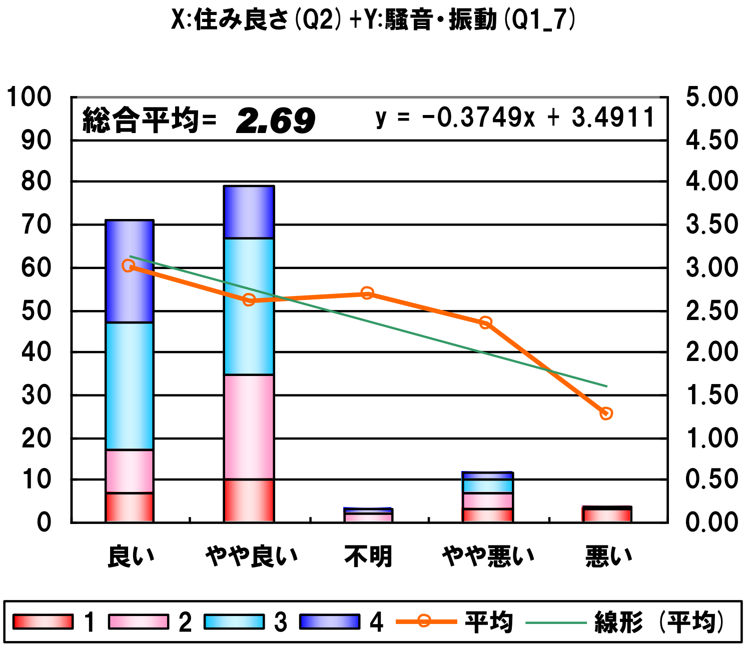


図 9-19: 住み良さとごみ処理満足度との相関関係

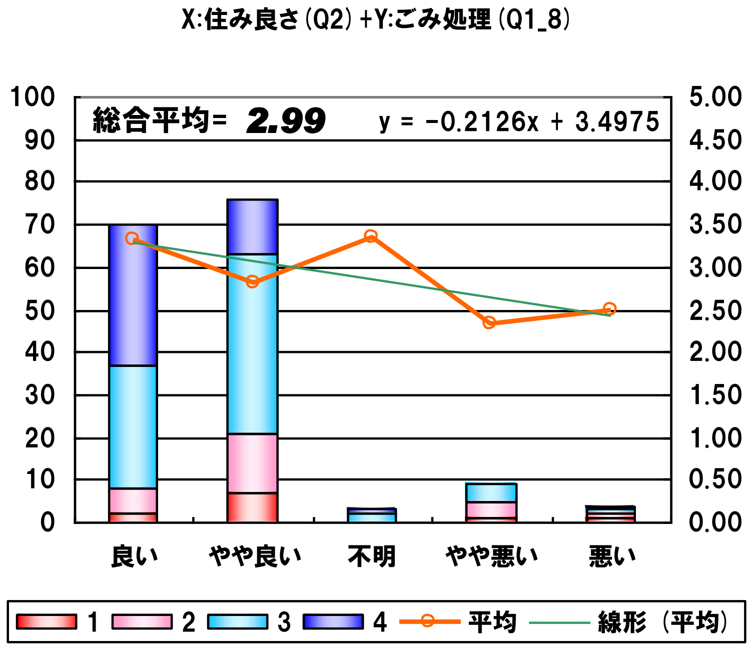


図 9-20: 住み良さと防犯・風紀満足度との相関関係

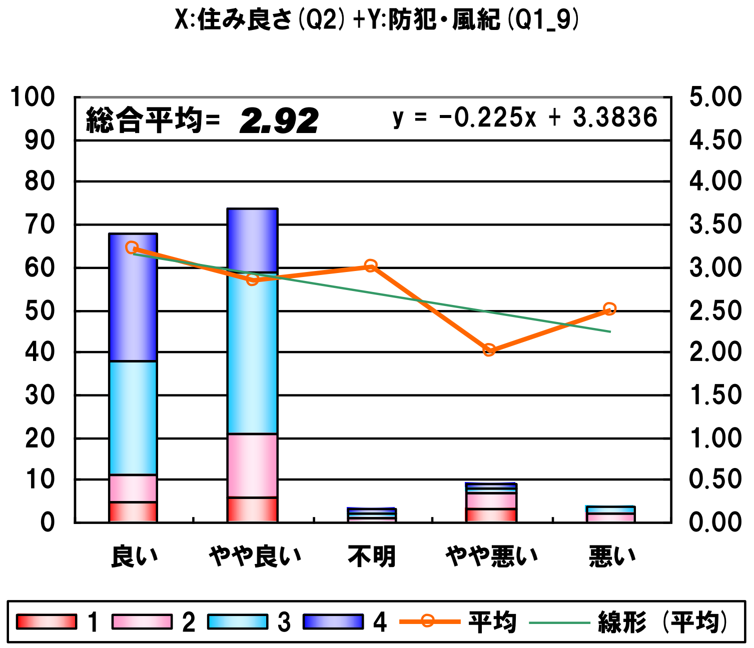


図 9-21: 住み良さと災害危険性満足度との相関関係

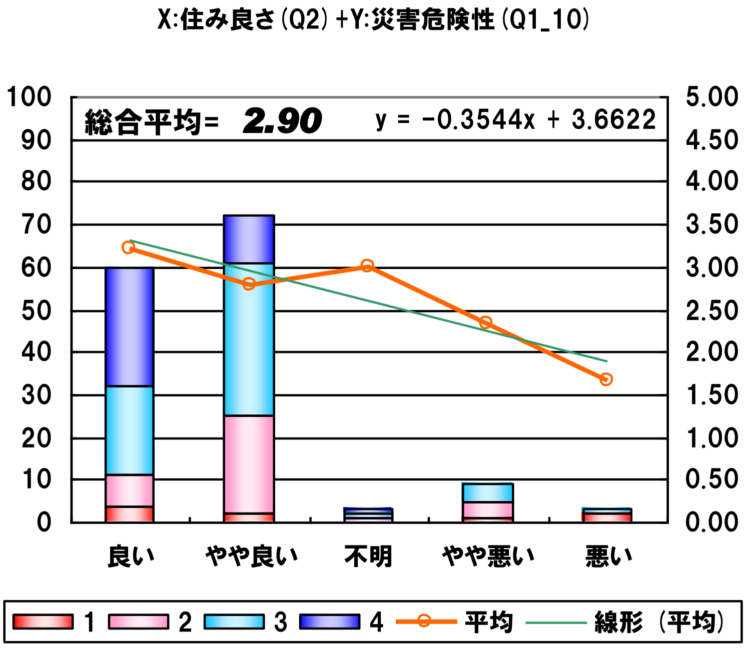


図 9-22: 住み良さと交通安全対策満足度との相関関係

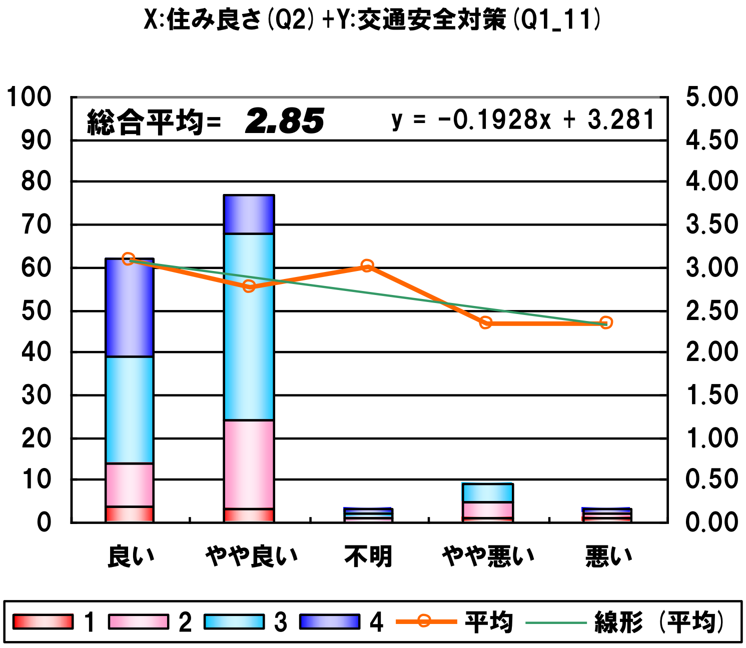


図 9-23: 住み良さと医療施設満足度との相関関係

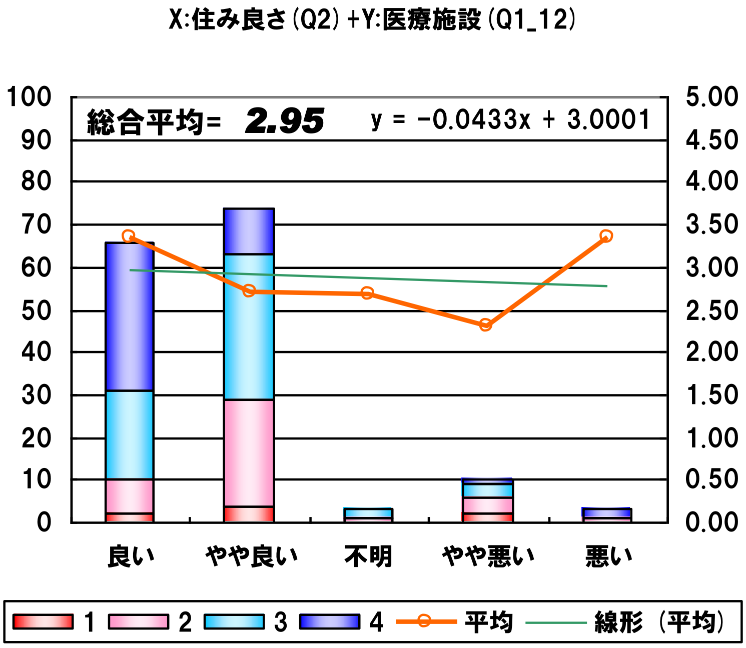


図 9-24: 住み良さと集会施設満足度との相関関係

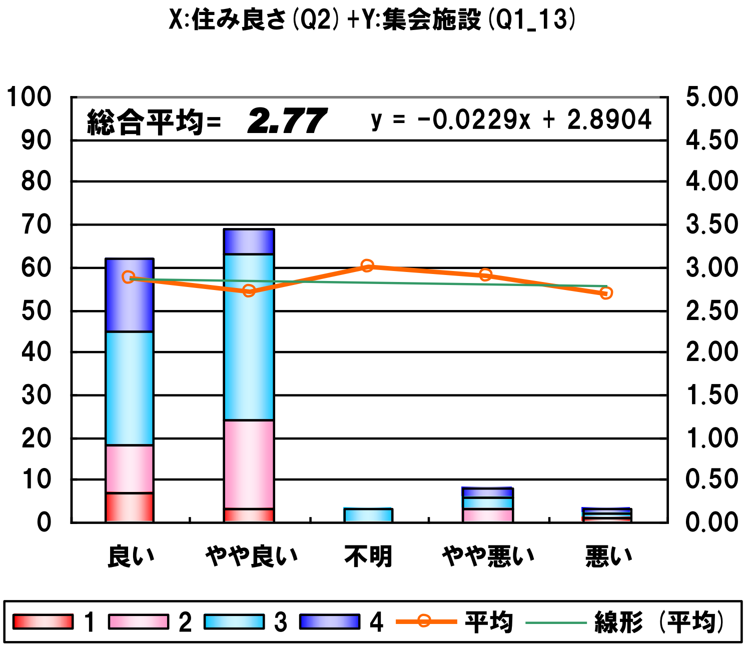


図 9-25: 住み良さと地域活動満足度との相関関係

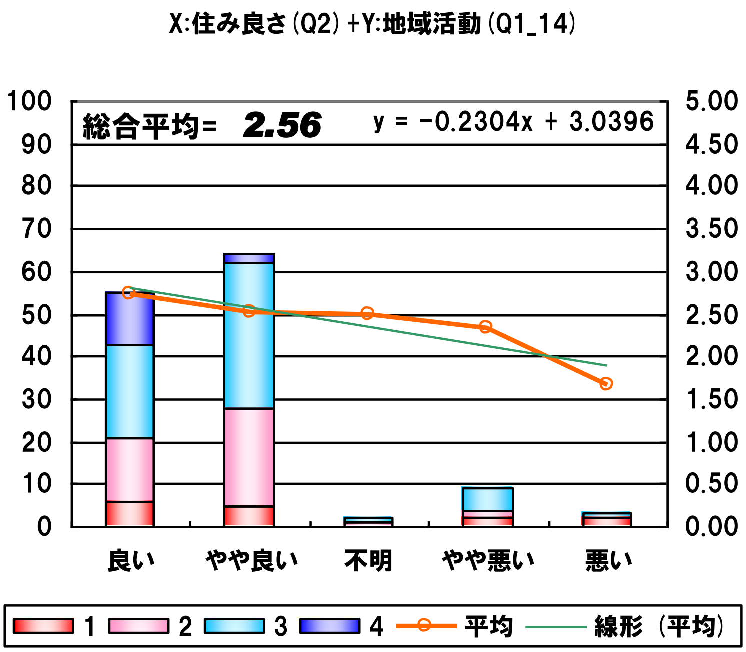


図 9-26: 住み続けたさと生活環境満足度との相関関係

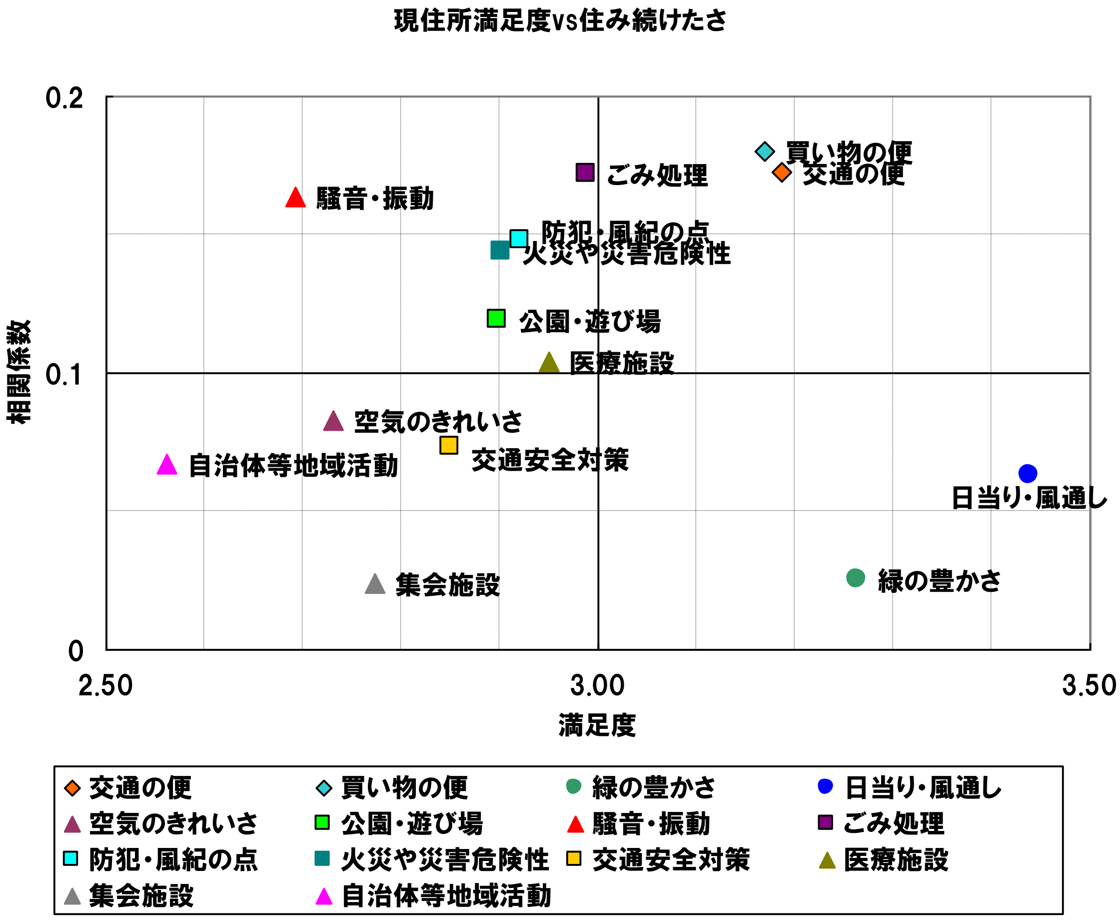


図 9-27: 住み続けたさと交通の便満足度との相関関係

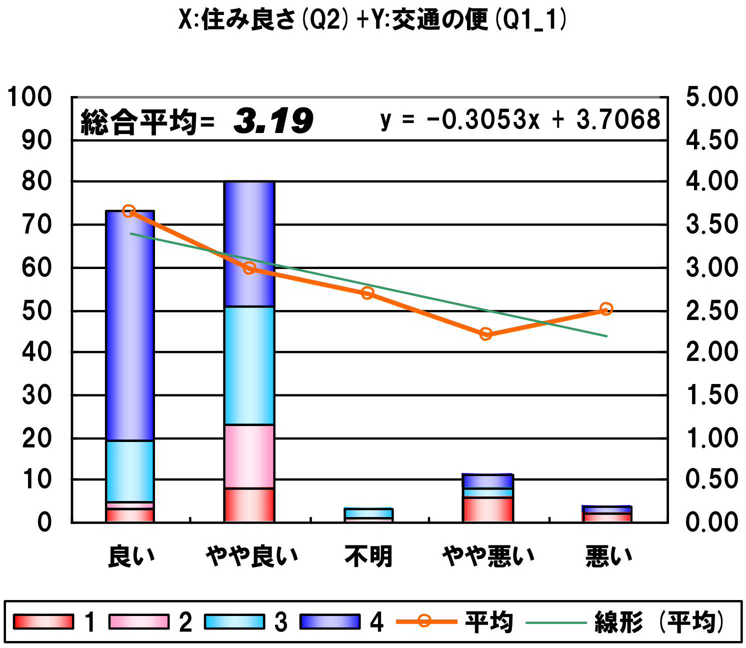


図 9-28: 住み続けたさと買い物の便満足度との相関関係

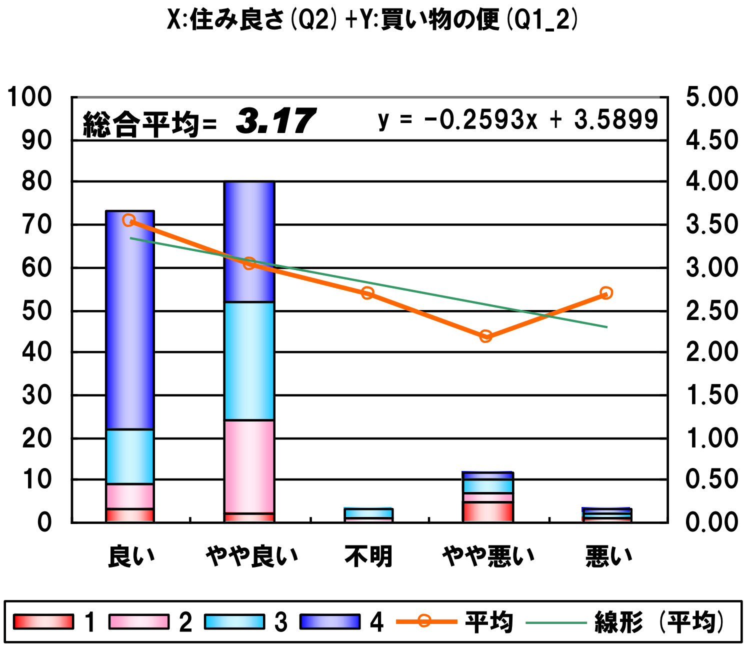


図 9-29: 住み続けたさと緑の豊かさ満足度との相関関係

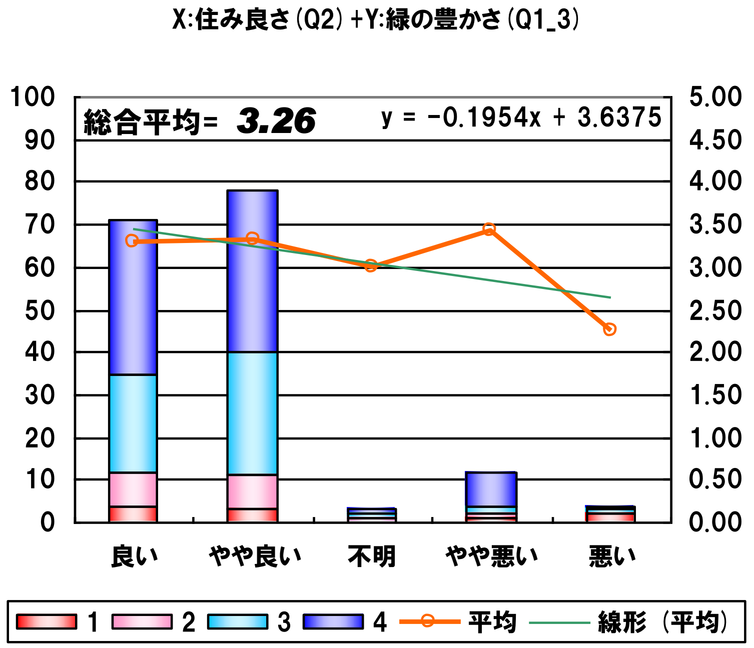


図 9-30: 住み続けたさと日当り・風通し満足度との相関関係

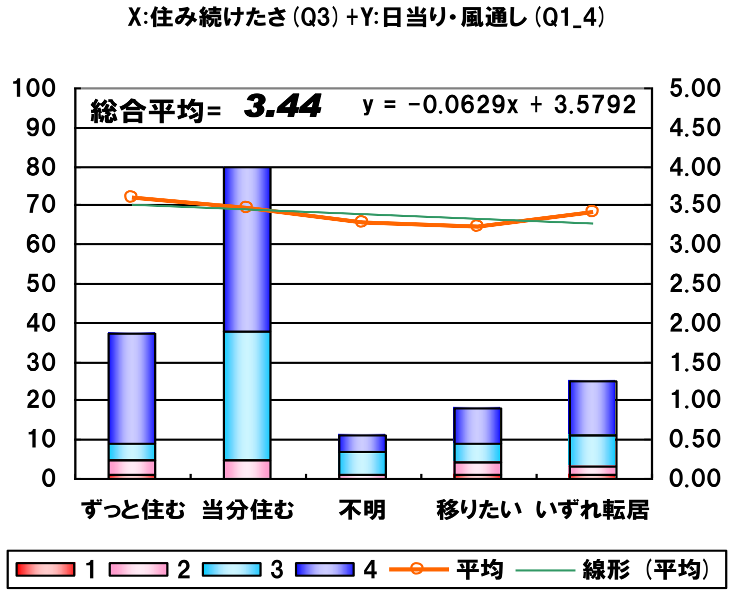


図 9-31： 住み続けたさと空気のきれいさ満足度との相関関係

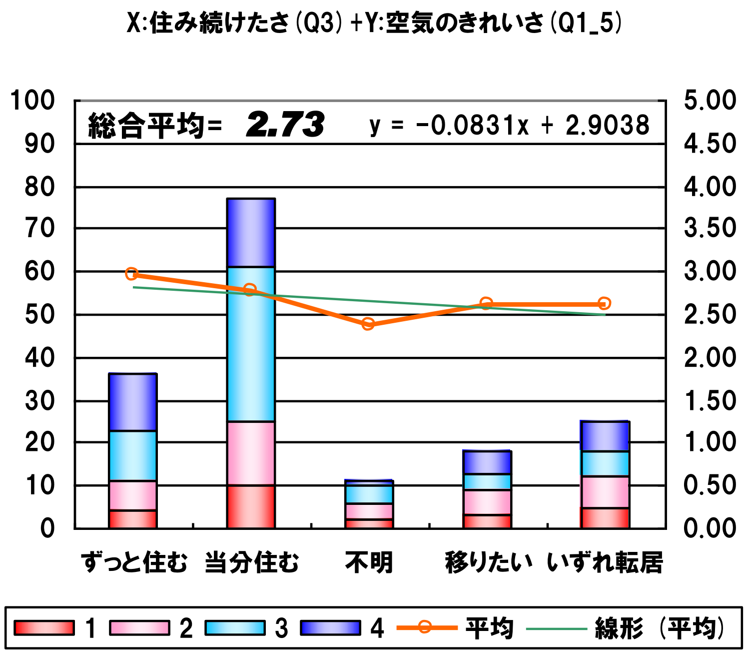


図 9-32： 住み続けたさと公園・遊び場満足度との相関関係

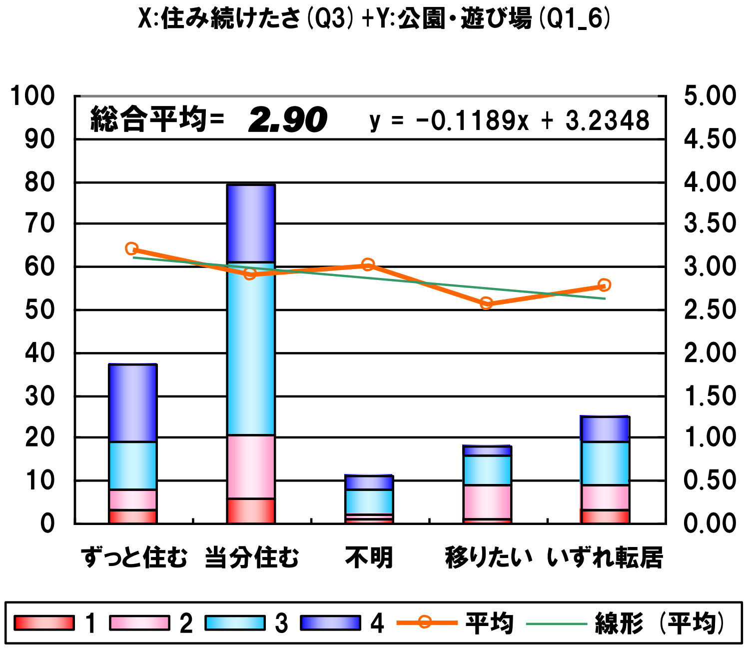


図 9-33: 住み続けたさと騒音・振動満足度との相関関係

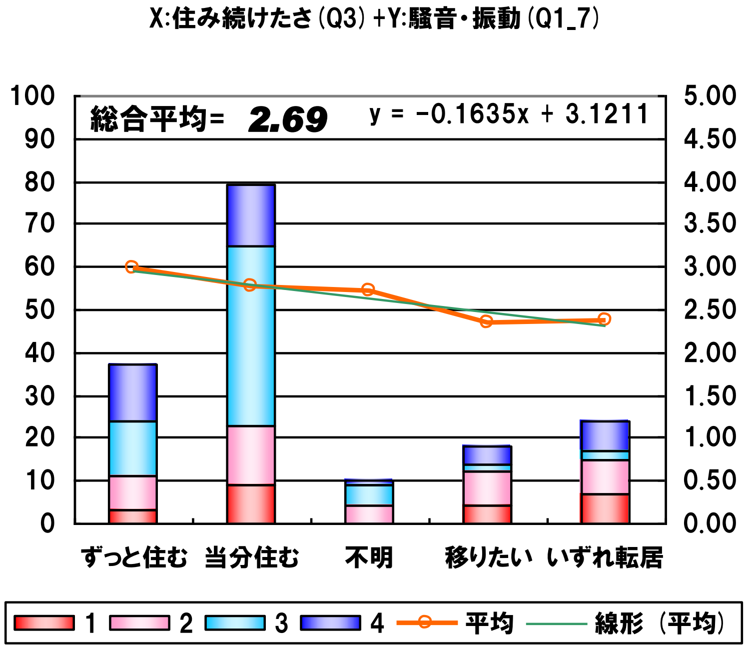


図 9-34: 住み続けたさとごみ処理満足度との相関関係

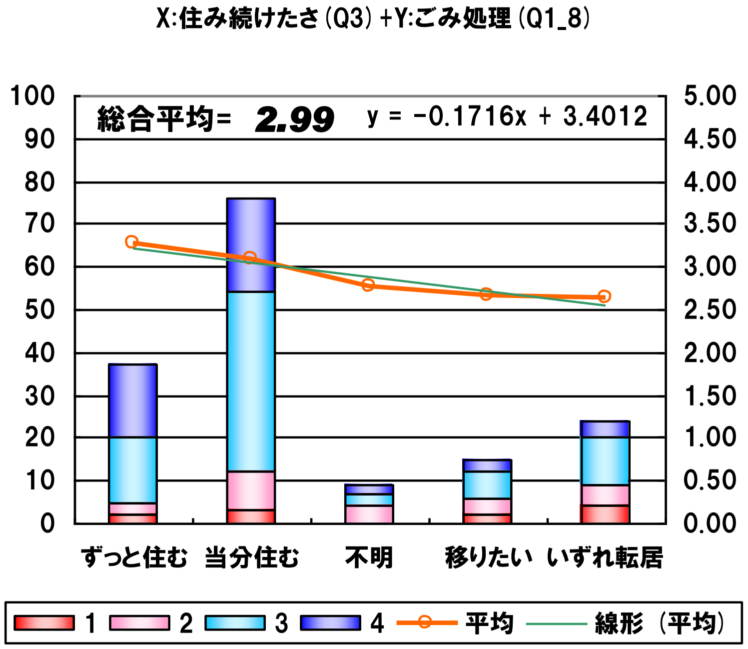


図 9-35: 住み続けたさと防犯・風紀満足度との相関関係

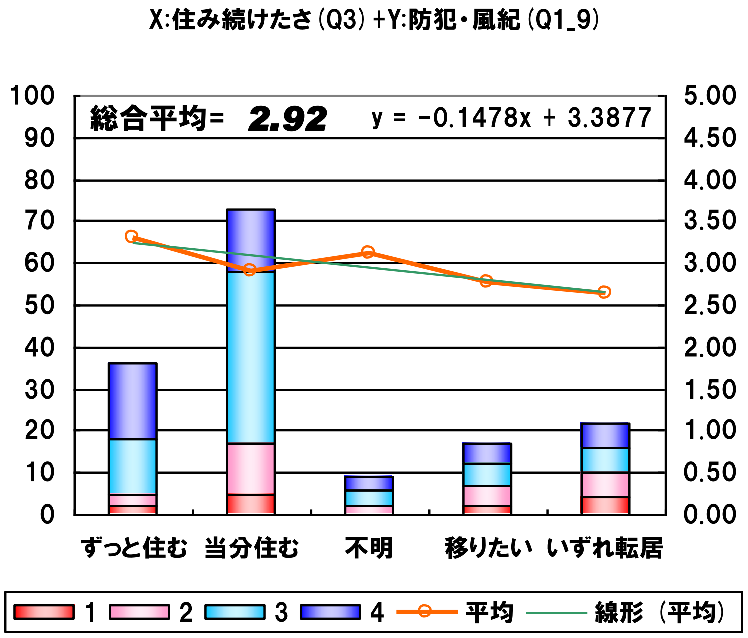


図 9-36: 住み続けたさと災害危機性満足度との相関関係

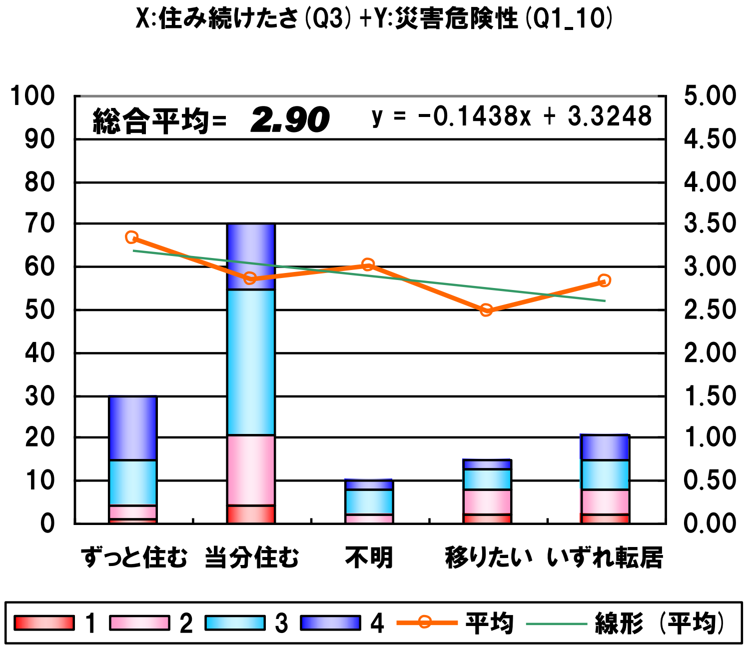


図 9-37: 住み続けたさと交通安全対策満足度との相関関係

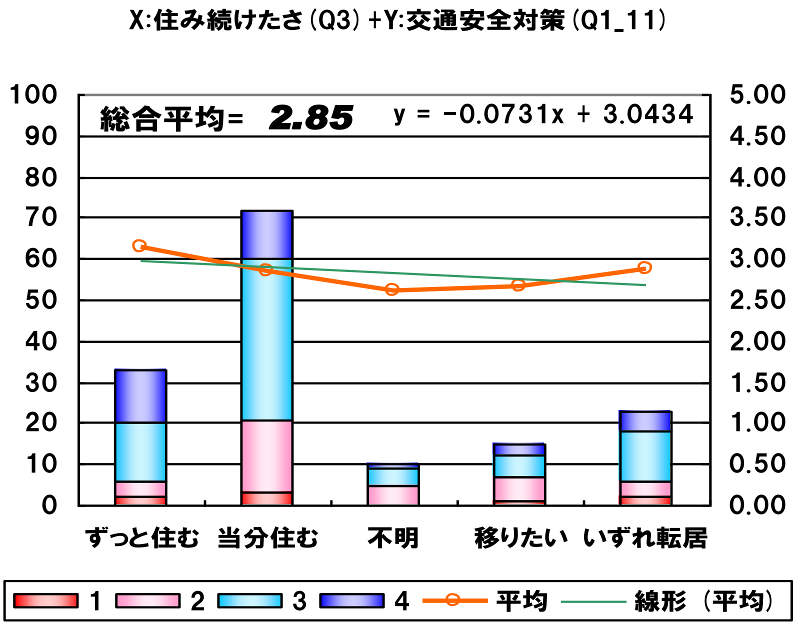


図 9-38: 住み続けたさと医療施設満足度との相関関係

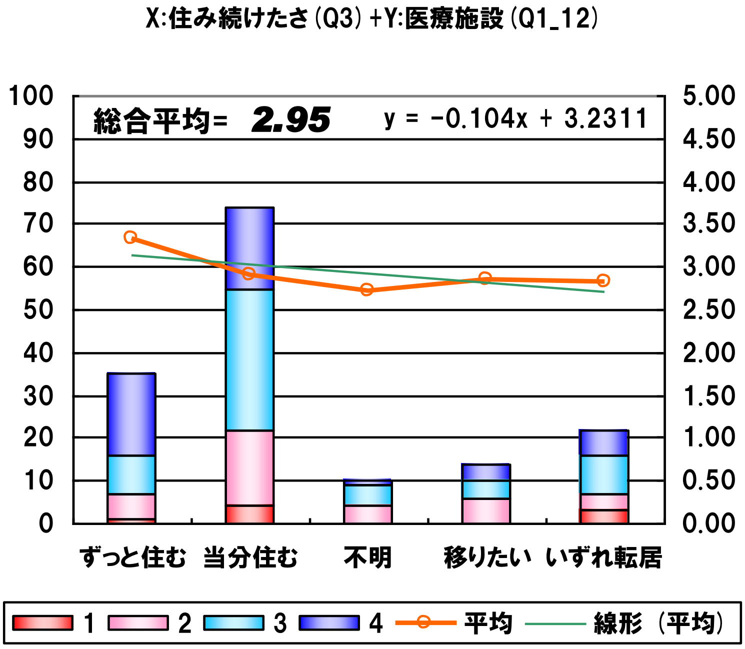


図 9-39: 住み続けたさと集会施設満足度との相関関係

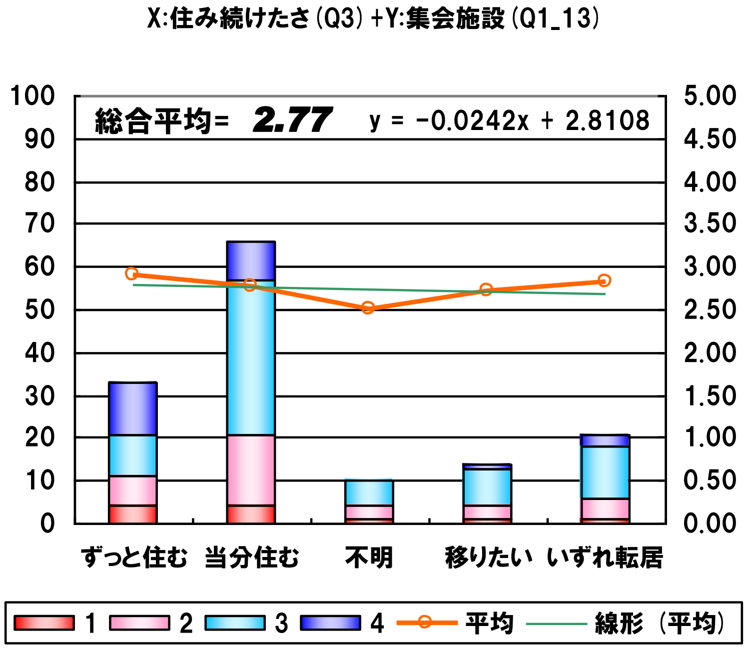


図 9-40: 住み続けたさと地域活動満足度との相関関係

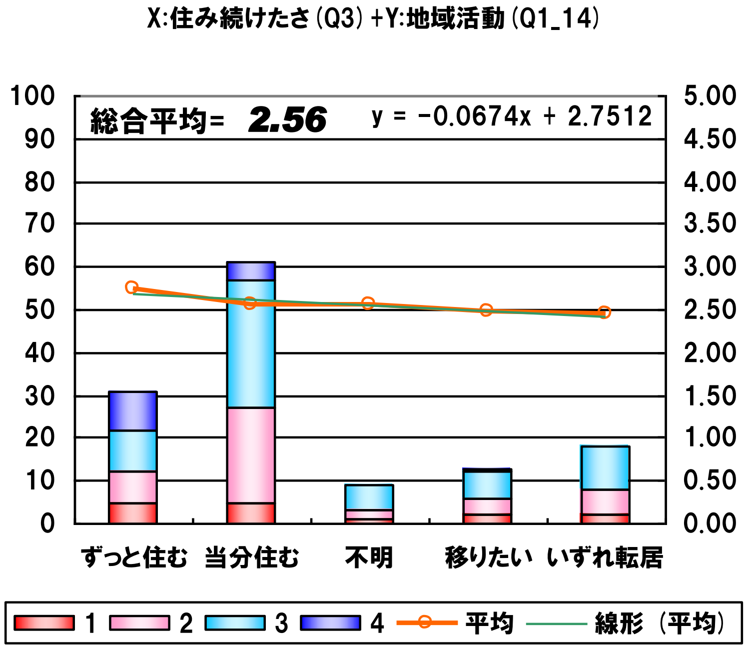


図 9-41: 性別と住まいの考え方との相関関係

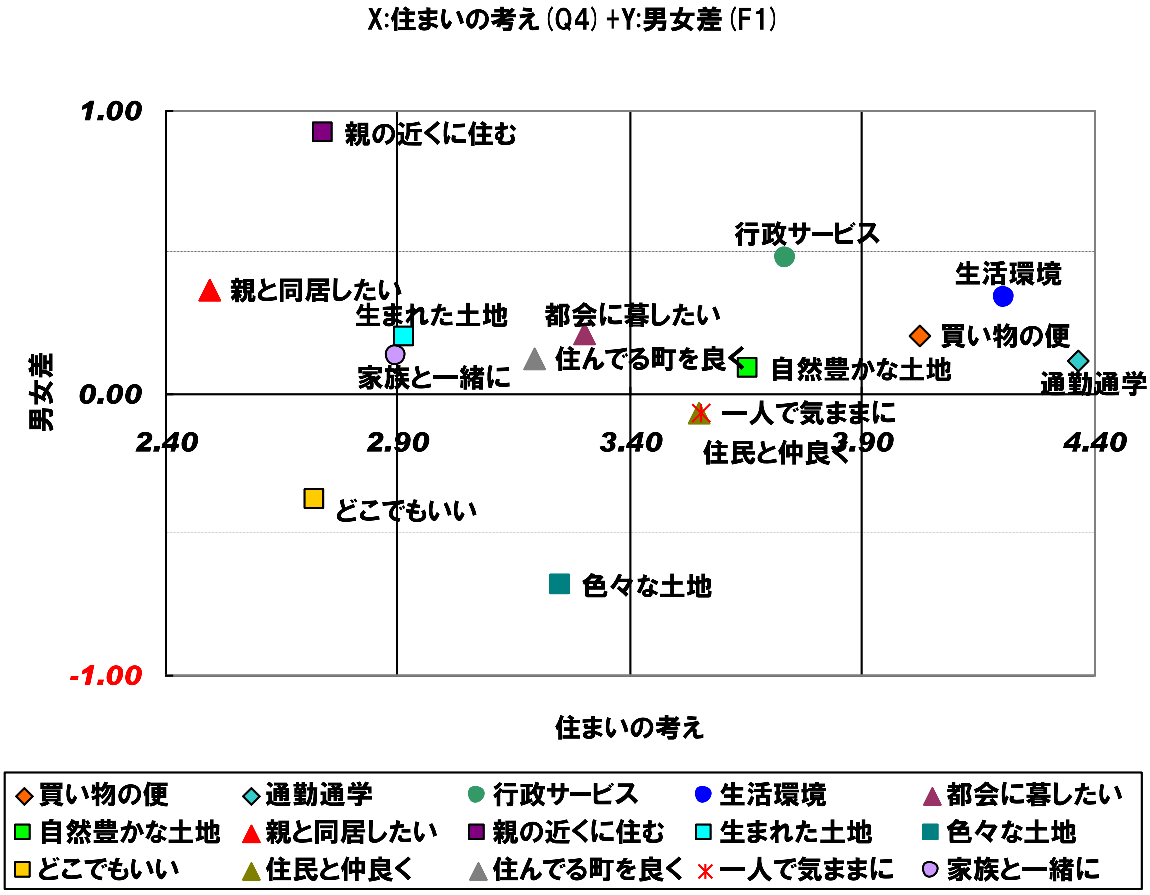


図 9-42: 性別と買い物の便の重要度の相関関係

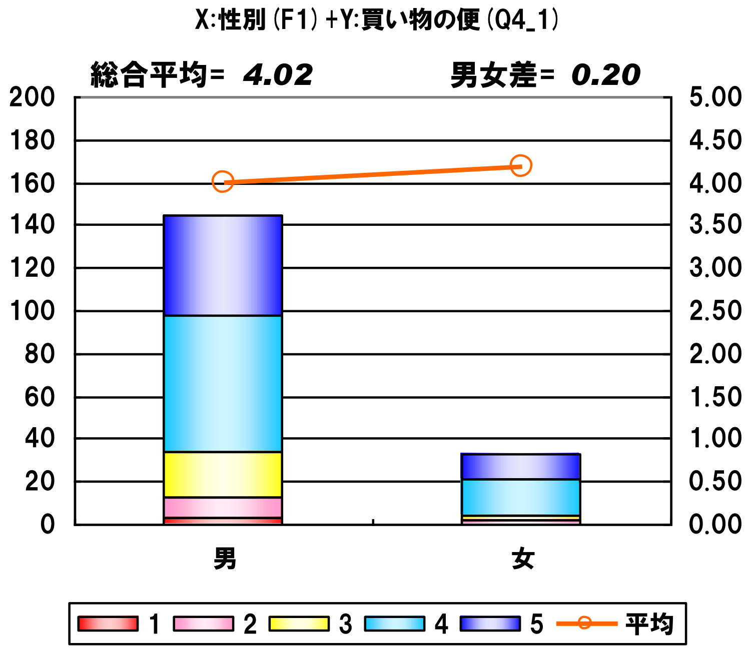


図 9-43: 性別と通勤通学の重要度の相関関係

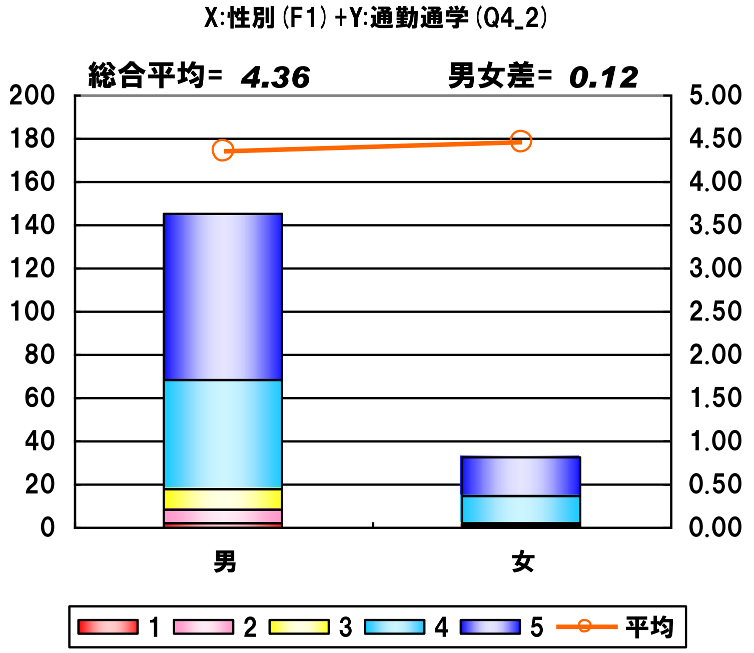


図 9-44: 性別と行政サービスの重要度の相関関係

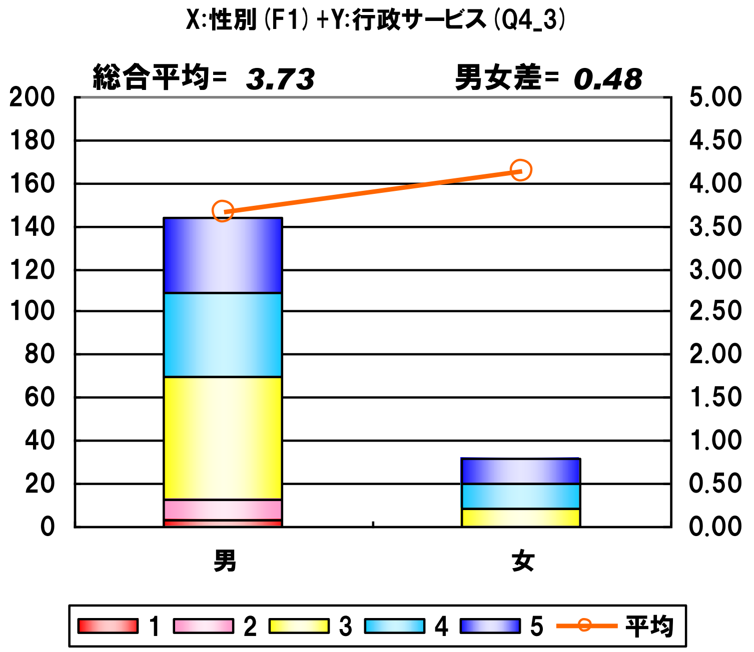


図 9-45: 性別と生活環境の重要度の相関関係

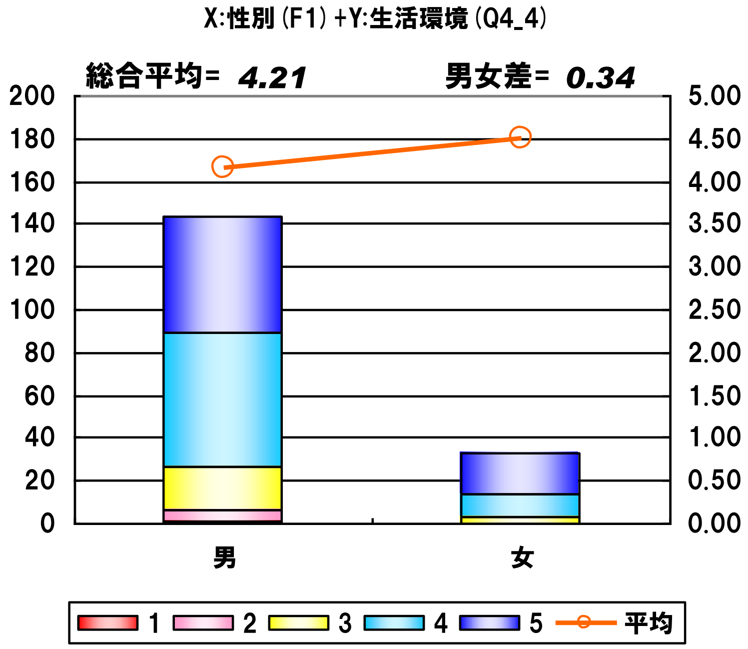


図 9-46: 性別と都会に暮らす重要度の相関関係

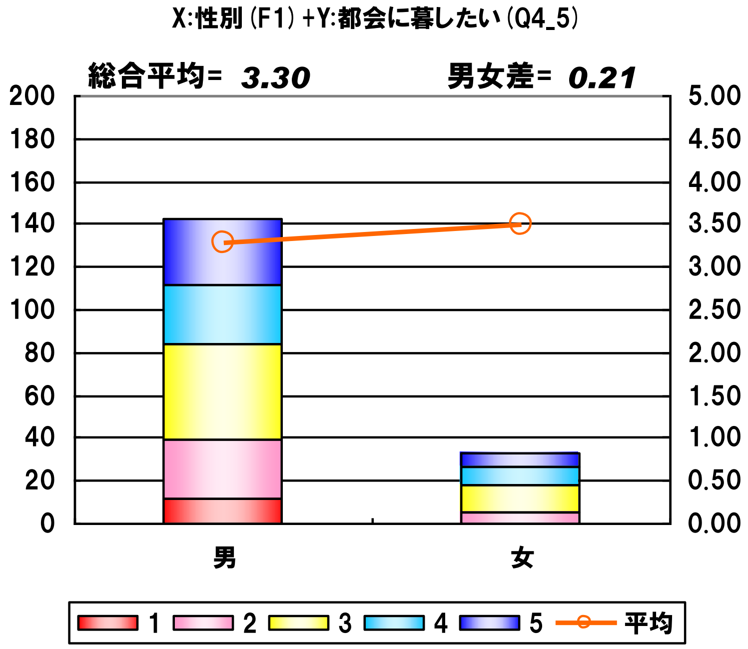


図 9-47: 性別と自然の豊かさ重要度の相関関係

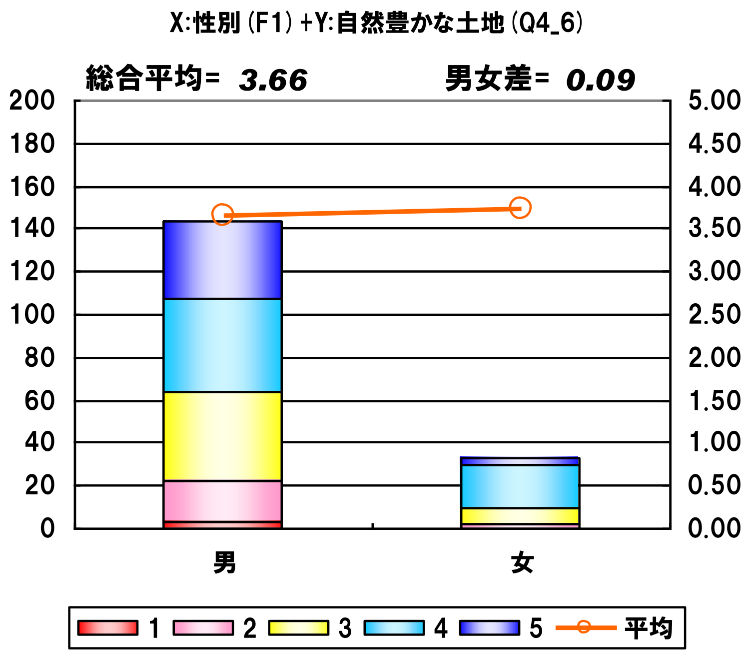


図 9-48: 性別と親と同居重要度の相関関係

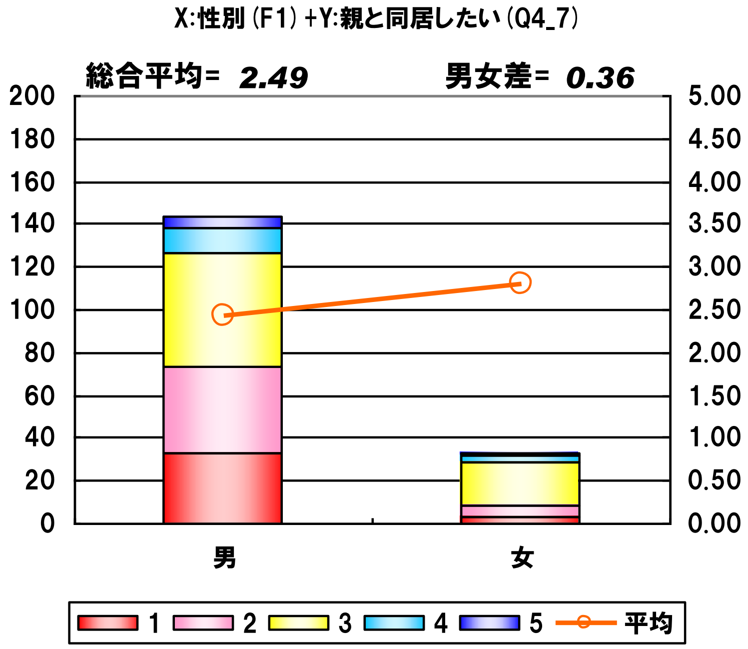


図 9-49: 性別と親の近くに住む重要度の相関関係

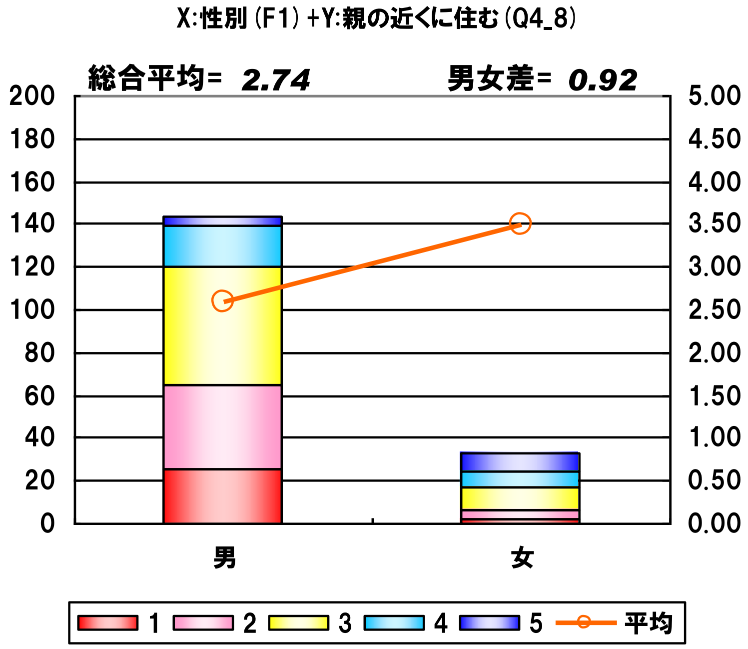


図 9-50: 性別と生れた土地に住む重要度の相関関係

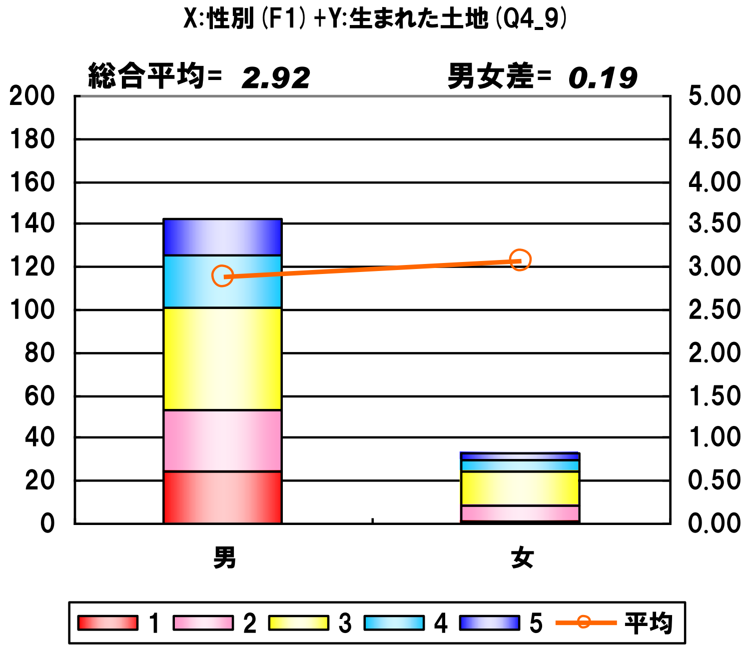


図 9-51： 性別と色々な土地に住む重要度の相関関係

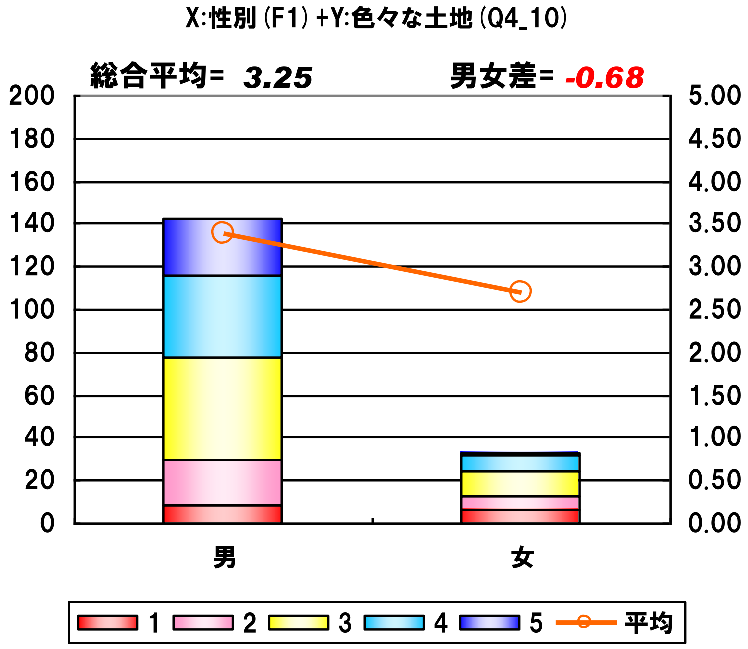


図 9-52： 性別とどこに住んでもいい事の相関関係

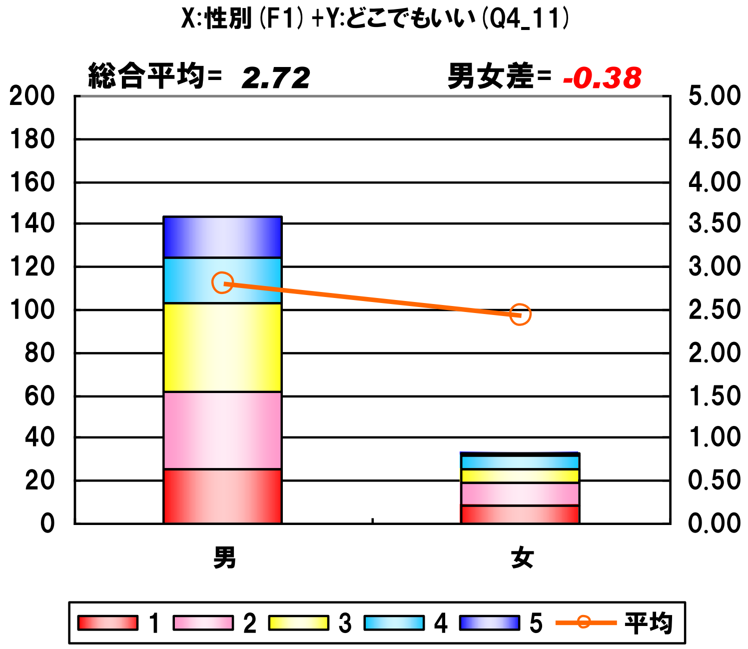


図 9-53: 性別と住民と仲良くする重要性の相関関係

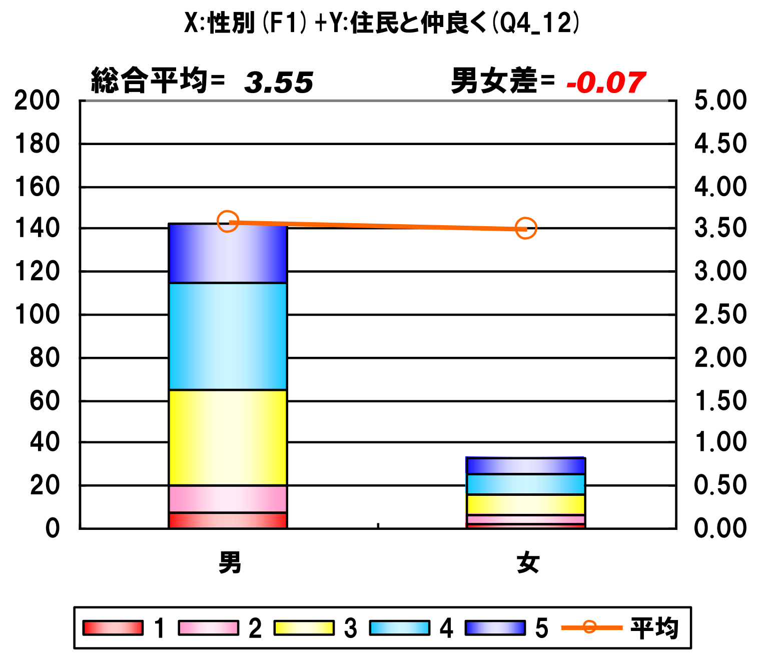


図 9-54: 性別と住んでる町を良くする重要性の相関関係

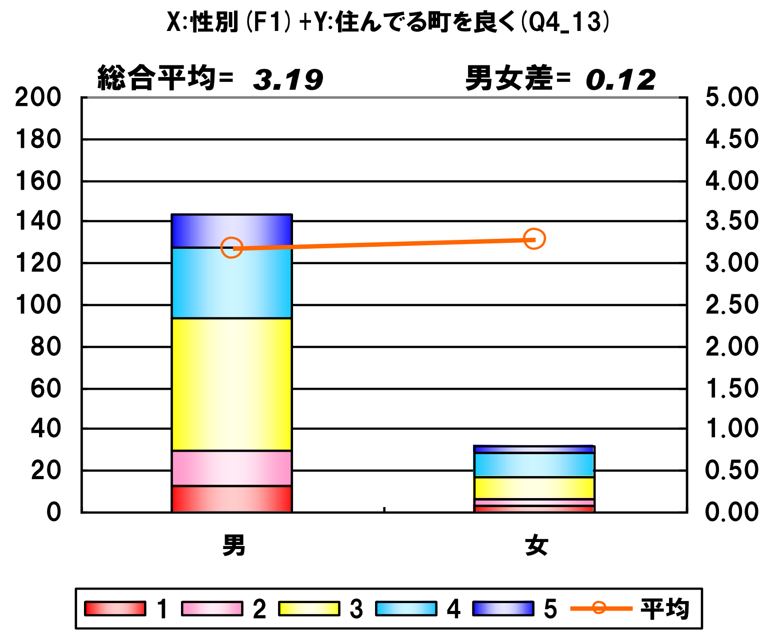


図 9-55：性別と一人で気ままにする重要性の相関関係

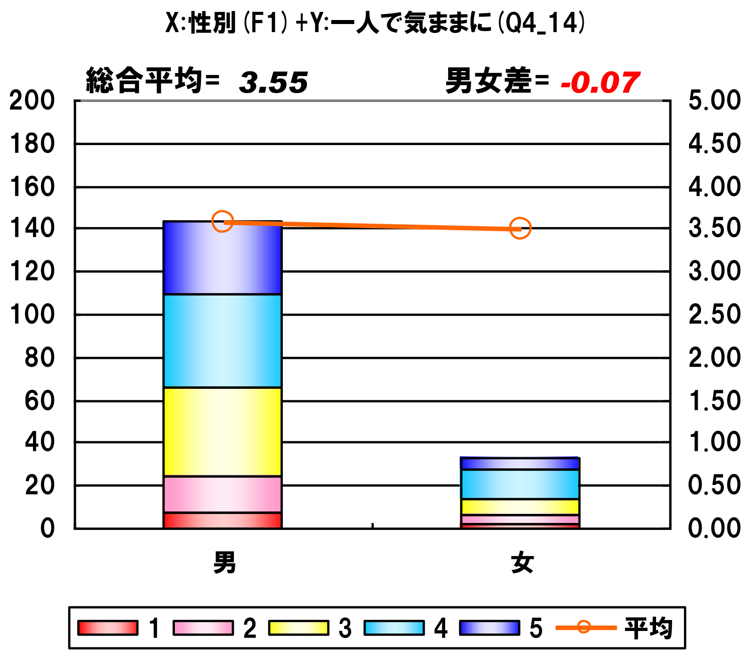


図 9-56：性別と家族と一緒にいる重要性の相関関係

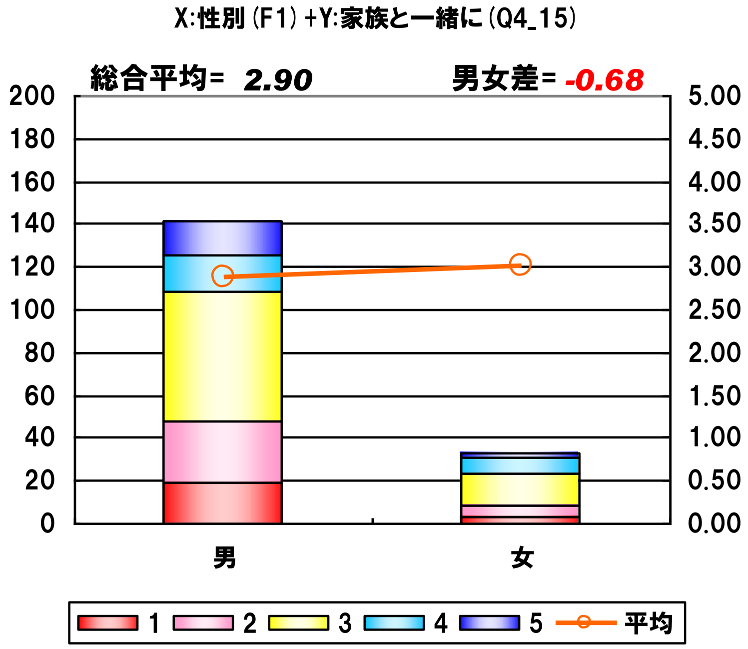


図 9-57: 住居形態と住まいの考え方との相関関係

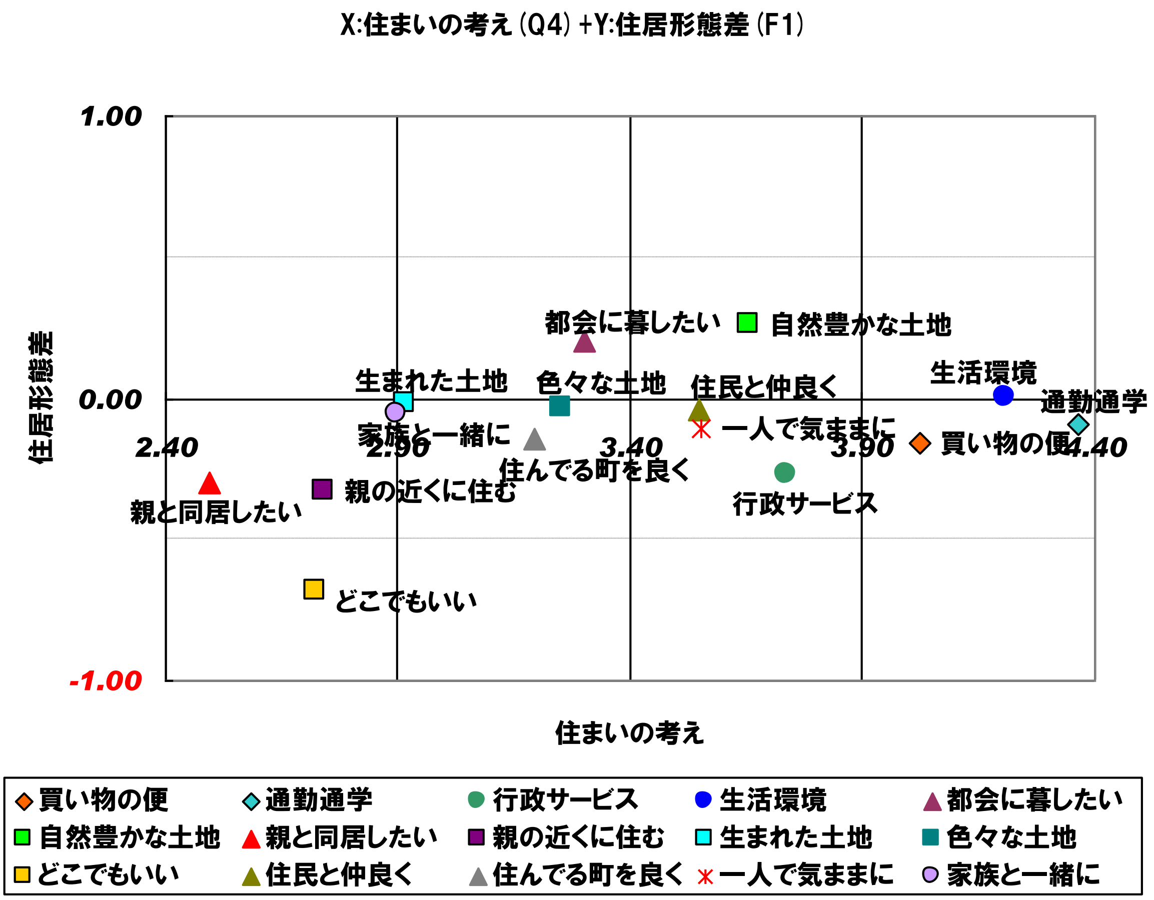


図 9-58: 住居形態と買い物の便の重要性の相関関係

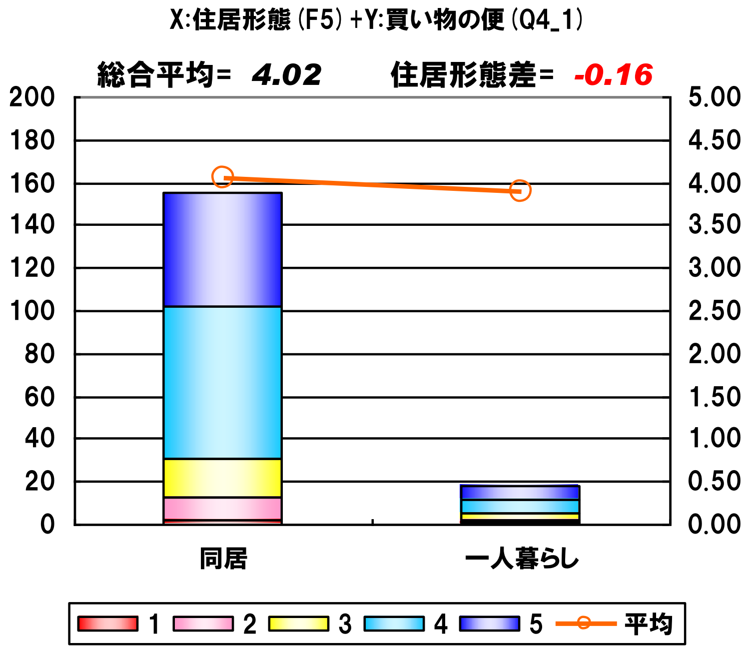


図 9-59: 住居形態と通勤通学の重要性の相関関係

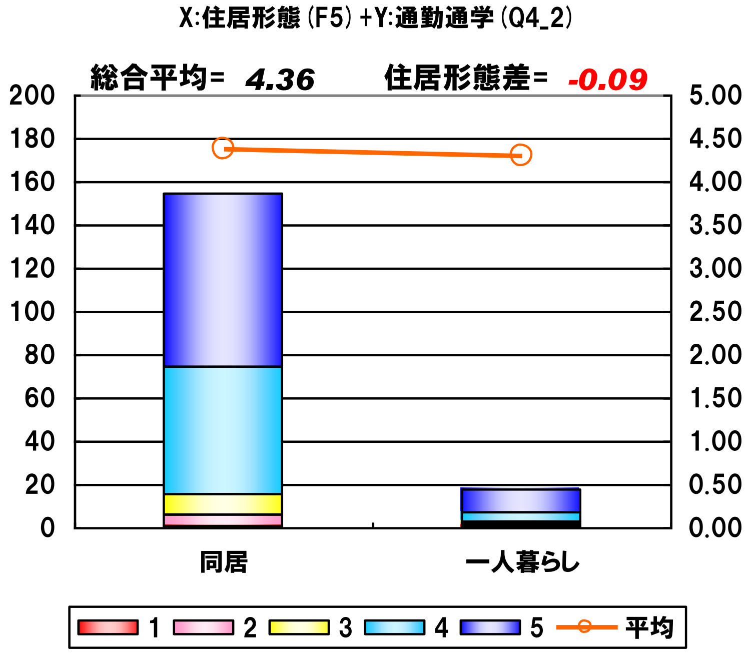


図 9-60: 住居形態と行政サービスの重要性の相関関係

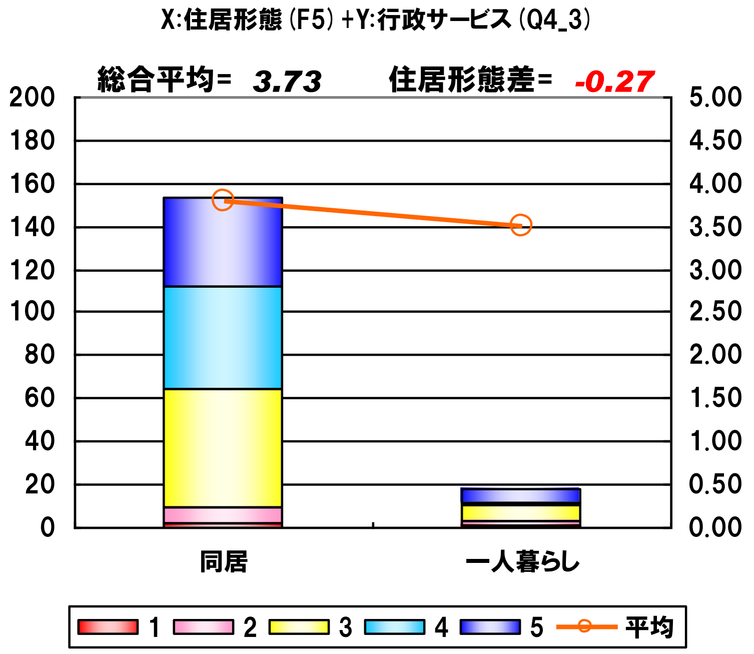


図 9-61： 住居形態と生活環境の重要性の相関関係

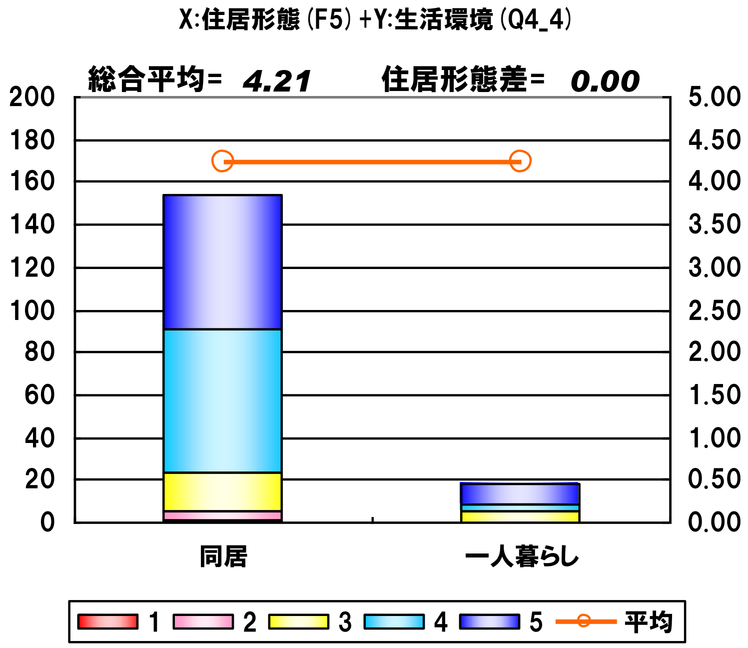


図 9-62： 住居形態と都会に暮らしたい重要性の相関関係

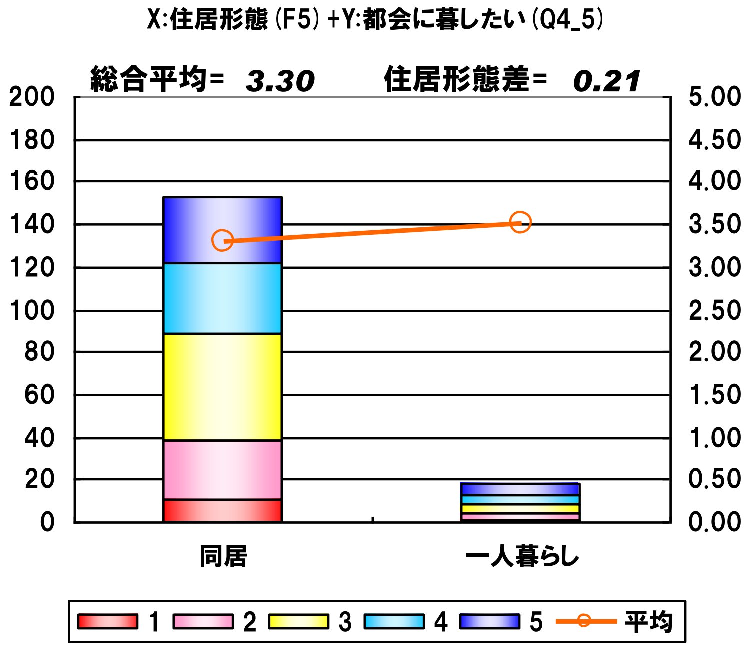


図 9-63: 住居形態と自然豊かな土地に住む重要性の相関関係

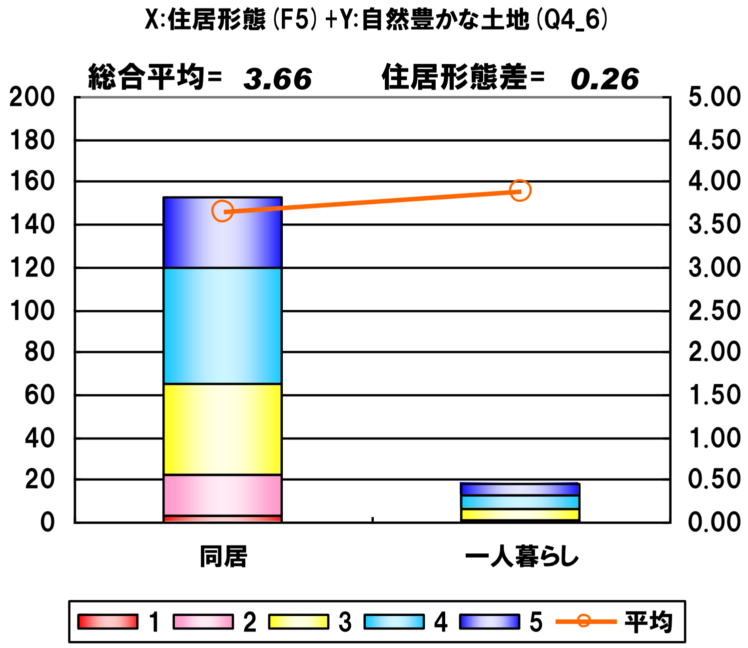


図 9-64: 住居形態と親と同居する重要性の相関関係

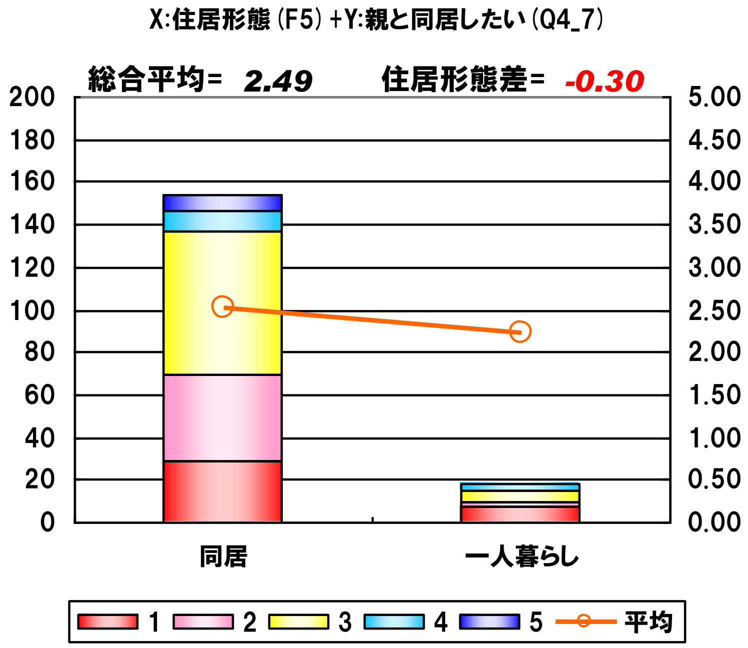


図 9-65： 住居形態と親の近くに住む重要性の相関関係

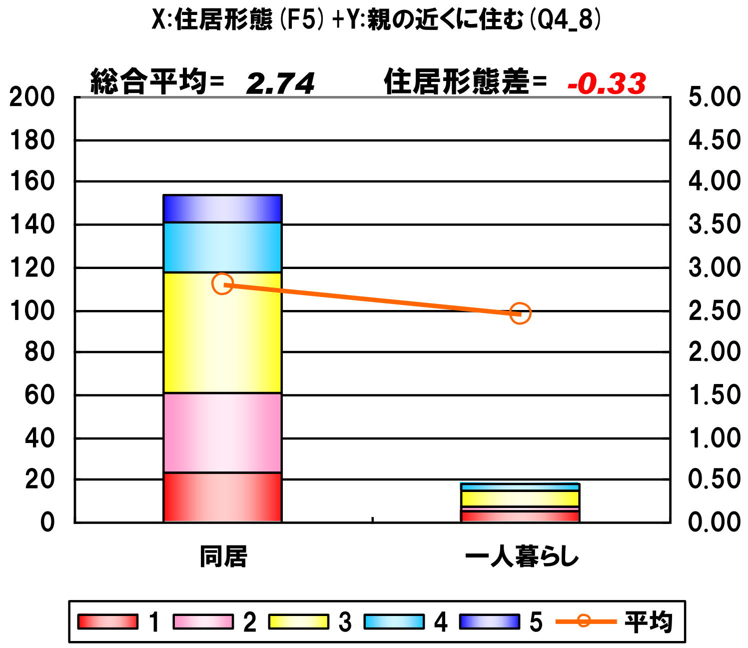


図 9-66： 住居形態と生れた土地に住む重要性の相関関係

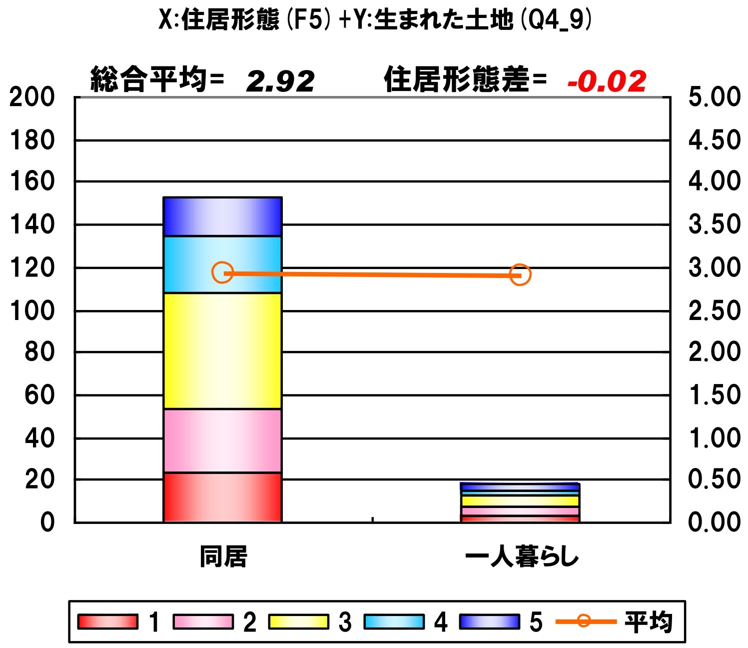


図 9-67: 住居形態と親と同居する重要性の相関関係

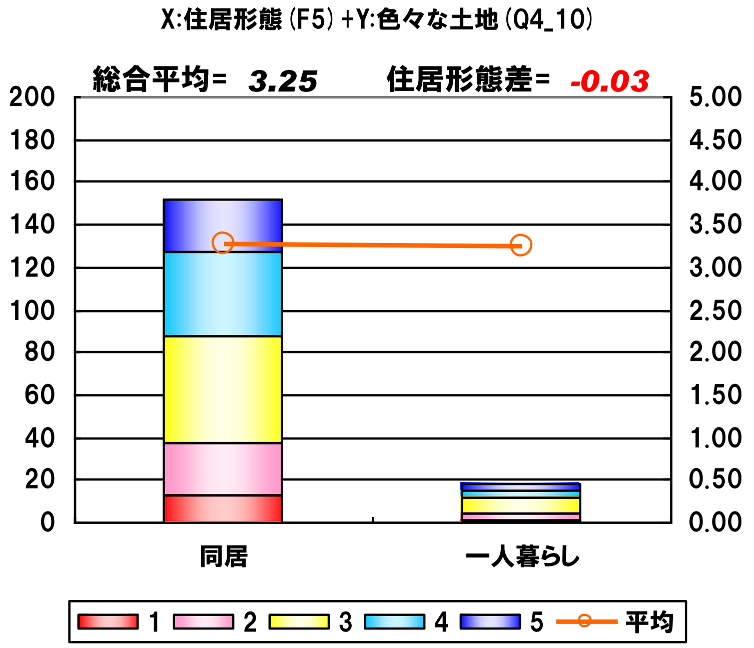


図 9-68: 住居形態とどこに住んでもいい事の相関関係

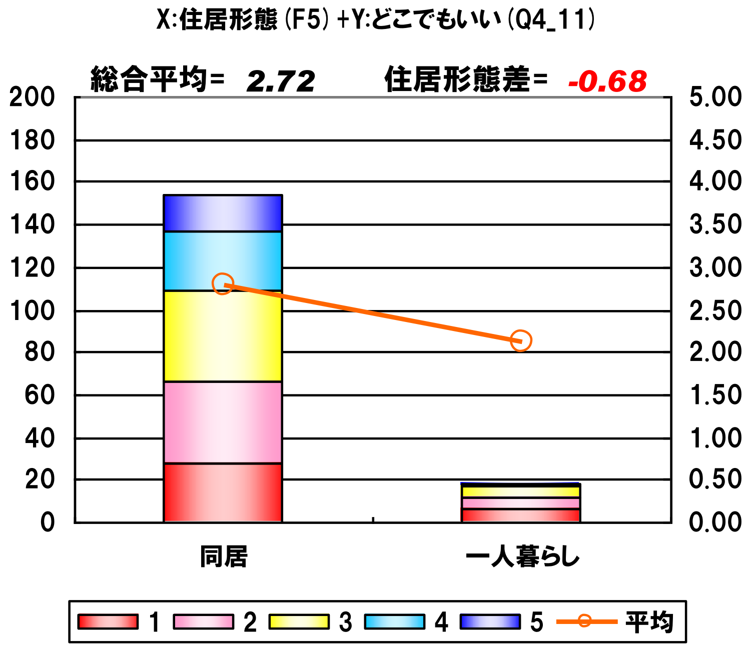


図 9-69: 住居形態と住民と仲良くする重要性の相関関係

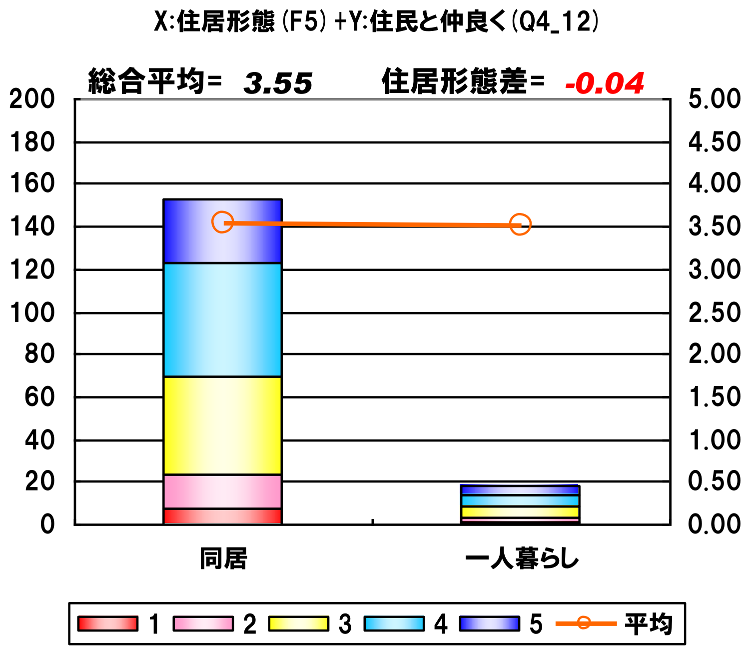


図 9-70: 住居形態と住んでいる町を良くする重要性の相関関係

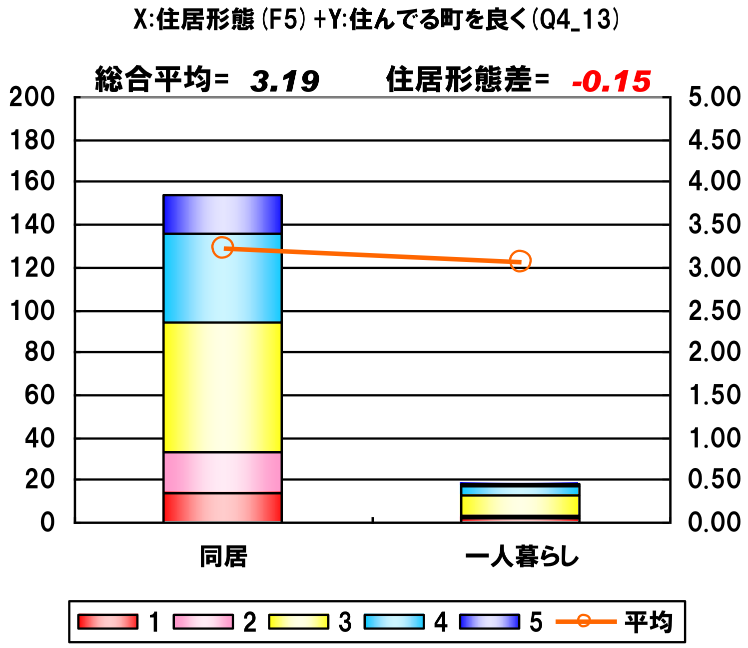


図 9-71： 住居形態と一人で気ままに住む重要性の相関関係

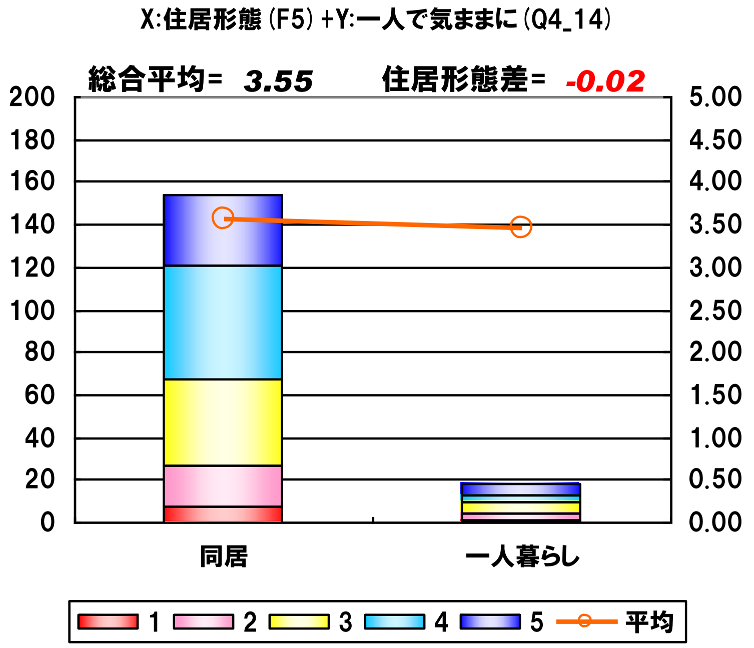


図 9-72： 住居形態と家族と一緒に住む重要性の相関関係

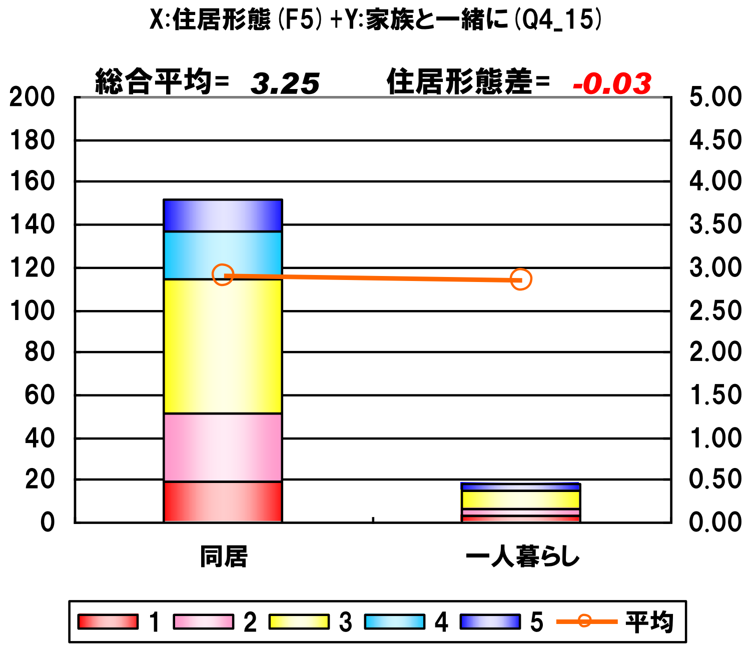


図 9-73: 地域活動への興味の集計結果

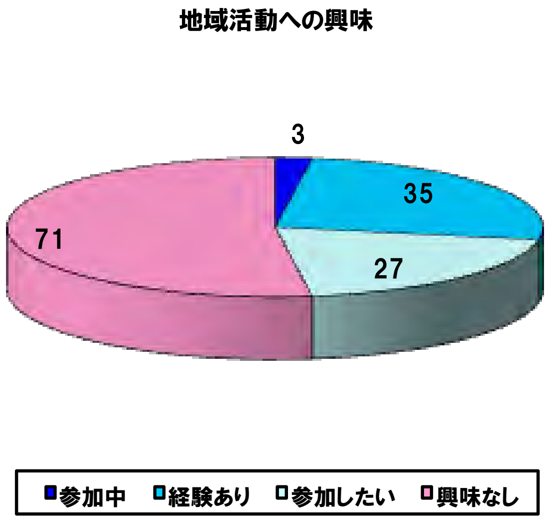


図 9-74: 性別と地域活動への興味との相関関係

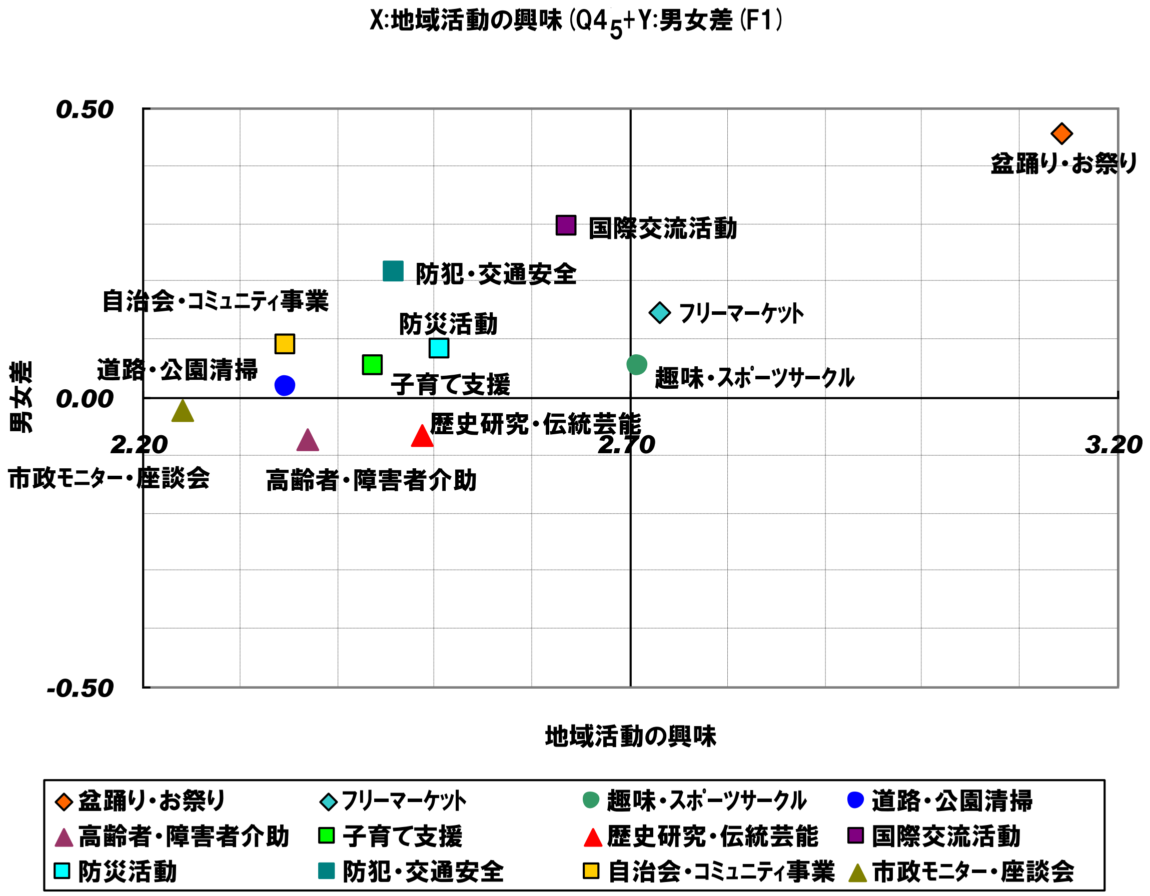


図 9-75: 性別と盆踊り･お祭りへの興味との相関関係

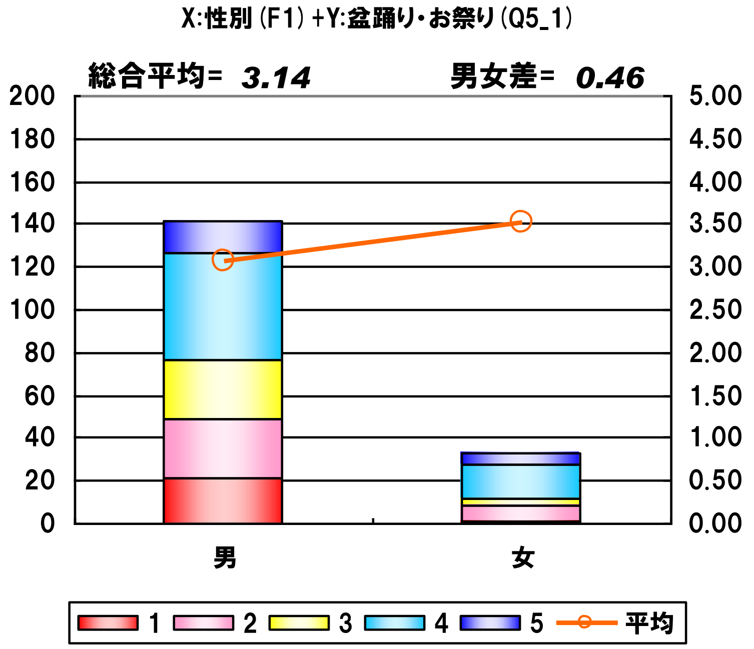


図 9-76: 性別とフリーマーケットへの興味との相関関係

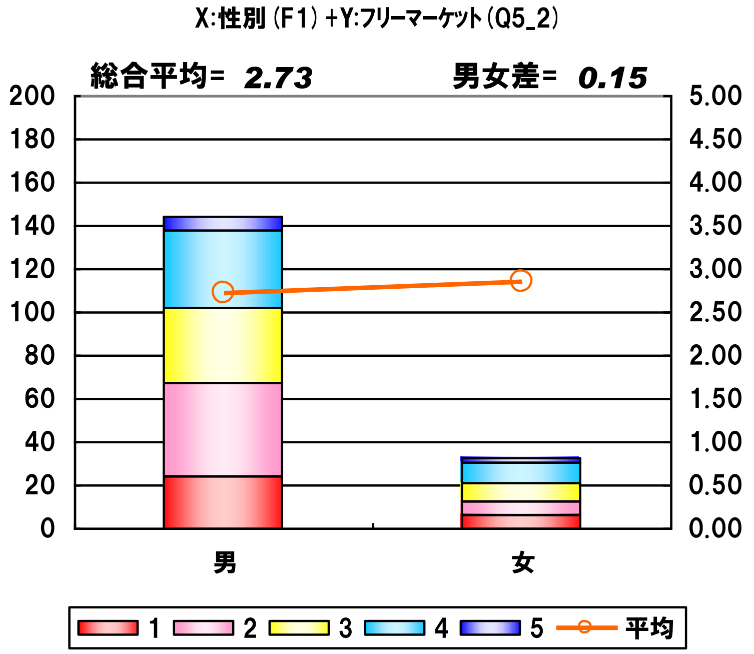


図 9-77: 性別と趣味・スポーツサークルへの興味との相関関係

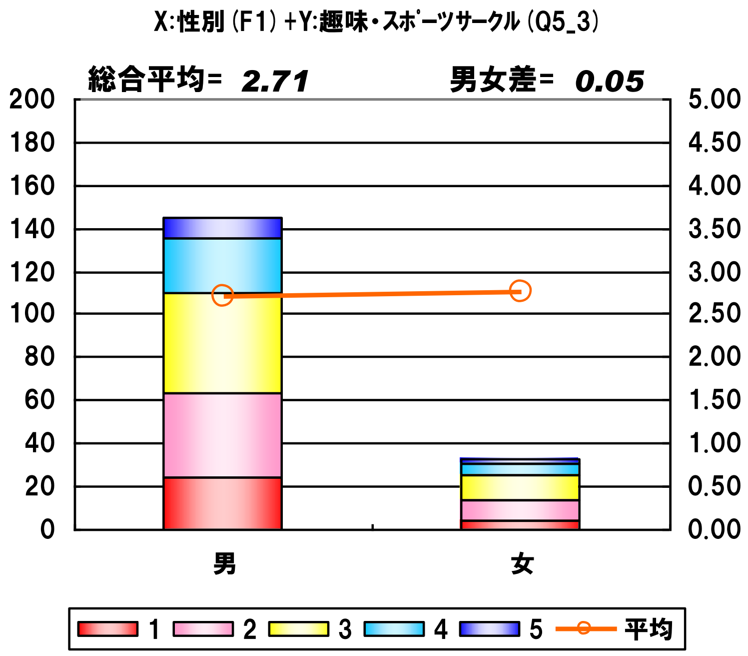


図 9-78: 性別と道路・公園清掃への興味との相関関係

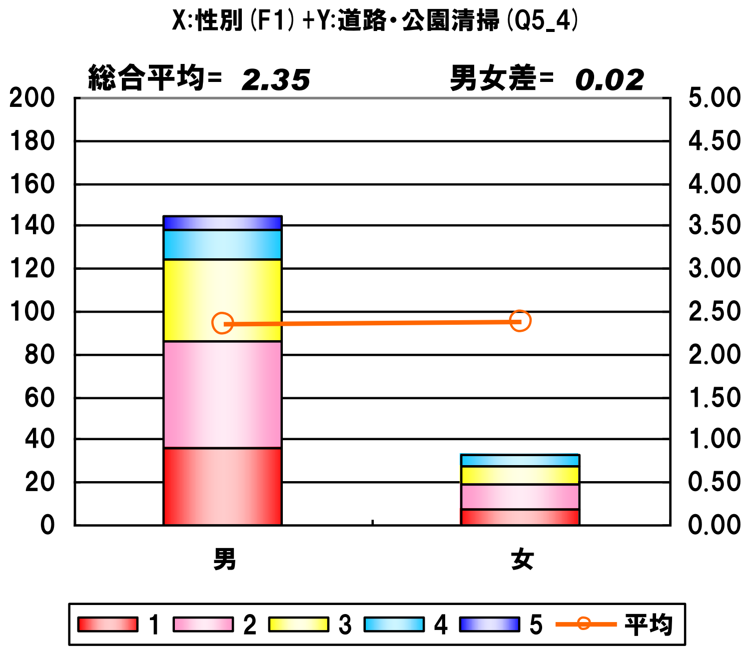


図 9-79: 性別と高齢者・障害者介助への興味との相関関係

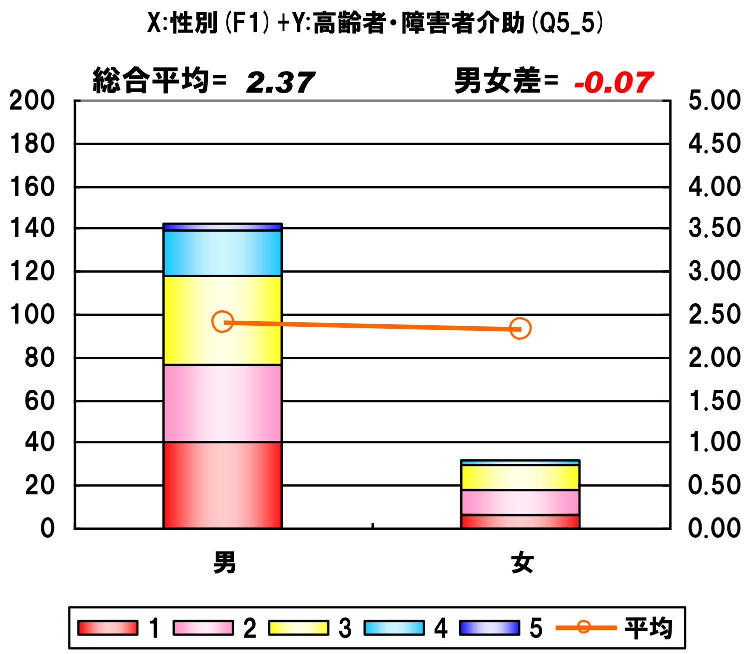


図 9-80: 性別と子育て支援への興味との相関関係

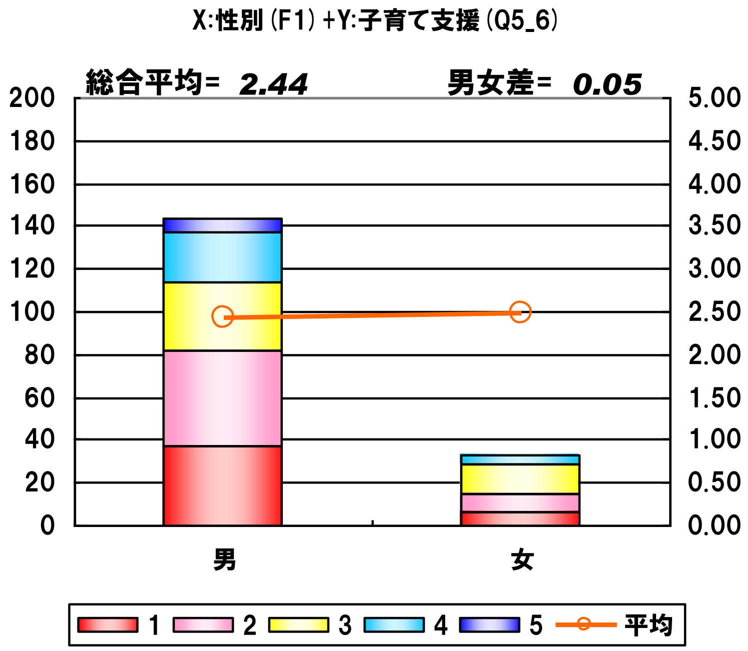


図 9-81： 性別と歴史研究･伝統芸能への興味との相関関係

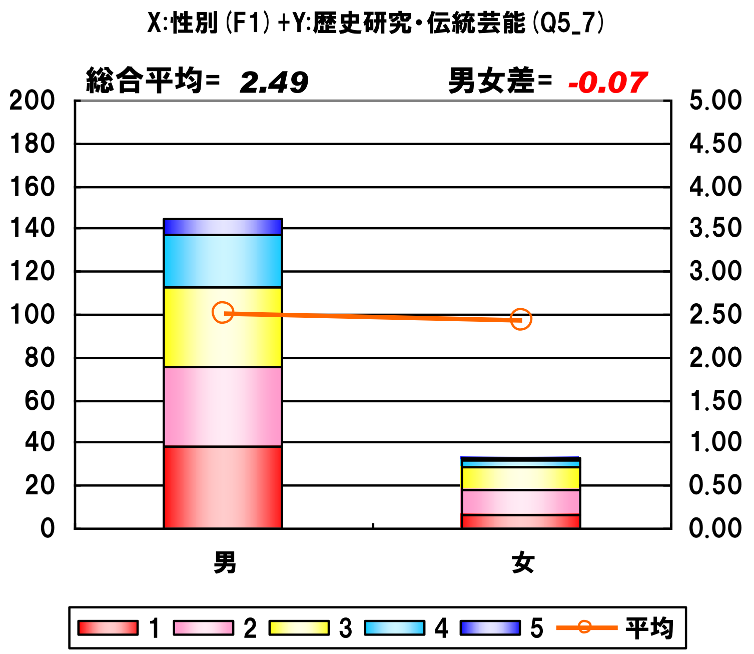


図 9-82： 性別と国際交流活動への興味との相関関係

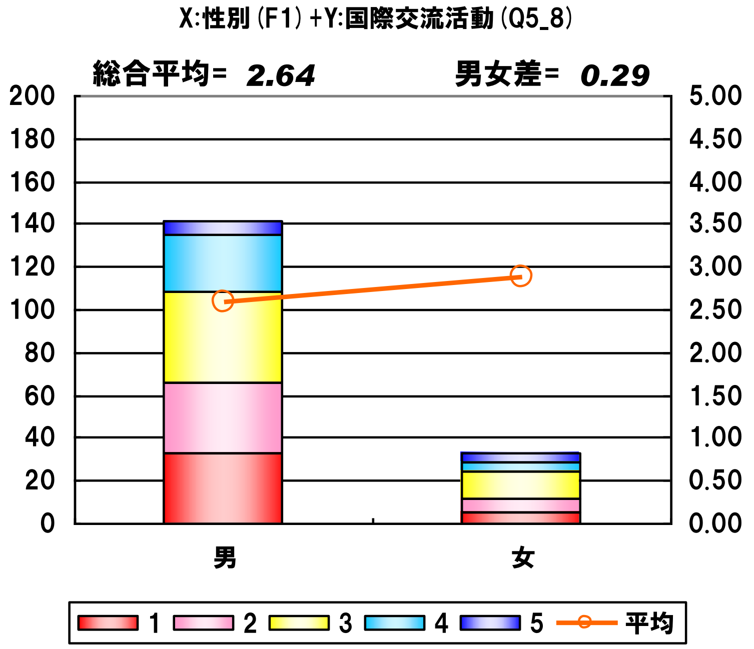


図 9-83: 性別と防災活動への興味との相関関係

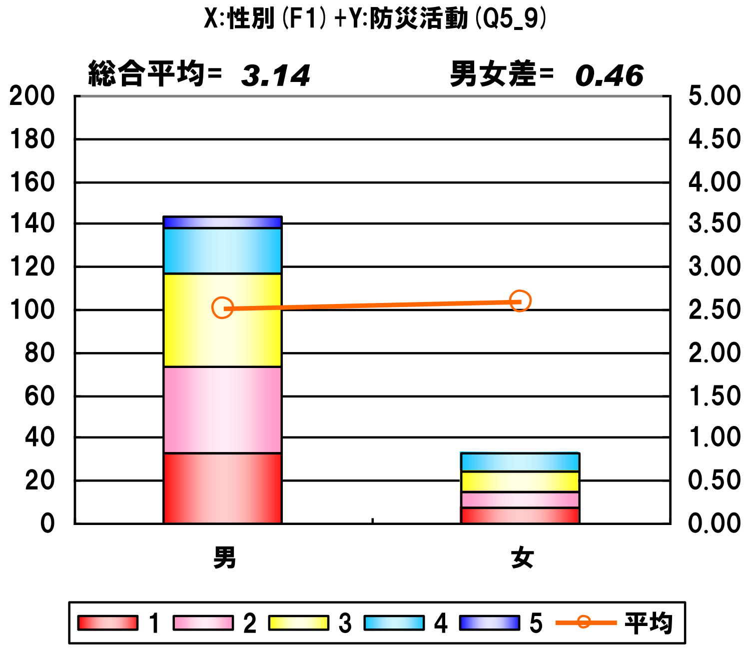


図 9-84: 性別と防犯・交通安全への興味との相関関係

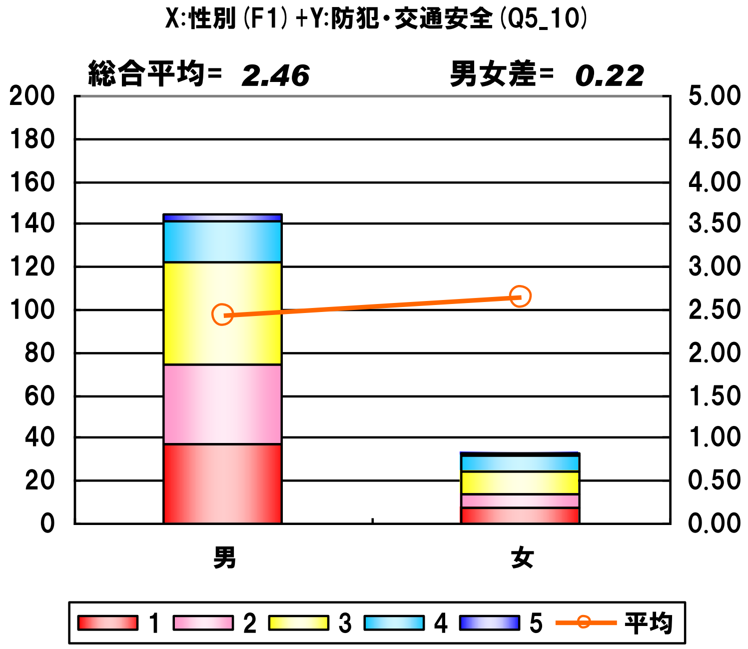


図 9-85: 性別と自治会・コミュニティ事業への興味との相関関係

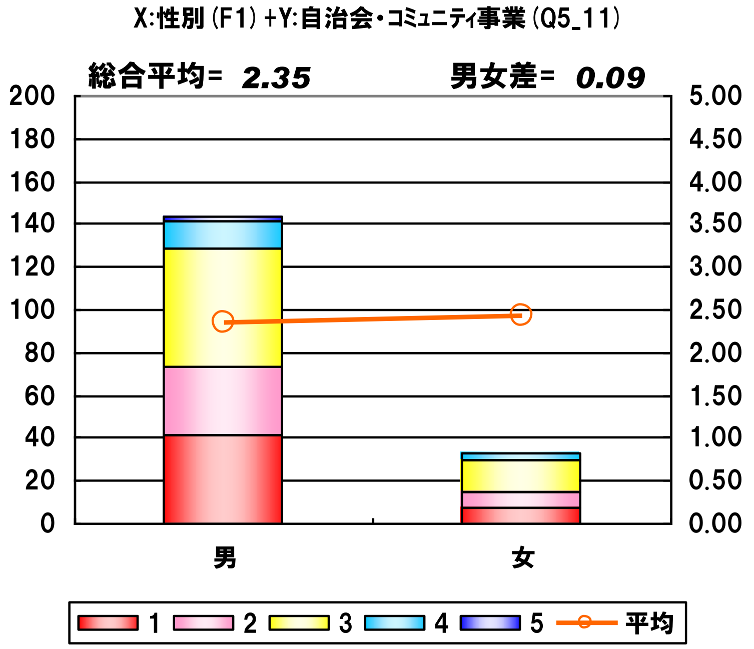


図 9-86: 性別と市政モニター・座談会への興味との相関関係

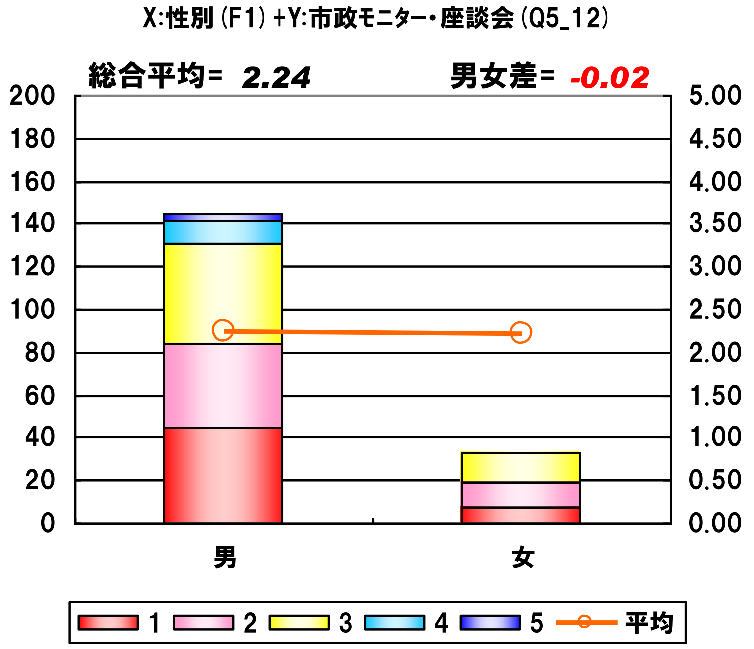


図 9-87: 地域活動への興味と参加意向との相関関係

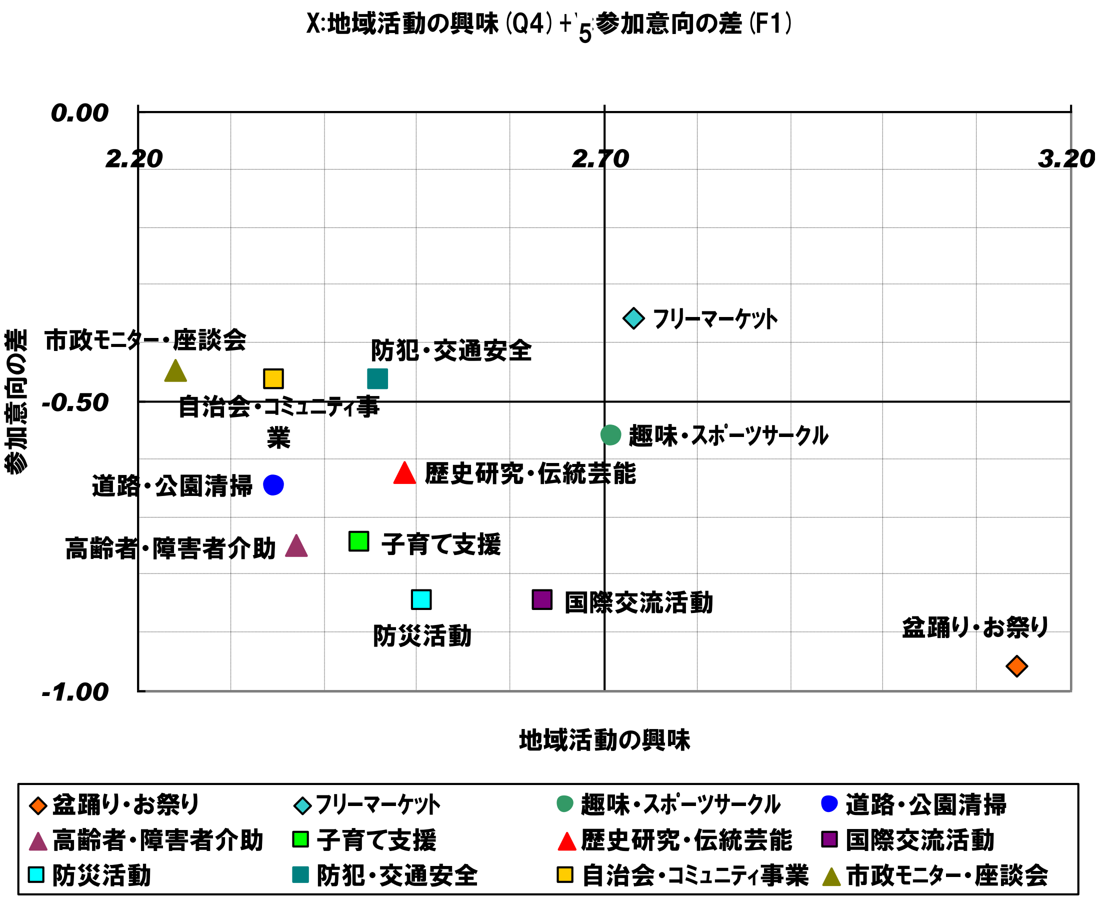


図 9-88: 地域活動への参加意向と盆踊り・お祭りへの興味の相関関係

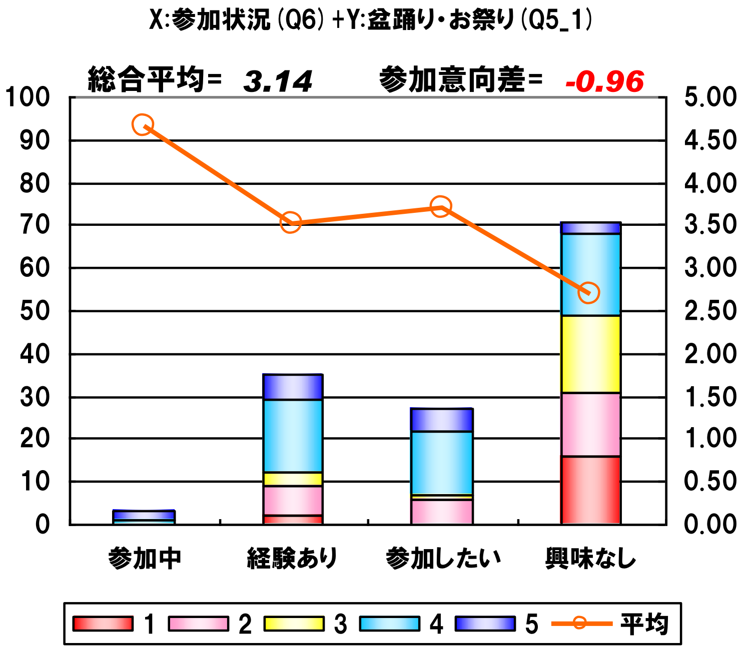


図 9-89: 地域活動への参加意向とフリーマーケットへの興味の相関関係

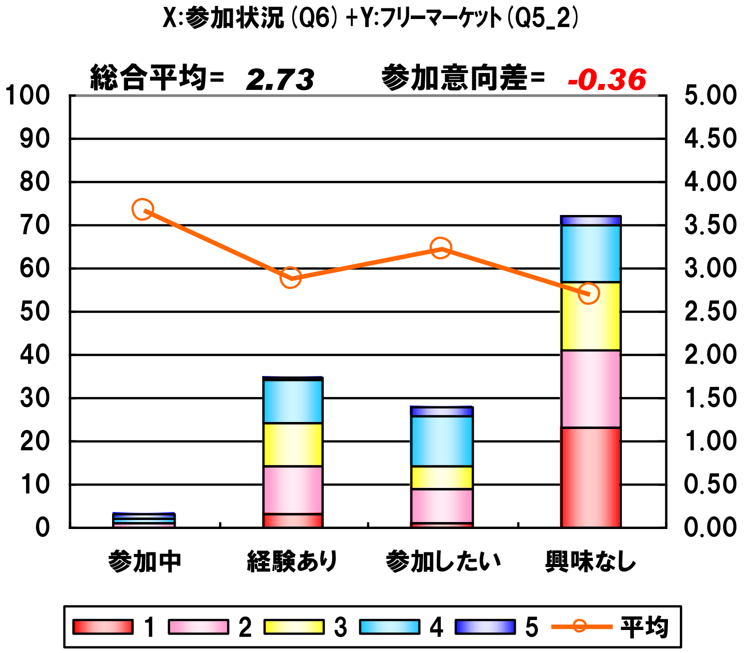


図 9-90: 地域活動への参加意向と趣味・スポーツサークルへの興味の相関関係

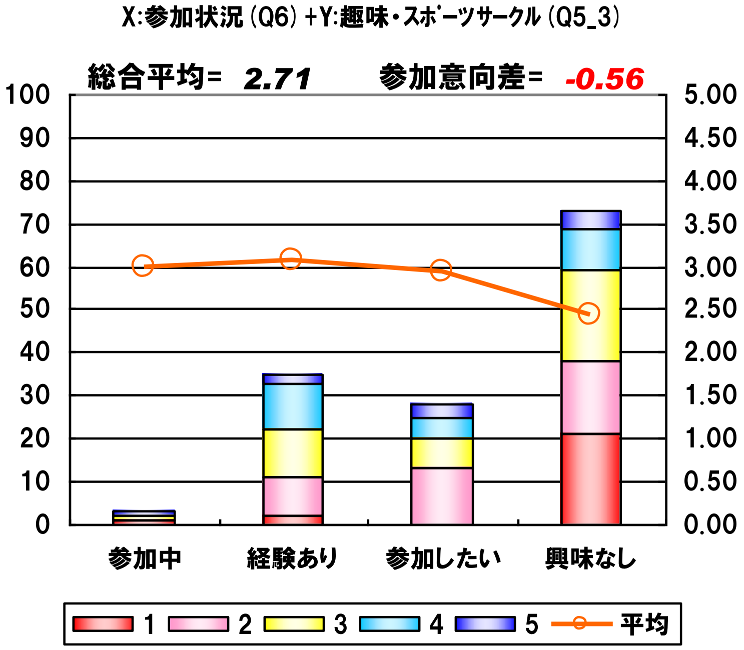


図 9-91： 地域活動への参加意向と道路・公園清掃への興味の相関関係

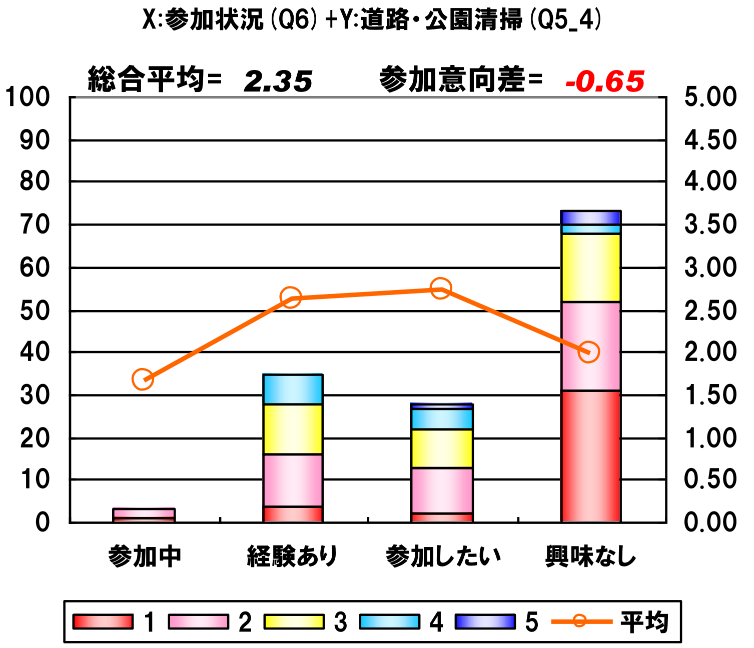


図 9-92： 地域活動への参加意向と高齢者・障害者介助への興味の相関関係

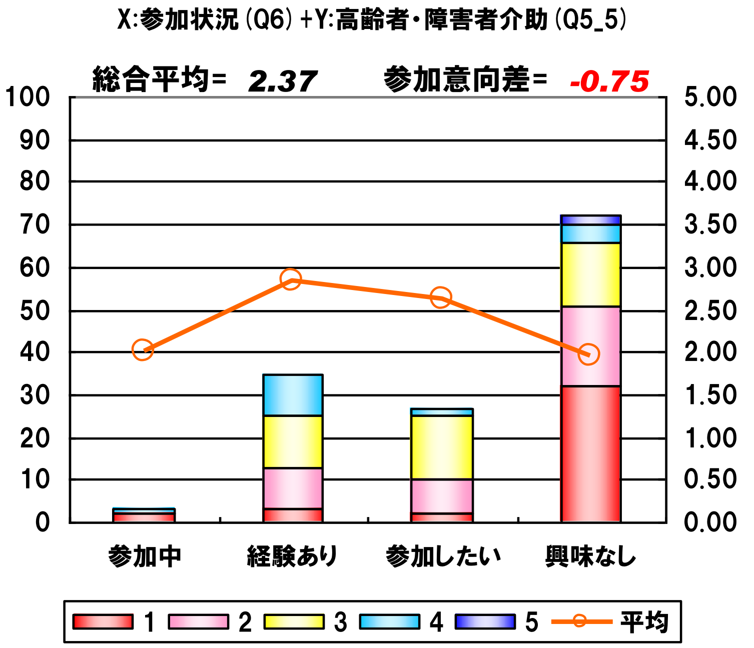


図 9-93: 地域活動への参加意向と子育て支援への興味の相関関係

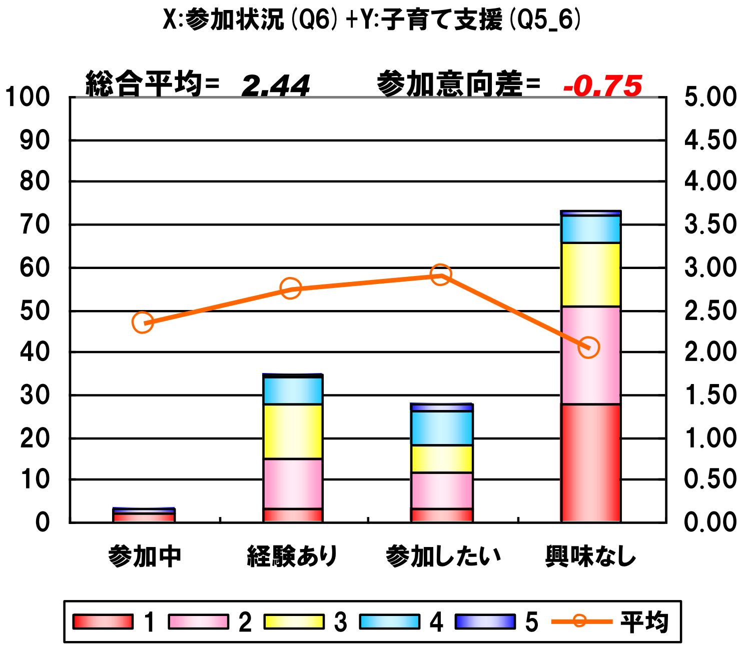


図 9-94: 地域活動への参加意向と歴史研究・伝統芸能への興味の相関関係

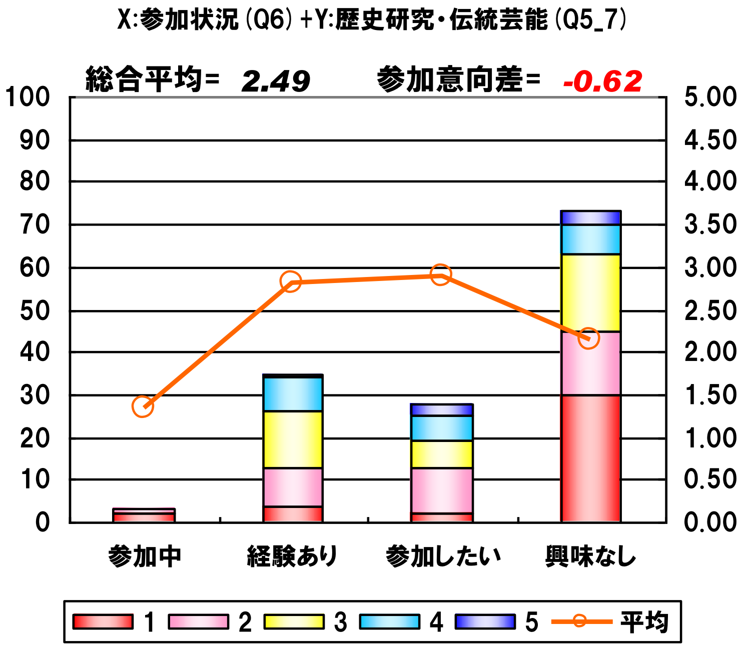


図 9-95: 地域活動への参加意向と国際交流活動への興味の相関関係

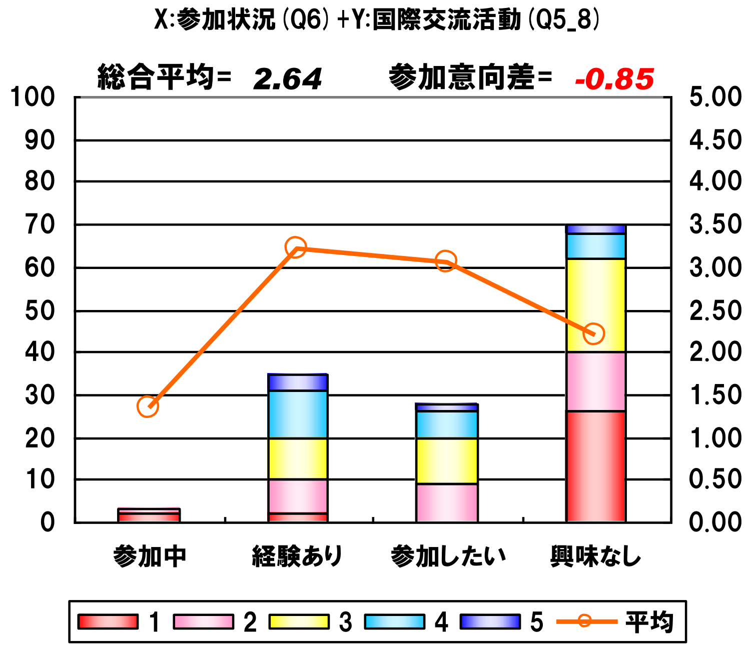


図 9-96: 地域活動への参加意向と防災活動への興味の相関関係

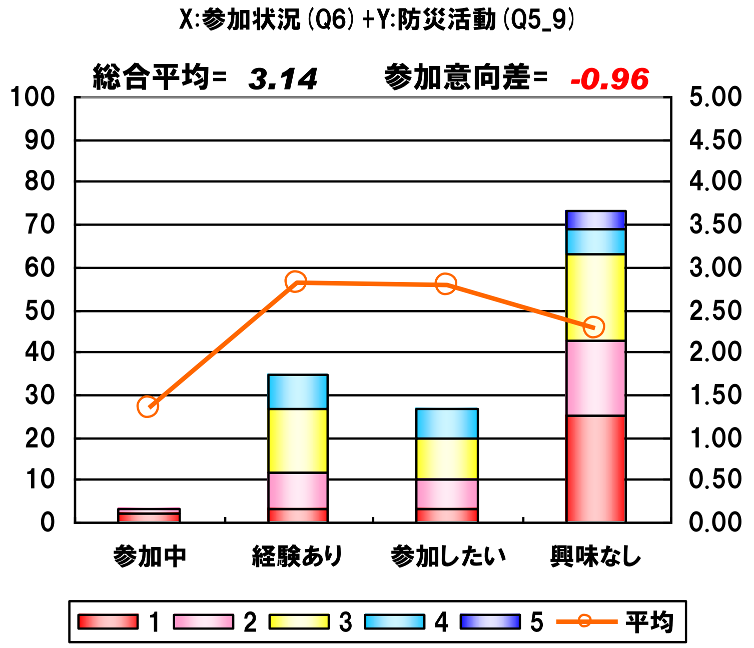


図 9-97: 地域活動への参加意向と防犯・交通安全への興味の相関関係

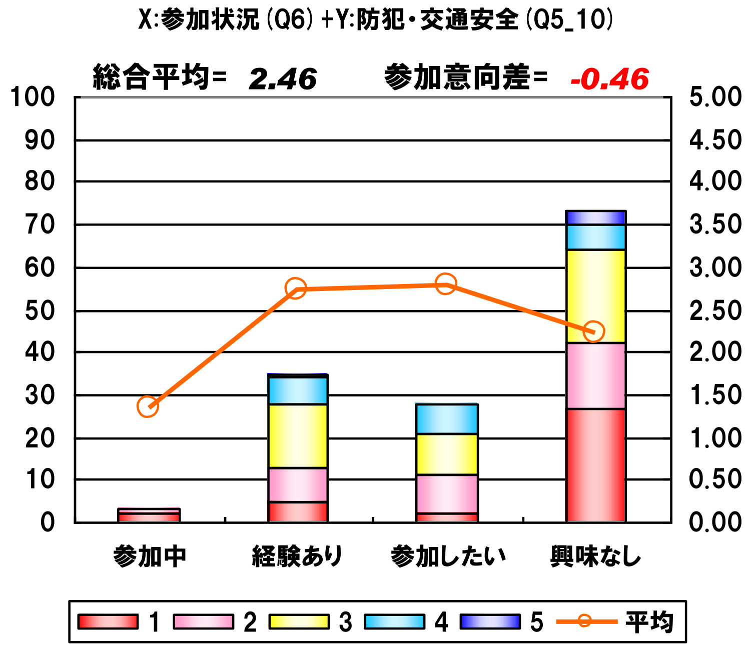


図 9-98: 地域活動への参加意向と自治会・コミュニティ事業への興味の相関関係

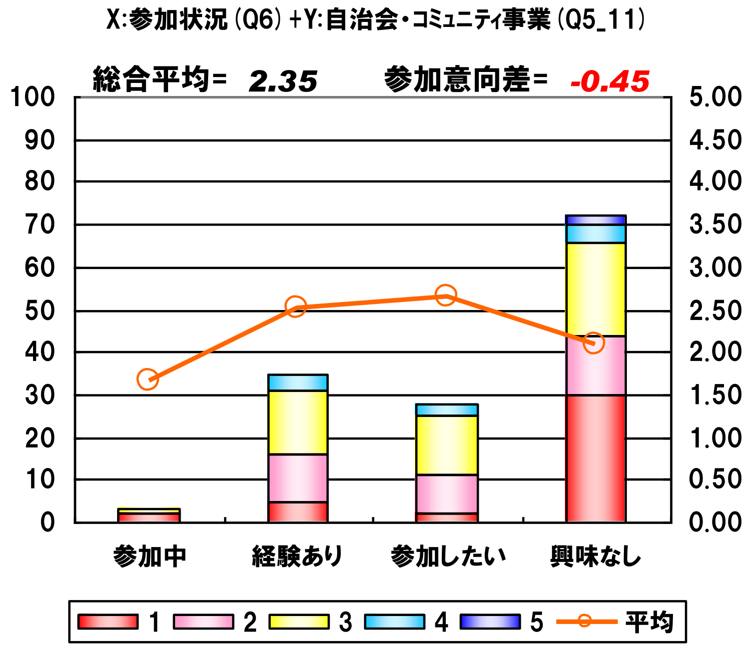


図 9-99: 地域活動への参加意向と市政モニター・座談会への興味の相関関係

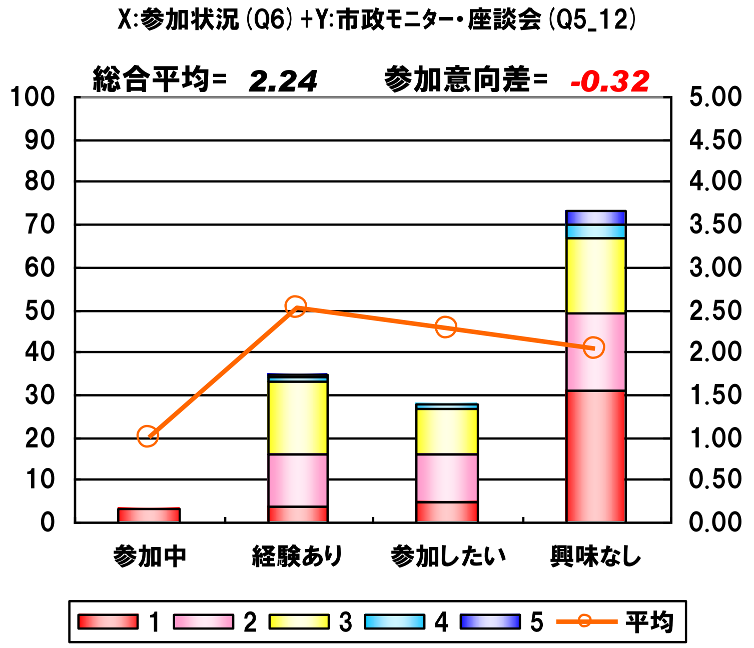


図 9-100: 多摩ニュータウン地域別印象平均点集計結果

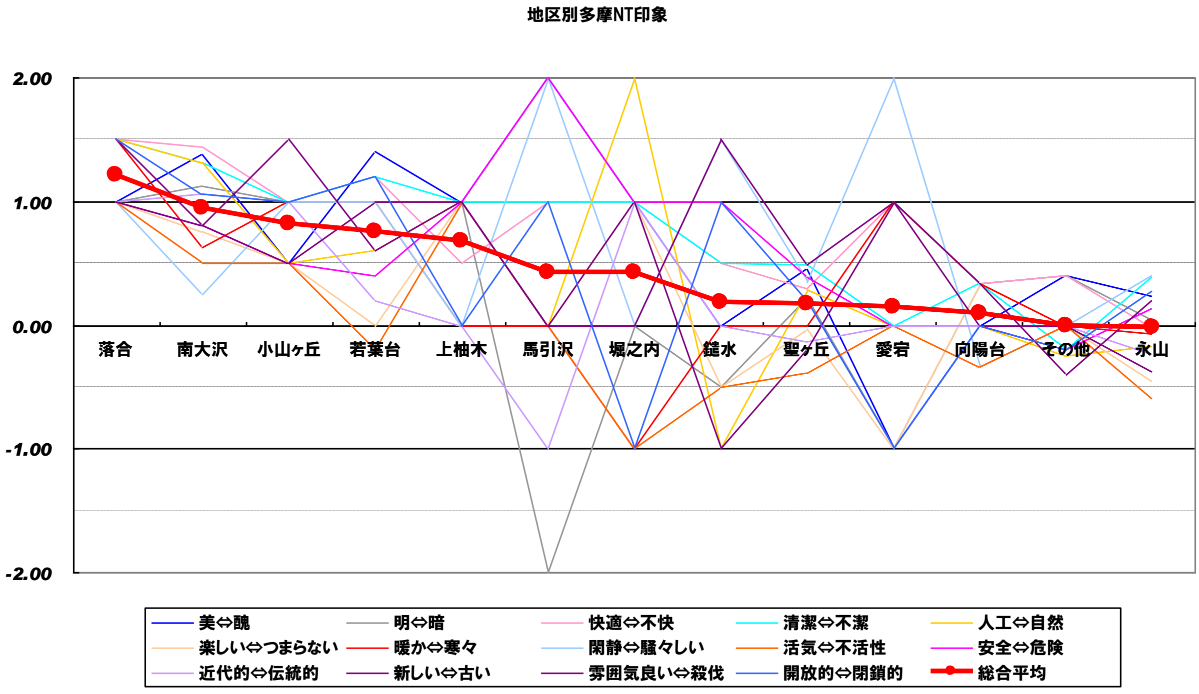


図 9-101： 多摩ニュータウン地域別の美醜印象集計結果

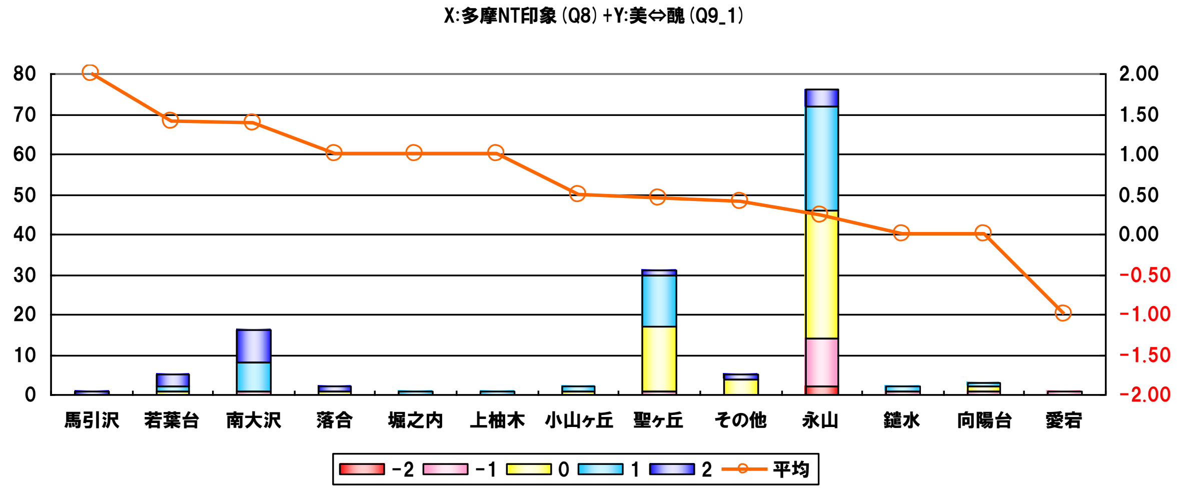


図 9-102： 多摩ニュータウン地域別の明暗印象集計結果

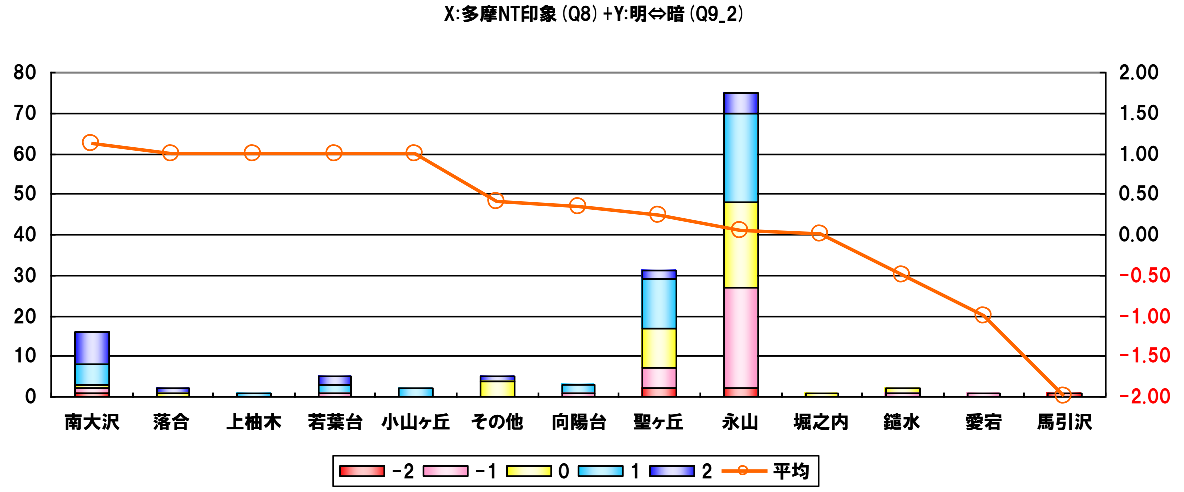


図 9-103： 多摩ニュータウン地域別の快不快印象集計結果

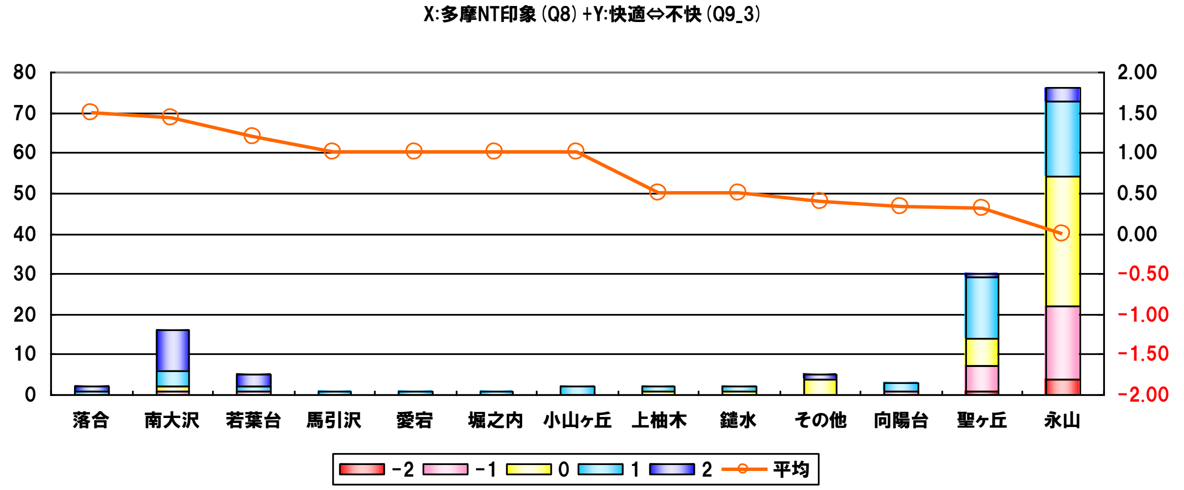


図 9-104: 多摩ニュータウン地域別の清潔・不潔印象集計結果

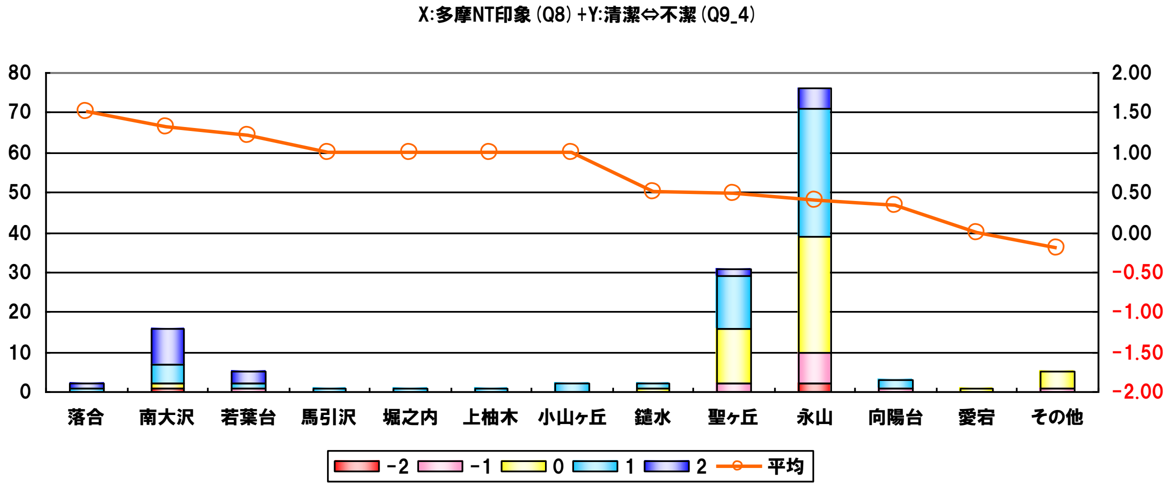


図 9-105: 多摩ニュータウン地域別の人工・自然印象集計結果

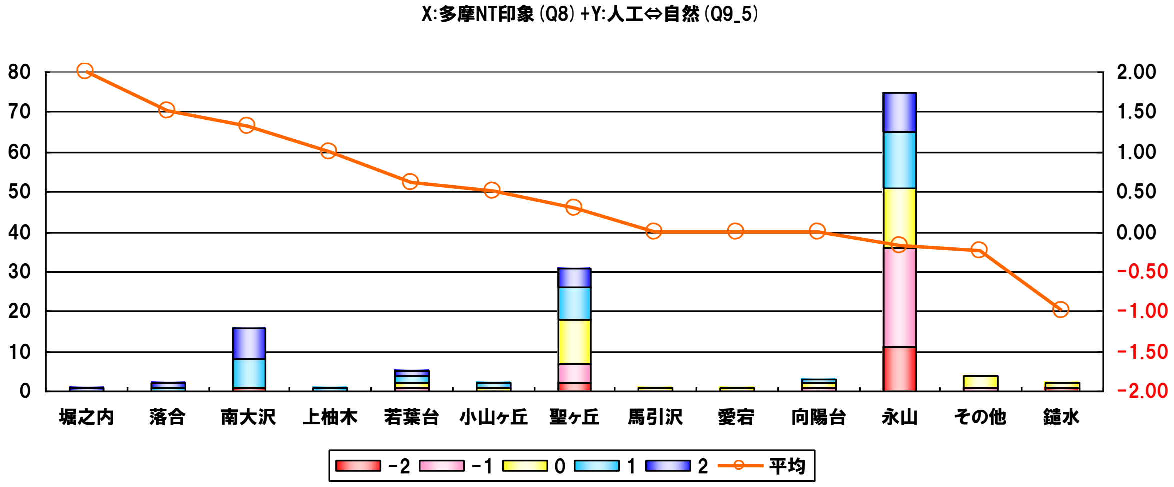


図 9-106: 多摩ニュータウン地域別の楽しい・つまらない印象集計結果

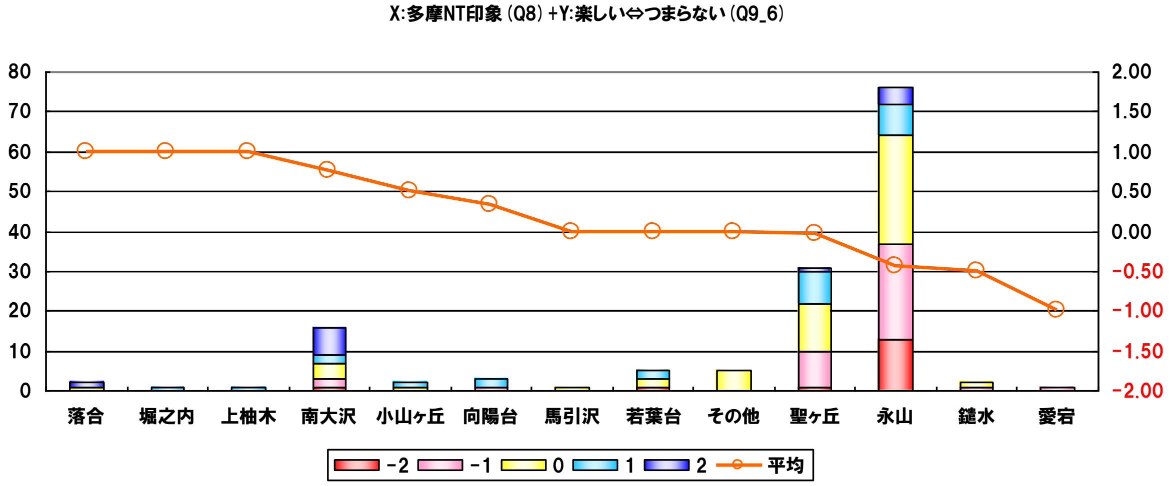


図 9-107: 多摩ニュータウン地域別の暖か・寒々印象集計結果

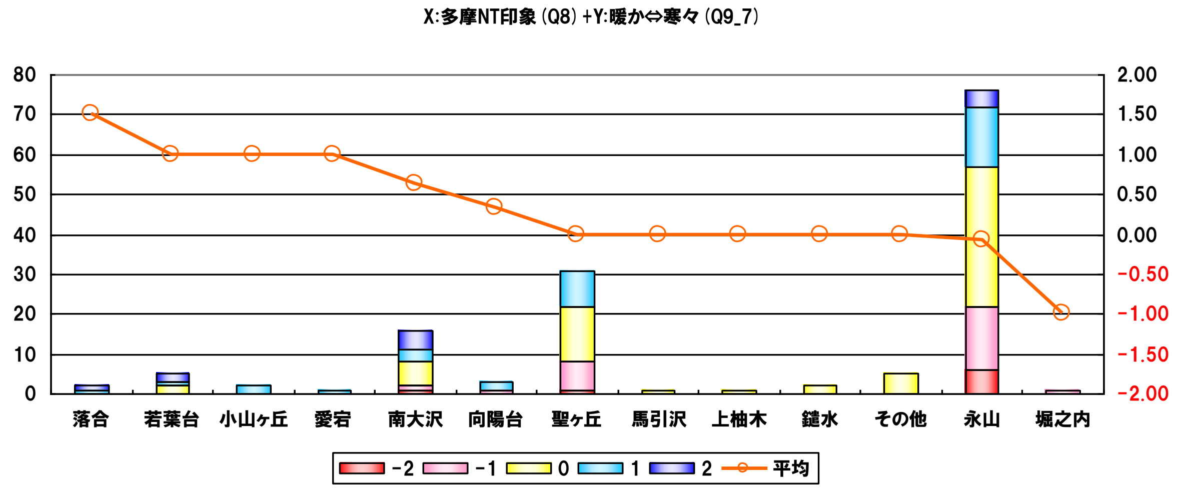


図 9-108: 多摩ニュータウン地域別の閑静・騒々しい印象集計結果

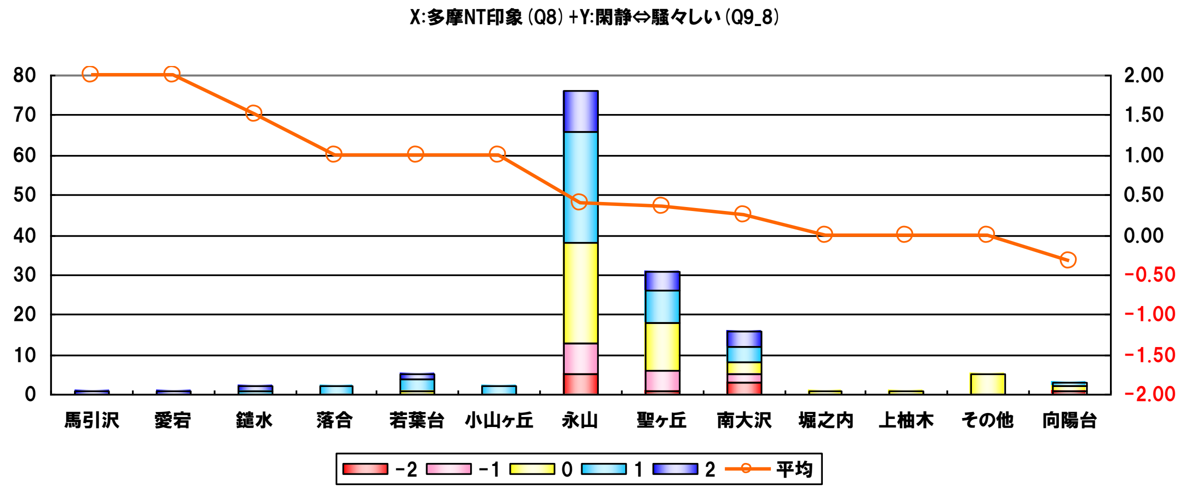


図 9-109: 多摩ニュータウン地域別の活気・不活性印象集計結果

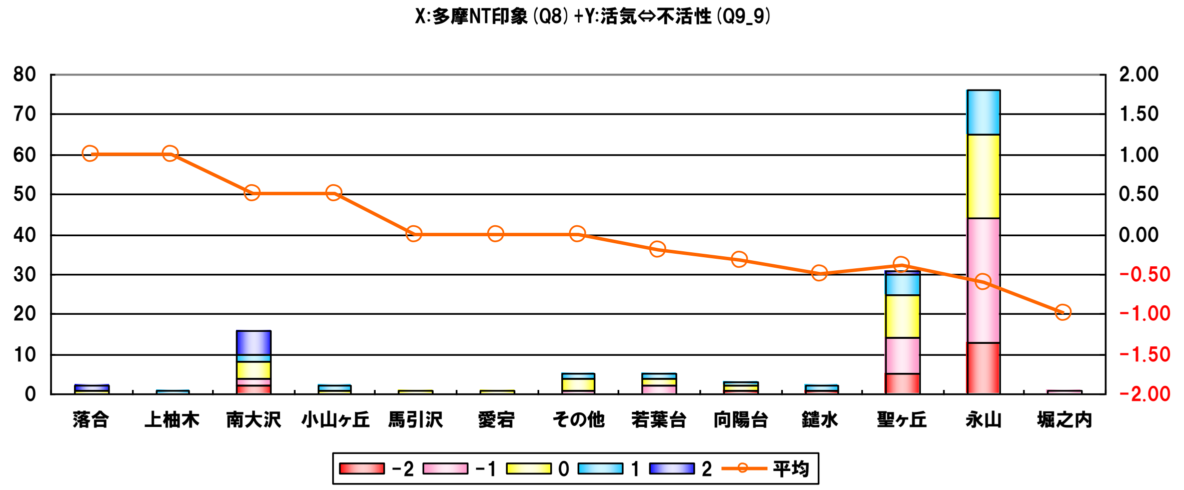


図 9-110: 多摩ニュータウン地域別の安全・危険印象集計結果

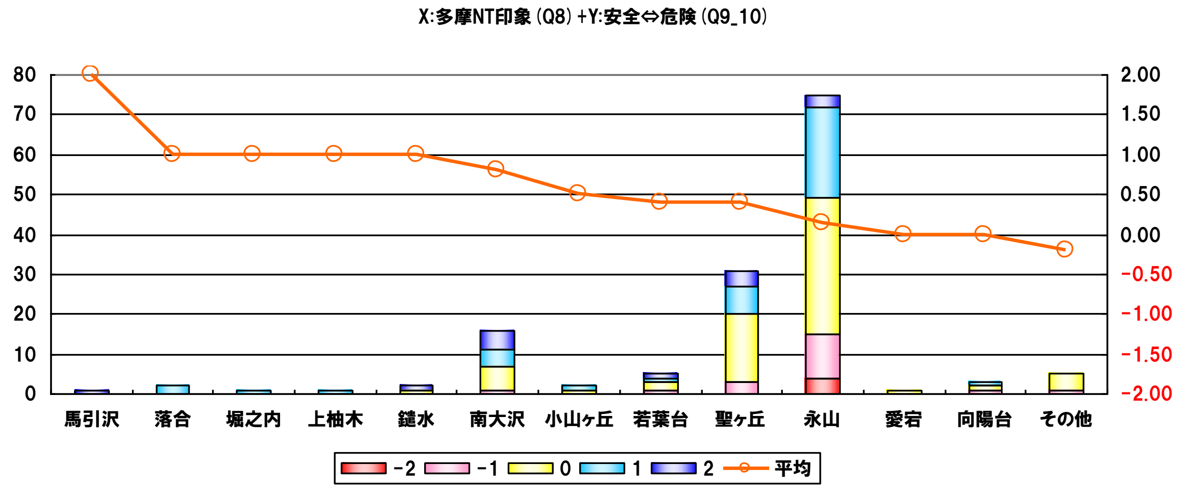


図 9-111: 多摩ニュータウン地域別の近代的・伝統的印象集計結果

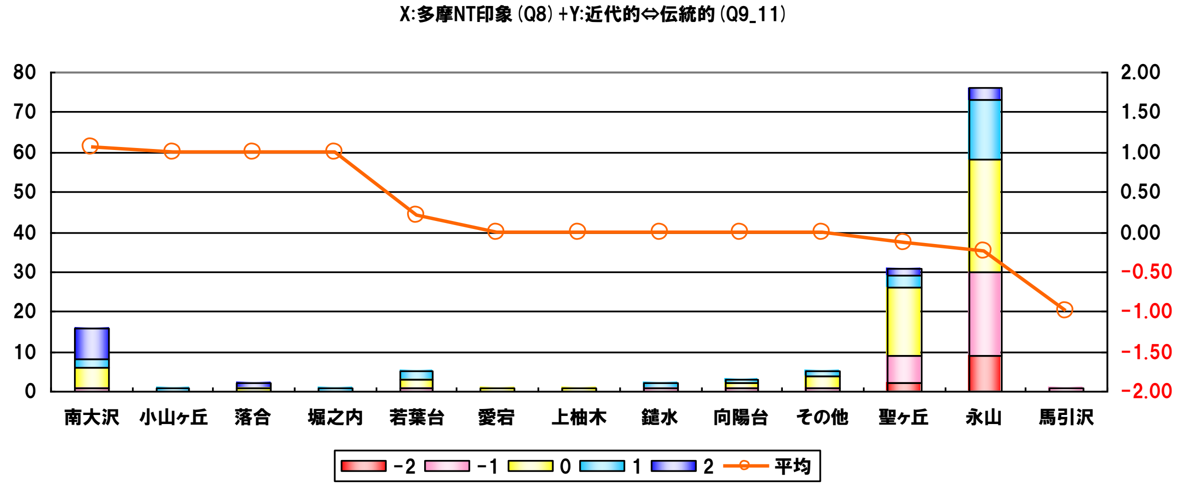


図 9-112: 多摩ニュータウン地域別の新しい・古い印象集計結果

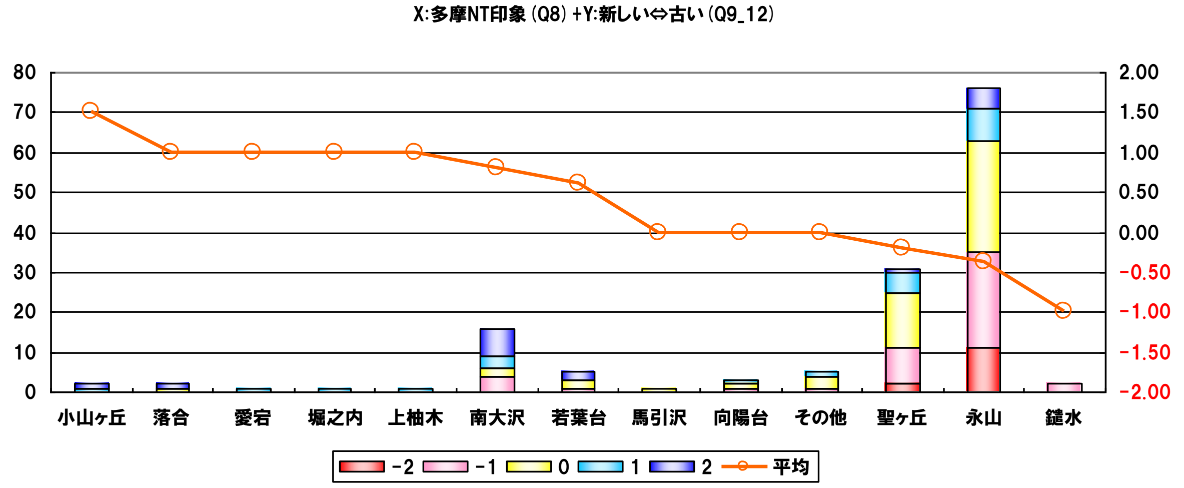


図 9-113: 多摩ニュータウン地域別の雰囲気良い・殺伐印象集計結果

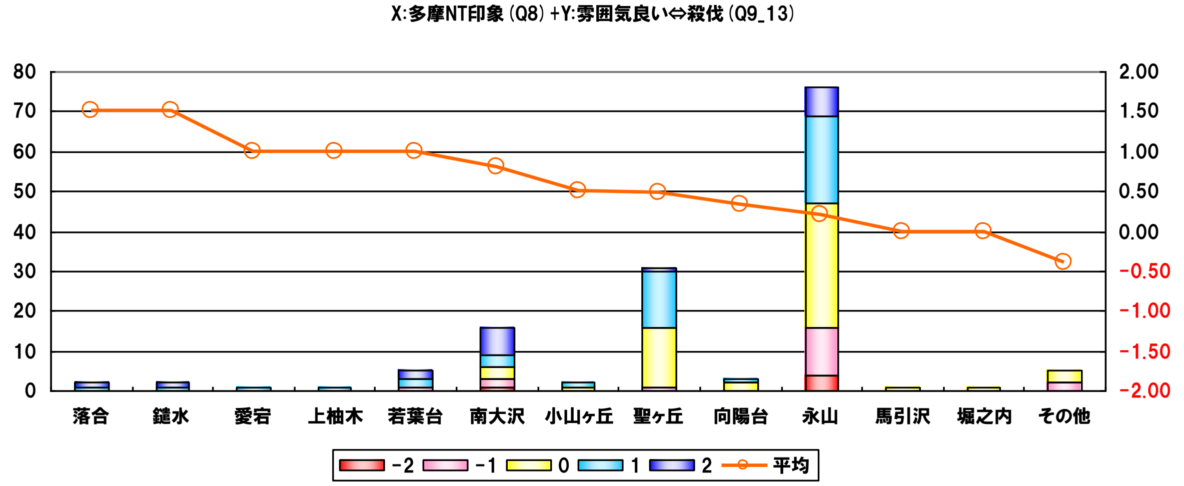
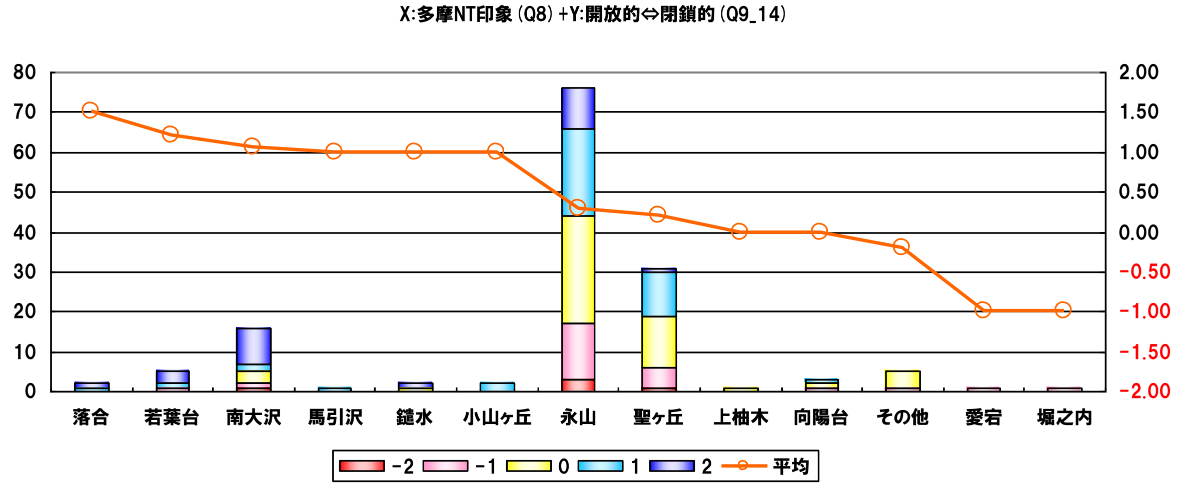


図 9-114: 多摩ニュータウン地域別の開放的・閉鎖的印象集計結果



【参考文献】

A） 第 2 章から第 4 章までの参考文献

A-1) (財)関西情報・産業活性化センター、「ニュータウン再生を支える地域コミュニティ創生に関する調査研究」
NIRA 2007/5/1

A-2) (財)神戸都市問題研究所、「地域を支え活性化するコミュニティ・ビジネスの課題と新たな方向性」
NIRA 2002/9/1

A-3) 秋元 孝夫、「ニュータウン再生～引き潮時代のタウンマネージメント～」(多摩 NT まちづくり専門家会議)
2007/6/27

A-4) NPO フュージョン、「ニュータウン人・縁卓会議報告書」、2006/10/26

A-5) 財団法人東北産業活性化センター編、「明日のニュータウン」、日本地域社会研究所 2008年

A-6) 山本茂、「ニュータウン再生」、学芸出版社 2009年

A-7) 秋元孝夫、「ニュータウンの未来」

A-8) 立命館大学教育科学研究所、「大学生ボランティアたちのこころの軌跡」、2000/3/28

A-9) 大阪ボランティア協会、「大阪ボランティア協会 40 年史」、2005/11/12

A-10) 内閣府、「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」、2003 年

A-11) JYVA 社団法人 日本青年奉仕協会、「ボランティア白書2007－社会をかえる営みの価値－」

A-11) JYVA 社団法人 日本青年奉仕協会、「ボランティア白書2005－ボランティアのシチズンシップ再考－」

A-12) 大阪ボランティア協会、「マスターズ市民白書 団塊の世代が切り拓く新しい市民社会」、2003/6

A-13) 松田雅央、「ドイツ人が主役の街づくり -ボランティア大国を支える市民活動-」、学芸出版社、2007/4/10

A-14) 前林清和、「Win-Win の社会を目指して -社会貢献の多面的考察-」、晃洋書房、2009/5/10

A-15) 内閣府、「社会意識に関する世論調査」、2008 年

A-16) 桜井政成、「ボランティア・マネジメント -自発的行為の組織化戦略-」、ミネルヴァ書房、2007/4/20

A-17) 田村正勝、「ボランティア論 -共生の理念と実践-」、ミネルヴァ書房、2009/3/10

A-18) UR 都市機構「TAMA NEW TOWN SINCE 1965

A-19) 多摩市、「第四次多摩市総合計画」

A-20) 多摩市、「第五次多摩市総合計画基本構想 市民ワークショップ資料」

A-21) 国勢調査 東京都区市町村町丁別報告 平成 17 年

A-22) RIETI H18 NPO 法人活動実態調査

A-23) 多摩市、多摩 NPO センター運営検討市民会議検討まとめ,2008/7

A-24) 福原正弘、「甦れニュータウン –交流による再生を求めて-」、古今書院、2001 年

A-25) 多摩市 くらしと文化部 市民活動推進課、「平成 19 年度 NPO・市民団体等協働事例集」、2008 年

A-26) 多摩市、地域デビュー手引書 2009 年版 市民活動団体紹介編、2009 年

A-27) 多摩大学総合研究所 マネジメントレビュー、2008 年

第 6 章から第 7 章までの参考文献

B-1) 庄司昌彦、三浦伸也、須子善彦、和崎宏 著
『地域ＳＮＳ最前線 web2.0 時代のまちおこし実践ガイド』

B-2) 庄司昌彦『地域SNSサイトの実態把握、地域活性化の可能性』

B-3) 株式会社ミクシィ 2008 年度第 4 四半期及び通期決算説明資料

【図表索引】

表 3-1: 多摩ニュータウン地区の人口構成詳細 12
表 5-1: 地域活動参加の理由と不参加の理由(自由記述欄より) 26
表 9-1: 実施アンケート内容(1/4) 39
表 9-2: 実施アンケート内容(2/4) 40
表 9-3: 実施アンケート内容(3/4) 41
表 9-4: 実施アンケート内容(4/4) 42

図 3-1: 多摩ニュータウンの位置 6
図 3-2: 多摩ニュータウンの骨格構造 6
図 3-3: 多摩ニュータウンの歴史 7
図 3-4: 多摩市の高齢人口比率の主要各国との比較 8
図 3-5: 多摩市の将来人口推計 9
図 3-6: 多摩市の将来年齢構成の推計 9
図 3-7: 東京都・多摩市・ニュータウン地区の年齢別人口分布 10
図 3-8: 多摩市住民アンケートにおける重点注力要望項目(経年変化) 11
図 3-9: 多摩市住民アンケートにおける重点注力要望項目(H20 年度) 11
図 3-10: 多摩ニュータウンにおける年少人口割合の地域捌特性(2005 年度) 13
図 3-11: 多摩ニュータウンにおける老年人口割合の地域捌特性(2005 年度) 13
図 3-12: 多摩ニュータウンにおける世帯数増減率の地域捌特性(2005 年度) 13
図 3-13: 多摩ニュータウンエリアの地域別人口推移 14
図 3-14: 多摩ニュータウンエリアの区域別人口推移 14
図 3-15: 多摩市における年齢別コーホート人口推移(H8-13) 15
図 3-16: 多摩市における世帯主年齢別コーホート推移(H8-13) 16
図 4-1: NPO の収入内訳 18
図 4-2: 事業収入の内訳 18
図 4-3: 資金面以外で NPO 法人の活動を支えるために必要なこと 19
図 4-4: ボランティア活動への参加意向調査結果(H18 年) 19
図 4-5: 「多摩ニュータウンが地域活性化のために行っている取組み」 20
図 4-6: 全国の NPO 普及指数 20
図 4-7: 多摩市における NPO の目指す協働イメージ 22
図 6-1: 地域SNSの合計設置数(2004 年 12 月～2008 年 2 月) 28
図 6-2: ユーザーの SNS の利用頻度 29
図 6-3: SNSサイトに満足している機能 30
図 6-4: SNSコミュニティを利用する目的 30
図 6-5: 地域SNSサイト、あみっぴぃ(http://amippy.jp/) 31
図 6-6: 地域SNSサイト、ひびの(http://www.saga-s.co.jp/) 32
図 6-7: 地域SNSサイト、ちょっぴー(http://www.sns.mm-chiyoda.jp/) 33
図 6-8: 年齢別データ 35
図 7-1: わっしょい!!TAMAの考える地域SNS 36
図 7-2: 最終提案図 38
図 9-1: アンケート回答者属性 42
図 9-2: 回答者の住居形態 43

図 9-3: 回答者の居住地分布......43
図 9-4: 住居形態による分布......43
図 9-5: 性別と住み良さ回答の相関関係......44
図 9-6: 性別と住み続けたさ回答の相関関係......44
図 9-7: 住居形態と住み良さ回答の相関関係......45
図 9-8: 住居形態と住み続けたさ回答の相関関係......45
図 9-9: 住み良さと住み続けたさ回答の相関関係......46
図 9-10: 住み続けたさと住み良さ回答の相関関係......46
図 9-11: 住み良さと生活環境満足度との相関関係......47
図 9-12: 住み良さと交通の便満足度との相関関係......47
図 9-13: 住み良さと買い物の便満足度との相関関係......48
図 9-14: 住み良さと緑の豊かさ満足度との相関関係......48
図 9-15: 住み良さと日当り・風通し満足度との相関関係......49
図 9-16住み良さと空気のきれいさ満足度との相関関係......49
図 9-17: 住み良さと公園・遊び場満足度との相関関係......50
図 9-18: 住み良さと騒音・振動満足度との相関関係......50
図 9-19: 住み良さとごみ処理満足度との相関関係......51
図 9-20: 住み良さと防犯・風紀満足度との相関関係......51
図 9-21: 住み良さと災害危険性満足度との相関関係......52
図 9-22: 住み良さと交通安全対策満足度との相関関係......52
図 9-23: 住み良さと医療施設満足度との相関関係......53
図 9-24: 住み良さと集会施設満足度との相関関係......53
図 9-25: 住み良さと地域活動満足度との相関関係......54
図 9-26: 住み続けたさと生活環境満足度との相関関係......54
図 9-27: 住み続けたさと交通の便満足度との相関関係......55
図 9-28: 住み続けたさと買い物の便満足度との相関関係......55
図 9-29: 住み続けたさと緑の豊かさ満足度との相関関係......56
図 9-30: 住み続けたさと日当り・風通し満足度との相関関係......56
図 9-31: 住み続けたさと空気のきれいさ満足度との相関関係......57
図 9-32: 住み続けたさと公園・遊び場満足度との相関関係......57
図 9-33: 住み続けたさと騒音・振動満足度との相関関係......58
図 9-34: 住み続けたさとごみ処理満足度との相関関係......58
図 9-35: 住み続けたさと防犯・風紀満足度との相関関係......59
図 9-36: 住み続けたさと災害危機性満足度との相関関係......59
図 9-37: 住み続けたさと交通安全対策満足度との相関関係......60
図 9-38: 住み続けたさと医療施設満足度との相関関係......60
図 9-39: 住み続けたさと集会施設満足度との相関関係......61
図 9-40: 住み続けたさと地域活動満足度との相関関係......61
図 9-41: 性別と住まいの考え方との相関関係......62
図 9-42: 性別と買い物の便の重要度の相関関係......62
図 9-43: 性別と通勤通学の重要度の相関関係......63
図 9-44: 性別と行政サービスの重要度の相関関係......63
図 9-45: 性別と生活環境の重要度の相関関係......64
図 9-46: 性別と都会に暮らす重要度の相関関係......64

図 9-47: 性別と自然の豊かさ重要度の相関関係 65
図 9-48: 性別と親と同居重要度の相関関係 65
図 9-49: 性別と親の近くに住む重要度の相関関係 66
図 9-50: 性別と生れた土地に住む重要度の相関関係 66
図 9-51: 性別と色々な土地に住む重要度の相関関係 67
図 9-52: 性別とどこに住んでもいい事の相関関係 67
図 9-53: 性別と住民と仲良くする重要性の相関関係 68
図 9-54: 性別と住んでる町を良くする重要性の相関関係 68
図 9-55: 性別と一人で気ままにする重要性の相関関係 69
図 9-56: 性別と家族と一緒にいる重要性の相関関係 69
図 9-57: 住居形態と住まいの考え方との相関関係 70
図 9-58: 住居形態と買い物の便の重要性の相関関係 70
図 9-59: 住居形態と通勤通学の重要性の相関関係 71
図 9-60: 住居形態と行政サービスの重要性の相関関係 71
図 9-61: 住居形態と生活環境の重要性の相関関係 72
図 9-62: 住居形態と都会に暮らしたい重要性の相関関係 72
図 9-63: 住居形態と自然豊かな土地に住む重要性の相関関係 73
図 9-64: 住居形態と親と同居する重要性の相関関係 73
図 9-65: 住居形態と親の近くに住む重要性の相関関係 74
図 9-66: 住居形態と生れた土地に住む重要性の相関関係 74
図 9-67: 住居形態と親と同居する重要性の相関関係 75
図 9-68: 住居形態とどこに住んでもいい事の相関関係 75
図 9-69: 住居形態と住民と仲良くする重要性の相関関係 76
図 9-70: 住居形態と住んでいる町を良くする重要性の相関関係 76
図 9-71: 住居形態と一人で気ままに住む重要性の相関関係 77
図 9-72: 住居形態と家族と一緒に住む重要性の相関関係 77
図 9-73: 地域活動への興味の集計結果 78
図 9-74: 性別と地域活動への興味との相関関係 78
図 9-75: 性別と盆踊り・お祭りへの興味との相関関係 79
図 9-76: 性別とフリーマーケットへの興味との相関関係 79
図 9-77: 性別と趣味・スポーツサークルへの興味との相関関係 80
図 9-78: 性別と道路・公園清掃への興味との相関関係 80
図 9-79: 性別と高齢者・障害者介助への興味との相関関係 81
図 9-80: 性別と子育て支援への興味との相関関係 81
図 9-81: 性別と歴史研究・伝統芸能への興味との相関関係 82
図 9-82: 性別と国際交流活動への興味との相関関係 82
図 9-83: 性別と防災活動への興味との相関関係 83
図 9-84: 性別と防犯・交通安全への興味との相関関係 83
図 9-85: 性別と自治会・コミュニティ事業への興味との相関関係 84
図 9-86: 性別と市政モニター・座談会への興味との相関関係 84
図 9-87: 地域活動への興味と参加意向との相関関係 85
図 9-88: 地域活動への参加意向と盆踊り・お祭りへの興味の相関関係 85
図 9-89: 地域活動への参加意向とフリーマーケットへの興味の相関関係 86
図 9-90: 地域活動への参加意向と趣味・スポーツサークルへの興味の相関関係 86

図 9-91: 地域活動への参加意向と道路・公園清掃への興味の相関関係 87
図 9-92: 地域活動への参加意向と高齢者・障害者介助への興味の相関関係................ 87
図 9-93: 地域活動への参加意向と子育て支援への興味の相関関係.............................. 88
図 9-94: 地域活動への参加意向と歴史研究・伝統芸能への興味の相関関係................ 88
図 9-95: 地域活動への参加意向と国際交流活動への興味の相関関係 89
図 9-96: 地域活動への参加意向と防災活動への興味の相関関係 89
図 9-97: 地域活動への参加意向と防犯・交通安全への興味の相関関係 90
図 9-98: 地域活動への参加意向と自治会・コミュニティ事業への興味の相関関係 90
図 9-99: 地域活動への参加意向と市政モニター・座談会への興味の相関関係 91
図 9-100: 多摩ニュータウン地域別印象平均点集計結果.. 91
図 9-101: 多摩ニュータウン地域別の美醜印象集計結果.. 92
図 9-102: 多摩ニュータウン地域別の明暗印象集計結果.. 92
図 9-103: 多摩ニュータウン地域別の快不快印象集計結果 92
図 9-104: 多摩ニュータウン地域別の清潔・不潔印象集計結果 93
図 9-105: 多摩ニュータウン地域別の人工・自然印象集計結果 93
図 9-106: 多摩ニュータウン地域別の楽しい・つまらない印象集計結果.......................... 93
図 9-107: 多摩ニュータウン地域別の暖か・寒々印象集計結果 94
図 9-108: 多摩ニュータウン地域別の閑静・騒々しい印象集計結果................................ 94
図 9-109: 多摩ニュータウン地域別の活気・不活性印象集計結果 94
図 9-110: 多摩ニュータウン地域別の安全・危険印象集計結果 95
図 9-111: 多摩ニュータウン地域別の近代的・伝統的印象集計結果 95
図 9-112: 多摩ニュータウン地域別の新しい・古い印象集計結果.................................... 95
図 9-113: 多摩ニュータウン地域別の雰囲気良い・殺伐印象集計結果........................... 96
図 9-114: 多摩ニュータウン地域別の開放的・閉鎖的印象集計結果 96